鳥取県教育文化財団調査報告書　114

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡2
坂長ヨコロ遺跡
坂長熊谷遺跡

2010

財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書　114

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡2
坂長ヨコロ遺跡
坂長熊谷遺跡

2010

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところでありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成20年度に調査を行った坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡では、古墳時代中期の古墳や後期の竪穴住居跡などが発掘され、土器や玉類など多彩な遺物が出土し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。そして、このたび、それらの調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成22年　3月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有　田　博　充

例　　言

1．本報告書は「一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として実施した坂長下門前遺跡２区・３区、坂長ヨコロ遺跡１区・２区、坂長熊谷遺跡１区・２区の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の調査面積及び所在地は、以下のとおりである。

坂長下門前遺跡２区	(3,600㎡)	鳥取県西伯郡伯耆町坂長字下門前2023ほか	
坂長下門前遺跡３区	(4,500㎡)	同	字下門前2017ほか
坂長ヨコロ遺跡１区	(1,000㎡)	同	字ヨコロ1888ほか
坂長ヨコロ遺跡２区	(1,420㎡)	同	字ヨコロ1887ほか
坂長熊谷遺跡１区	(2,000㎡)	同	字熊谷1854ほか
坂長熊谷遺跡２区	(　780㎡)	同	字熊谷1808ほか

3．本報告書における座標は、世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標を、方位は座標方位を用いている。また、レベルは海抜標高である。

4．本報告書に使用した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の１/2,500地形図及び国土地理院発行の１/50,000地形図を縮小し、加筆して利用した。

5．本発掘調査における基準点測量と方眼測量は業者に委託したものである。

6．掲載した遺構図面は文化財主事又は調査補助員が作成と浄書を行った。

7．遺物の実測及び浄書は文化財主事又は整理作業員が行った。

8．遺構及び遺物の撮影は文化財主事が行った。

9．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．本報告書の作成は、高橋章司（坂長下門前遺跡）、坂本嘉和（坂長ヨコロ遺跡）、高橋浩樹（坂長熊谷遺跡）がそれぞれ担当した。

11．現地調査及び報告書の作成に当たっては、多くの方々から御指導、御助言、御支援いただいた。感謝いたします。

凡　　例

1．遺跡の略称は次のとおりとした。

坂長下門前遺跡	２区「下モン２」	３区「下モン３」
坂長ヨコロ遺跡	１区「ヨコロ１」	２区「ヨコロ２」
坂長熊谷遺跡	１区「クマタニ１」	２区「クマタニ２」

2．遺物には、すべて遺跡略称及び遺構番号を記載している。

3．遺構の略称は下記のとおりである。

SI：竪穴住居跡　SD：溝　SK：土坑　SX：墓

4．本報告書における遺物の略称及び縮尺は下記のとおりである。

番号のみ：土器・土製品（縮尺：１/４）　S：石器・石製品（縮尺：２/３等）　B：玉類（縮尺１/１）　F：鉄器（縮尺１/２）　C：銭貨（縮尺１/２）

5．遺物実測図中のトーンは、土器の場合赤色塗彩を表す。

6．本文中、挿図及び写真図版の遺物番号は一致する。

目　　次

序
例言・凡例

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2
第３節　調査体制 …… 6

第２章　位置と環境 …… 7
第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 7

第３章　坂長下門前遺跡２・３区の調査 …… 11
第１節　２区の調査 …… 11
１．概要 …… 11
２．遺構 …… 13
３．出土遺物 …… 13
第２節　３区の調査 …… 16
１．概要 …… 16
２．遺構 …… 19
３．遺構外出土遺物 …… 23
第３節　坂長35号墳の調査 …… 25
１．概要 …… 25
２．遺構と遺物 …… 25

第４章　坂長ヨコロ遺跡の調査 …… 32
第１節　立地と基本層序 …… 32
第２節　１区の調査 …… 34
１．概要 …… 34
２．遺構と遺物 …… 34
第３節　２区の調査 …… 36
１．概要 …… 36
２．遺構 …… 37
３．遺構外出土遺物 …… 39

第５章　坂長熊谷遺跡の調査 …… 45
第１節　１区の調査 …… 45
１．概要 …… 45
２．遺構 …… 46
３．遺構外出土遺物 …… 46
第２節　２区の調査 …… 48
１．概要 …… 48
２．遺構 …… 49
３．遺構外出土遺物 …… 50

第６章　まとめ …… 52

挿図目次

第１章　調査の経緯と経過
第１図　調査地位置図……1
第２章　位置と環境
第２図　遺跡位置図……7
第３図　周辺遺跡分布図……9
第３章　坂長下門前遺跡２区・３区の調査
第４図　２区グリッド図……11
第５図　２区基本層序……11
第６図　２区遺構分布図……12
第７図　遺構外出土遺物……13
第８図　SK1～SK5……14
第９図　SK6～SK10……15
第10図　３区グリッド図……16
第11図　３区基本層序……16
第12図　３区遺構分布図……17
第13図　SK1～SK5および出土遺物……18
第14図　SK6～SK8および出土遺物……20
第15図　SD1……21
第16図　土塁および出土遺物……22
第17図　SD2および出土遺物……23
第18図　遺構外出土遺物（１）……24
第19図　遺構外出土遺物（２）……24
第20図　坂長35号墳……26
第21図　坂長35号墳断面図……27
第22図　坂長35号墳埋葬施設……29
第23図　坂長35号墳出土土器……30
第24図　坂長35号墳出土玉類……31
第４章　坂長ヨコロ遺跡の調査
第25図　１区土層断面図……32
第26図　坂長ヨコロ遺跡遺構分布図……33
第27図　２区土層断面図……34
第28図　SK1……34
第29図　SK2……35
第30図　SK3……35
第31図　SK4……35
第32図　SK4出土遺物……35
第33図　SX1……36
第34図　SX1出土土器……36
第35図　SI1……37
第36図　SI1出土遺物……38
第37図　SX2……39
第38図　SX2出土土器……39
第39図　遺構外出土遺物（１）……40
第40図　遺構外出土遺物（２）……41
第41図　遺構外出土遺物（３）……43
第42図　遺構外出土遺物（４）……44
第43図　遺構外出土遺物（５）……44
第５章　坂長熊谷遺跡の調査
第44図　調査区土層断面図……45
第45図　遺構分布図……46
第46図　SK1……46
第47図　遺構外出土遺物……47
第48図　調査区土層断面図……48
第49図　遺構分布図……49
第50図　SK1……50
第51図　SD1・2……50
第52図　石列１・２……50
第53図　遺構外出土遺物……51

挿表目次

第３章　坂長下門前遺跡２区・３区の調査
第１表　２区落とし穴一覧表……13
第２表　３区落とし穴一覧表……19
第３表　３区墓壙一覧表……20

図版目次

カラー図版

1—1　坂長35号墳出土土器
1—2　坂長35号墳出土玉類
1—3　坂長35号墳棺痕跡（北から）
2—1　坂長ヨコロ遺跡SX1出土備前焼壺
2—2　坂長ヨコロ遺跡出土陶磁器

図版

坂長下門前遺跡２区

3—1　調査地周辺の地形（南東から）
3—2　調査地周辺の地形（上が北）
4—1　SK1完掘状況（西から）
4—2　SK2完掘状況（南から）
4—3　SK3完掘状況（東から）
4—4　SK4完掘状況（南から）
4—5　SK5完掘状況（西から）
4—6　SK8完掘状況（東から）
4—7　SK7完掘状況（北から）
4—8　SK9完掘状況（東から）
5—1　SK10土層断面（北から）
5—2　SK3底面杭痕跡検出状況（南から）
5—3　調査区完掘状況（西から）

坂長下門前遺跡３区

6—1　調査地周辺の地形（南東から）
6—2　調査地周辺の地形（北西から）
7—1　調査地全景（北東から）
7—2　調査地全景（上が北）
8—1　SK1完掘状況（南から）
8—2　SK2完掘状況（東から）
8—3　SK6～SK8検出状況（北から）
8—4　SK6土器出土状況（東から）
8—5　SK7土層断面（北東から）
8—6　SK7完掘状況（北から）
9—1　土塁全景（西から）
9—2　SD2完掘状況（東から）
9—3　土塁土層断面（東から）
10—1　SK6出土土器
10—2　３区出土土器（１）
10—3　３区出土土器（２）
10—4　３区出土石器
10—5　土塁出土古銭

坂長35号墳

11—1　坂長35号墳全景（上が北）
11—2　坂長35号墳（東から）
12—1　棺痕跡検出状況（北から）
12—2　棺痕跡完掘状況（北から）
12—3　棺痕跡土層断面（北から）
13—1　墓壙完掘状況（北から）
13—2　墳丘除去後の状況（東から）
13—3　墳頂土器出土状況（東から）
14—1　周溝土器出土状況（１）（南から）
14—2　周溝土器出土状況（２）（南から）
14—3　周溝土器出土状況（３）（北から）
15—1　周溝土器出土状況（４）（南から）
15—2　周溝玉類出土状況（東から）
15—3　周溝土層断面（西から）
16　出土土器

坂長ヨコロ遺跡

17—1　調査地周辺の地形（西から）
17—2　調査地周辺の地形（北西から）
18—1　１区調査終了状況（南東から）
18—2　２区調査終了状況（東から）
19—1　SK1完掘状況（東から）
19—2　SK2完掘状況（北から）
19—3　SX1検出状況（東から）
19—4　SX1完掘状況（南東から）
20—1　SX2墓壙検出状況（北東から）
20—2　SX2土層断面（北から）
20—3　SX2完掘状況（北から）
21—1　SI1床面検出状況（北から）
21—2　SI1土層断面（南東から）
21—3　SI1床面土器出土状況（北から）
21—4　SI1完掘状況（北から）

22—1　SI1出土土器
22—2　SX2出土土器
22—3　遺構外出土土器（1）
23　遺構外出土土器（2）
24—1　出土石器・石製品
24—2　出土鉄製品およびX線画像

坂長熊谷遺跡

25—1　1区調査前の状況（北から）
25—2　1区調査終了状況（西から）
26—1　2区調査前の状況（北から）
26—2　2区調査終了状況（西から）
27—1　1区SK1完掘状況（南から）
27—2　SD1完掘状況（南東から）
27—3　SD2完掘状況（西から）
28—1　2区SK1完掘状況（南から）
28—2　石列1（東から）
28—3　石列2（西から）
29—1　1区出土土器
29—2　2区出土土器
30—1　1区出土青磁
30—2　1区出土石鍋
30—3　鉄器およびX線画像

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡は、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。これらの遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町地内の道路予定線上に位置し、坂長下門前遺跡に含まれる坂長35号墳を除いては、いずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったが、地形などから集落跡等が存在することが推定された。そこで、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国（文化庁）及び県の補助金を受けて平成17年度（坂長下門前遺跡）及び19年度（坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡）に、試掘調査を実施した。その結果、坂長下門前遺跡からは土器が出土し、古墳時代の集落跡が存在する可能性が想定された。坂長ヨコロ遺跡からは落とし穴などが出土し、縄文時代の遺跡が存在すると考えられた。坂長熊谷遺跡では、古墳状の地形が認められた。この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。

第１図　調査地位置図

第２節　調査の経過

平成20年度の発掘調査は、工事日程等の関係で、３遺跡６調査地を４期に分けて調査した。以下、調査を実施した順に経過を記載する。

坂長下門前遺跡２区

調査地は、高塚山と越敷山を主峰とする丘陵地帯から派生する尾根上に位置する。１辺約40～68mの四辺形の調査区を設定した。標高は最も高い所で84.5m、低い所で76.0mを測る。

３月18日に調査前航空撮影と航空写真による調査前地形測量を行った。４級基準杭と公共座標第Ⅴ系に基づく10m間隔の方眼杭の打設は測量業者に委託し、打設は４月中に発掘調査と並行して行った。方眼軸には、北から南にアルファベットを、西から東に数字を付し、方眼の呼称は、例えばA3というように北東角の杭で代表する。方眼についての原則は、他の遺跡でも同様である。

３月24日から３月27日まで、重機による表土剥ぎを実施した。遺物が全く出土しなかったため、表土剥ぎは現地表下約40㎝の漸移層上面で止めた。

発掘作業員の稼動は４月８日に開始した。遺構検出はローム層上面で行い、遺構の掘削は４月21日から着手した。多くの木の根痕や風倒木痕に混じり、落とし穴10基を検出した。遺構の調査は５月27日に終了した。

谷を挟んで東隣の坂長下門前遺跡１区の調査で旧石器の可能性がある石器が出土したため、遺構の調査と並行して、ローム層の調査を５月７日から５月28日まで行った。遺物は出土しなかった。

５月28日にすべての掘削作業を、５月29日にすべての調査を終了した。

○坂長下門前遺跡２区の調査経過

３月18日　調査前航空撮影
３月24日～３月27日　重機による表土剥ぎ
４月８日　発掘作業員稼働開始
４月17日　方眼測量
４月21日　遺構調査開始
５月７日　ローム層掘削開始
５月15日　調査後地形測量終了
５月27日　遺構調査終了
５月28日　掘削作業終了
５月29日　調査終了

坂長ヨコロ遺跡

調査地は、１区（東西51m南北27m）が急峻な尾根上に位置し標高71.5m～84.0mを測り、２区（東西72m南北28m）が部分的にテラス状の平坦面が介在する急斜面の丘陵裾部にあり標高58.0m～71.0mを測る。１区と２区は約20m離れている。

測量業者に委託して、調査前地形測量のデータ採取を兼ねた調査前航空撮影を６月12日に実施し

た。４級基準杭と公共座標第Ｖ系に基づく10m間隔の方眼杭は、表土剥ぎ後の６月中に打設した。

重機による表土剥ぎは、６月17日から６月26日まで実施し、現地表下約20㎝～50㎝の黒色土上面で止めた。この間の６月23日には、１区の地表面直下から備前焼の壺が出土した。２区西側の急斜面部分の表土剥ぎについては発掘作業員稼働後に人力で行ったが、予想以上に表土が厚かったため、７月24日と25日の両日に、再度重機を用いて行った。

発掘作業員の稼動は７月１日に開始した。まず、１区の備前焼が出土した周辺から包含層の調査に着手した。遺構掘削は７月９日に始め、７月16日までに４基の落とし穴などを調査した。調査後地形測量を行って、７月22日に１区の調査を終えた。

７月４日から１区と同時進行で２区の調査に入った。７月28日から遺構掘削に入り、古墳時代の竪穴住居跡１棟と中世墓１基などを調査した。遺構調査は８月20日に終わり、同日にすべての調査を終了した。この間、８月６日には、伯耆町の小学生ほか35名（ふるさと探検隊）の見学があった。

○坂長ヨコロ遺跡の調査経過

６月12日　調査前航空撮影
６月17日～６月26日　重機による表土剥ぎ。23日に備前焼壺出土
７月１日　発掘作業員稼働開始。１区調査開始
７月４日　２区調査開始
７月９日　１区遺構調査開始
７月22日　１区調査終了
７月24・25日　２区西側斜面部の重機による表土剥ぎ
７月28日　２区遺構調査開始
８月４日　竪穴住居跡SI1掘削開始
８月６日　伯耆町小学生等35名見学
８月20日　調査終了

坂長下門前遺跡３区

調査地は、坂長下門前遺跡２区から谷を隔てた東側の尾根上に位置する。１辺約70mのほぼ菱形の調査区を設定した。標高は最も高い所で90.0m、低い所で81.5mを測る。

７月26日に、測量業者に委託して、調査前地形測量を兼ねて調査前航空撮影を行った。

重機による表土剥ぎは７月29日から８月９日まで実施した。現地表下約30㎝の黒色土上面を目安とした。調査区の南西部分約900㎡には、坂長35号墳と尾根を横断する土塁が含まれていたため、重機は用いずに、作業員稼働後に人力による表土剥ぎを行った。

測量業者に委託し、４級基準杭と公共座標第Ｖ系に基づく10m間隔の方眼杭を８月５日までに打設した。

発掘作業員の稼動は８月18日に開始した。まず、９月２日にかけて表土の手剥ぎを行い、同時進行で８月22日からは包含層の掘削作業に入った。遺構の検出はローム層上面で行い、遺構の掘削は９月５日から着手した。３基の墓壙と５基の落とし穴などを確認し、遺構の調査が終了したのは10月27日であった。

坂長35号墳は高さが約１mで、伯耆町による試掘でも黒色土が確認されるのみであったため、調査開始時点では古墳でない可能性が高かった。そこで、８月27日には坂長35号墳の墳裾からトレンチ調査を開始した。周溝や埋葬施設は不明瞭で、９月９日に至ってようやくトレンチ断面に棺痕跡らしき土層を認め、古墳であることを確認した。棺内と推定された部分の土は、岸本調査事務所に持ち帰り水洗選別を実施したが、無遺物であった。最終的には35号墳の墳丘をすべて除去し、他に埋葬施設が設けられていないか調べたが、認められなかった。

10月20日に35号墳と土塁の状況を記録するため航空撮影を行った。撮影後、墳丘の掘り下げと土塁の除去を行った。土塁の除去は、下層に遺構が存在する可能性がある丘陵中央部に限った。また、石英製石核が出土したため、10月29日にかけてローム層の調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

10月31日に掘削作業を、11月４日にすべての調査を終了した。

○坂長下門前遺跡３区の調査経過

７月26日　調査前航空撮影（調査前地形測量用を兼ねる）
７月29日～８月１日　重機による表土剥ぎ
８月５日　方眼測量終了
８月18日　発掘作業員稼働開始
８月18日～９月２日　坂長35号墳および土塁の人力による表土剥ぎ
８月27日　坂長35号墳調査開始
９月４日　土塁調査開始
９月５日　遺構調査開始
10月20日　35号墳および土塁航空撮影、土塁除去およびローム層掘削開始
10月27日　35号墳墳丘除去開始
10月31日　掘削作業終了
11月４日　調査後地形測量終了。調査終了

坂長熊谷遺跡

調査地は、１区が丘陵裾部の標高62.0m～83.0mの急斜面部に位置し、東西約55m南北約45mの範囲を占める。２区には古墳状の高まりが乗る丘陵裾部の張り出しと浅い谷頭とが含まれ、標高は64.0m～69.0mを測る。東西約70m南北約15mの細長い調査区である。２つの調査区は約70mを隔てる。

調査に先立って９月２日に測量業者に委託して調査前航空写真撮影と調査前地形測量を行った。

９月８日から11日に重機による表土剥ぎを実施した。２区中程の古墳状地形部は人力で表土剥ぎをするために除外した。また、１区の北西部分は、厚い造成土で覆われていることが調査中に判明したため、11月13日に重機による表土剥ぎを再度行った。

９月22日から24日には業者委託により４級基準点と公共座標第Ⅴ系に基づく10m間隔の方眼杭を設置した。

発掘作業員の稼動は、11月５日に開始し、調査は１区と２区を並行して実施した。

１区の西側谷部は、上方からの崩落土が１m以上堆積し無遺物であるため、この部分の調査は表土を除去するのみで終えた。また、南西部には水源地工事の際の排土が厚く堆積しており、まず遺構と

遺物の有無を確認するためにトレンチを設定した。その結果、工事の際に削平されていることが明らかで遺物も出土しなかったので、この部分の調査を終了することとした。検出した遺構は土坑１基で、全ての調査は12月１日に終了した。

２区は11月６日から人力による古墳状の高まりの表土剥ぎに着手した。遺構も遺物も出土しなかったため、最終的には古墳ではないと判断した。検出した遺構は落とし穴１基と石列２基などで、調査は12月３日に終了した。

○坂長熊谷遺跡の調査経過

９月２日　調査前航空撮影
９月８日～９月11日　重機による表土剥ぎ
９月22日～９月24日　方眼杭打設
11月５日　作業員稼働開始。１区調査開始
11月６日　２区調査開始
11月13・14日　重機による１区造成土掘削
11月14日　遺構調査開始
12月１日　１区調査終了
12月３日　２区調査終了

第３節　調査体制

調査は以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長	有田　博充
事務局長	中村　金一
事務職員	岡田美津子（兼務　調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室　長	久保穰二朗（本務　県埋蔵文化財センター所長）
次　長	石本　富正
文化財主事	大川　泰広（鳥取県教育委員会　派遣）
事務職員	岡田美津子
	福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室　岸本調査事務所

所　長	國田　俊雄
文化財主事	高橋　浩樹（財団法人米子市教育文化事業団　派遣）
	高橋　章司（鳥取県教育委員会　派遣）
	坂本　嘉和（鳥取県教育委員会　派遣）

○調査協力

財団法人米子市教育文化事業団　西部土地改良区　伯耆町教育委員会

（五十音順、敬称略）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、今回調査した遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北８㎞東西３㎞にわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

調査対象の３遺跡は、いずれも越敷山からのびる丘陵の末端に立地する。丘陵の北には、東西方向に谷が走る。この谷は湧水が豊富で、坂長ヨコロ遺跡の西方と坂長熊谷遺跡の南方には現在も水源地が存在する。谷の北側には長者原台地が広がり、多くの遺跡が分布する。

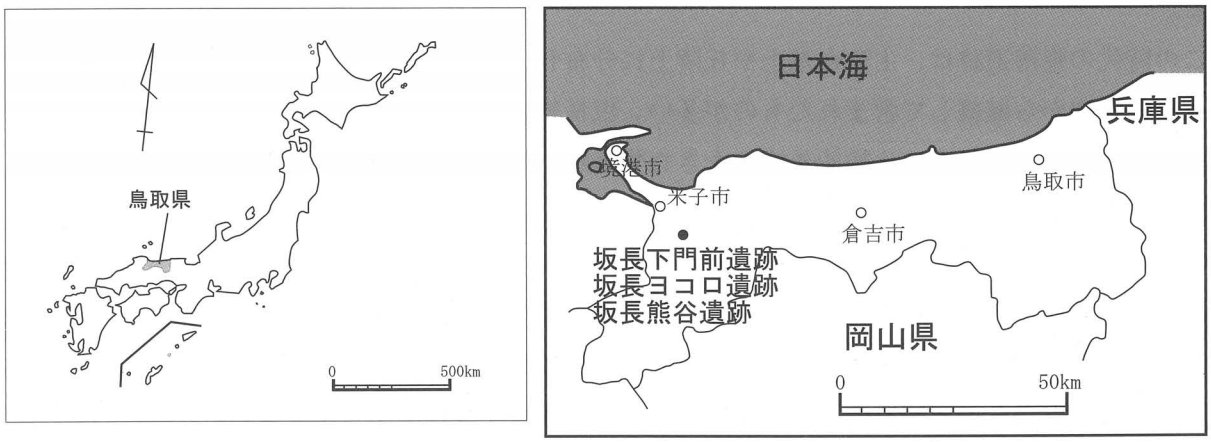
第２節　歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。２点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡(50)からも、黒曜石製のナイフ形石器が１点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の５点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。



第２図　遺跡位置図

他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つかっている。

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（８）や陰田第９遺跡（９）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（８）や長砂第２遺跡（４）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に竪穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点的集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下１号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山１号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獣鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺１・２号墳（35）、方墳で６基の埋葬施設をもつ日原６号墳（19）がある。墳丘規模20m前後の比較的小さな古墳が多い。

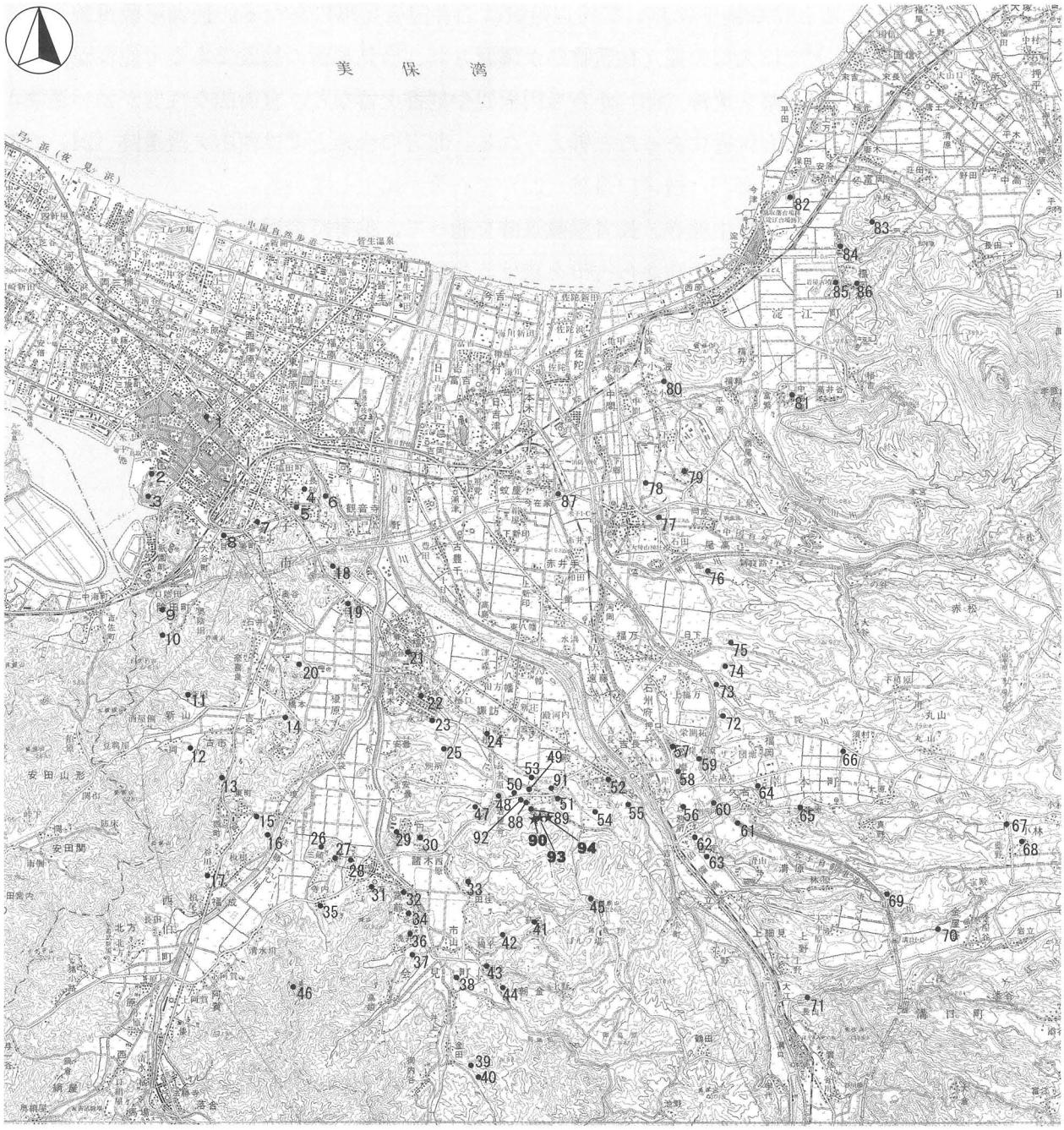
中期古墳としては、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。他には画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前３号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定１号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像５号墳（18）の横口式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（９）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第８遺跡（89）では中期中葉の竪穴住居跡が３棟発掘されていて、付近に比較的規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舎利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に１例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。長者原台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。



1	錦町第１遺跡	17	清水谷遺跡	33	田住古墳群	49	坂長下屋敷遺跡	65	番原遺跡群	81	井手胯遺跡
2	久米第１遺跡	18	東宗像古墳群	34	宮前遺跡	50	坂長村上遺跡	66	須村遺跡	82	今津岸の上遺跡
3	米子城	19	日原古墳群	35	普段寺１号墳	51	坂中廃寺	67	真野ブナ遺跡	83	妻木晩田遺跡
4	長砂第１・２遺跡	20	奈喜良遺跡	36	浅井11号墳	52	大寺廃寺	68	藍野遺跡	84	晩田遺跡
5	長砂第３遺跡	21	福市遺跡	37	浅井土居敷遺跡	53	長者原古墳群	69	林ケ原遺跡	85	向山古墳群
6	水道山古墳	22	青木遺跡	38	天王原遺跡	54	坂中第５遺跡	70	下山南遺跡	86	上淀廃寺跡
7	池ノ内遺跡	23	樋ノ口第４遺跡	39	金田瓦窯	55	岸本大成遺跡	71	長山馬籠遺跡	87	今在家下井ノ原遺跡
8	目久美遺跡	24	諏訪西山ノ後遺跡	40	両部太郎窯	56	岸本古墳群	72	石州府古墳群	88	坂長第７遺跡
9	陰田遺跡群	25	別所新田遺跡	41	荻名遺跡群	57	岸本遺跡	73	上福万遺跡	89	坂長第８遺跡
10	奥陰田遺跡群	26	三崎殿山古墳	42	田住松尾平遺跡	58	岸本要害跡	74	日下寺山遺跡	**90**	**坂長下門前遺跡**
11	新山遺跡群	27	天萬土居前遺跡	43	朝金古墳群	59	岸本下の原遺跡	75	日下古墳群	91	大殿狐谷遺跡
12	古市遺跡群	28	宮尾遺跡	44	朝金小チヤ遺跡	60	久古第３遺跡	76	尾高浅山遺跡	92	坂長第６遺跡
13	吉谷遺跡群	29	諸木遺跡	45	越敷山遺跡群	61	貝田原遺跡	77	尾高城	**93**	**坂長ヨコロ遺跡**
14	橋本遺跡群	30	後埒山古墳	46	手間要害跡	62	口別所古墳群	78	尾高御建山遺跡	**94**	**坂長熊谷遺跡**
15	福成石佛前遺跡	31	天万遺跡	47	荒神上遺跡	63	吉定１号墳	79	泉中峰・前田遺跡		
16	福成早里遺跡	32	宮前３号墳	48	長者屋敷遺跡	64	久古北田山遺跡	80	小波原畑遺跡		

0　1:100,000　2km

第３図　周辺遺跡分布図

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）や坂長第６遺跡(92)などでは大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡（50）や坂長第７遺跡（88）からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口遺跡（23）で石帯が出土している。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通って、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。坂長第６遺跡では、多くの鉄滓や羽口などが出土し、郡衙に伴う官営製鉄工房として注目される。坂長村上遺跡や長者原18号墳（91）周溝上層などからも多くの鉄関連遺物が出土しており、この地方での製鉄の開始が、文献に記された年代よりも大きく遡ることは確実である。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄８年(1565)に、杉原盛重に焼き討ちされた。坂中地区の旦那寺である普門寺は、元はこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80)、尾高城（77)、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長４年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和３年（1617）に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永９年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか２戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和４年(1618)から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

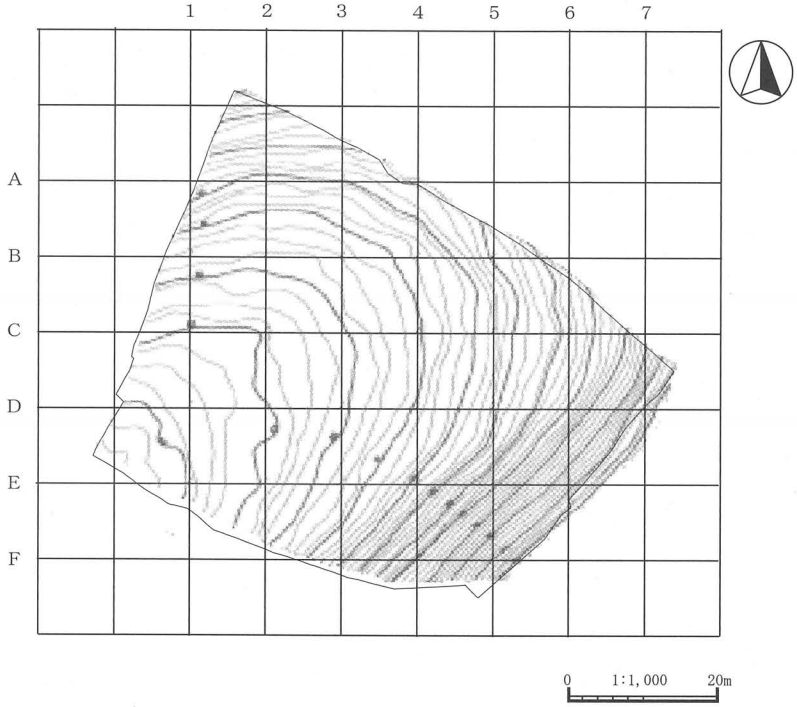
地質調査所　1962『５萬分の１地質図幅説明書　米子』（岡山―第18号）
山名巌　1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』
岸本町　1983『岸本町誌』
会見町　1996『会見町誌　続編』
米子市　2003『新修　米子市史』

第３章　坂長下門前遺跡２・３区の調査

第１節　２区の調査

１．概要

坂長下門前遺跡２区は西伯郡伯耆町の西部、坂長地区に所在する。調査地は、越敷山からのびる丘陵の末端に近い尾根に位置し、標高は76.0m～84.5mを測る。尾根上の比較的平坦な部分の幅は約25mにすぎず、北東方向に向かって緩やかに傾斜する。調査地の東側と西側は急斜面地で、調査地の約半分を占める。調査前の状況は山林で、人為的な地形の改変や耕作の痕跡は全く認められなかった。平成18年度の発掘調査で14基の土坑が検出された坂長下門前遺跡１区は幅約90mの谷を隔てて西側に、後述する３区は幅約70mの谷を隔てて東側に位置する。



第４図　２区グリッド図

調査地の基本的な層序は、次の通りである（第５図）。１区と３区の基本層序とほぼ同じである。

Ⅰ層：表土。層厚約20cm。腐植土。

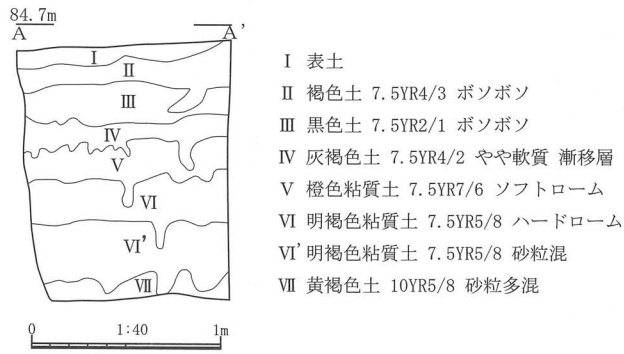
Ⅱ層：褐色土。層厚約20cm。

Ⅲ層：黒色土。層厚約15cm。

Ⅳ層：灰褐色土。やや粘質。層厚約20cm。無遺物。漸移層。

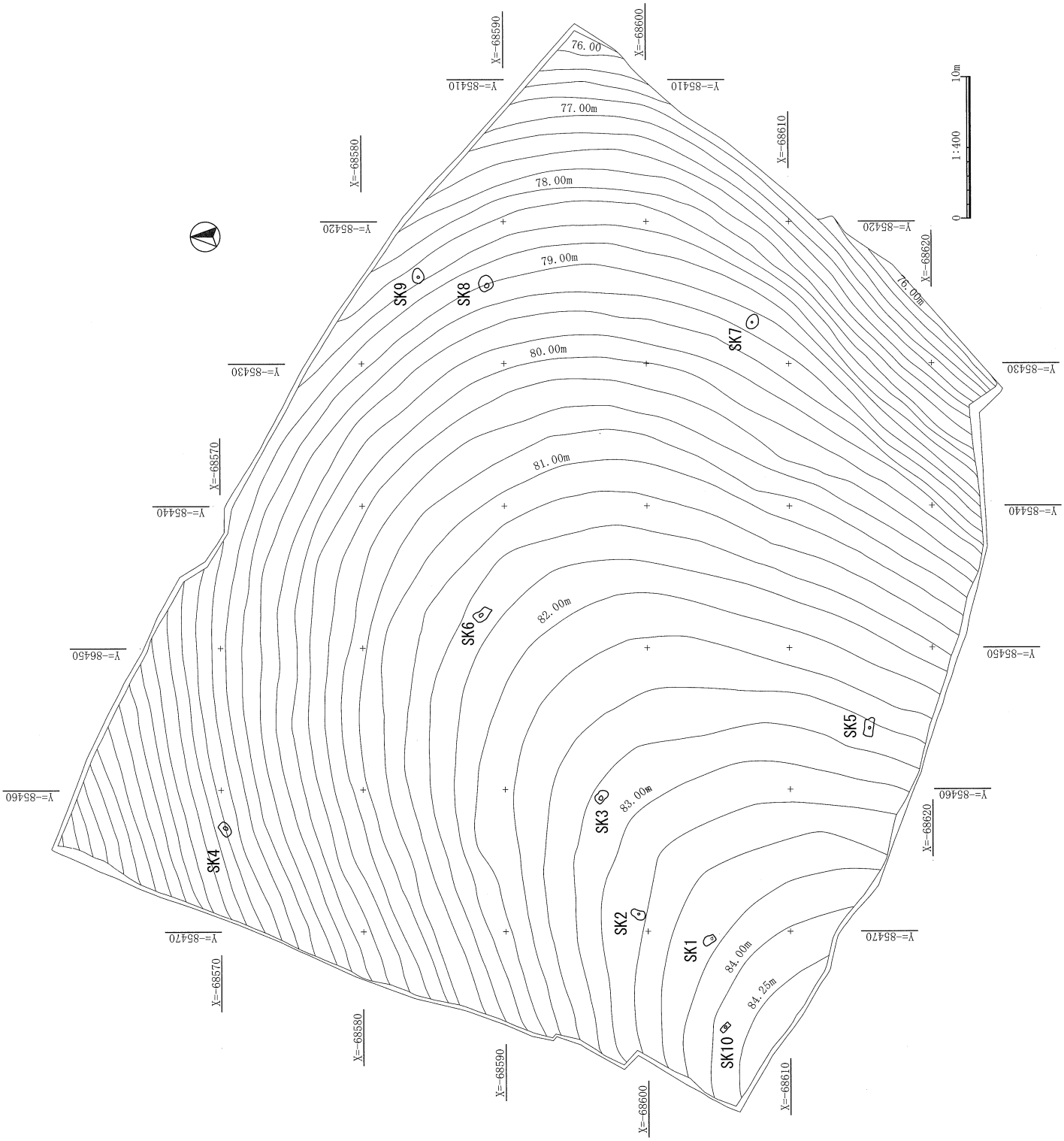
Ⅴ層：橙色粘質土。層厚約20cm。ソフトローム。風倒木痕や木の根跡が多く見られる。

Ⅵ層：明褐色粘質土。層厚約30cm。ハードローム。



第５図　２区基本層序

坂長下門前遺跡２区から検出した遺構は土坑10基で、いずれも落とし穴である。出土遺物は土器片２点のみで、遺構・遺物ともに非常に希薄であった。


76.00
77.00m
78.00m
79.00m
80.00m
81.00m
82.00m
83.00m
84.00m
84.25m
76.00m
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
X=-68590
X=-68600
X=-68610
X=-68620
X=-68580
X=-68570
Y=-85410
Y=-85420
Y=-85430
Y=-85440
Y=-85450
Y=-85460
Y=-85470
0
1:400
10m

第６図　２区遺構分布図

２．遺構

落とし穴　SK1～SK10（第８・９図　図版４・５）

検出した土坑10基は、形態から落とし穴と考えられる。

第１表に一覧を掲げる。底面の平面形から、円形のもの（SK7・8・9）と、長方形あるいは長楕円形のもの（それ以外）の２種類に分類される。深さについても、前者は140cm程度、後者は多くが100cm程度を測り、概ね２分できる。また、位置についても、円形のものは東あるいは南斜面上に設けられ、長方形のものはほとんどが尾根上に掘られている。以上から、両者はそれぞれ群をなすもので、おそらく異なる時期につくられたものと考えられる。

底面ピットは、すべての土坑で１つだけ設けられている。SK3・6・8・10の４基については、底面で杭痕跡を検出でき、３本または４本の細い杭が立てられていたことが分かった（図版５）。全体に小型であるSK10以外は、いずれも底面ピットの径は約30cm程度を測る。同様の底面ピットをもつSK4では、複数の杭が立てられていた可能性が高い。他の５基の底面ピットは径15cm程度の小さなもので、おそらく杭の本数は１本であったであろう。したがって、同時期に設けられた落とし穴でも、内部の構造は多様であったと考えられる。なお、西隣の丘陵上に位置する坂長下門前遺跡１区の12基の落とし穴は、底面の平面形が円形または楕円形で底面ピットをもたないものが多い点で、東隣の３区の落とし穴５基は長楕円形で底面ピットが浅い点で、それぞれに形態が異なっており、別々の時期に掘られたと思われる。そのなかでも、２区の長方形の一群は個性の強いものである。

遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、周辺地域での調査例から、縄文時代に属する可能性が高いと考えられる。

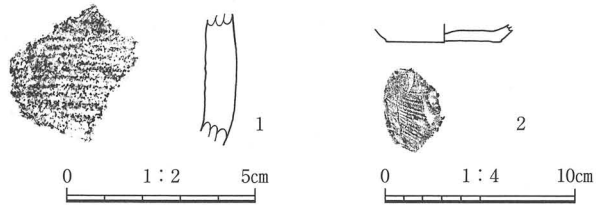
第１表　２区落とし穴一覧表

	検出面(cm)			底面(cm)			深さ	底面ピット(cm)				位置	備考
	形態	長軸	短軸	形態	長軸	短軸	(cm)	数	杭痕	径	深さ		
SK1	長方形	93	50	長方形	80	42	104	1		18×13	39	尾根上	
SK2	長楕円形	106	66	長楕円形	92	48	132	1		19×14	28	尾根上	
SK3	長楕円形	100	65	長方形	79	34	103	1	4	30×25	41	尾根上	
SK4	長方形	101	69	長方形	87	58	97	1		32×23	43	丘陵西斜面	
SK5	長方形	133	62	長方形	75	28	120	1		19×15	45	丘陵東肩部	
SK6	長方形	120	71	長方形	90	44	113	1	3	32×20	66	尾根上	
SK7	楕円形	108	80	楕円形	71	47	148	1		14×12	33	丘陵東斜面	
SK8	円形	116	103	楕円形	74	50	146	1	4	34×27	40	丘陵北斜面	
SK9	楕円形	106	82	楕円形	53	35	138	1		17×16	37	丘陵北斜面	
SK10	長方形	74	35	長方形	58	26	90	1	3	21×16	34	尾根上	

３．出土遺物（第７図）

２区から出土した遺物は土器片２点のみである。

１は東斜面の木の根痕から出土した土師器の細片で、表面にハケメをもつ。古墳時代頃のものであろう。２は東斜面から表面採集した土師皿の底部片で中世のものである。

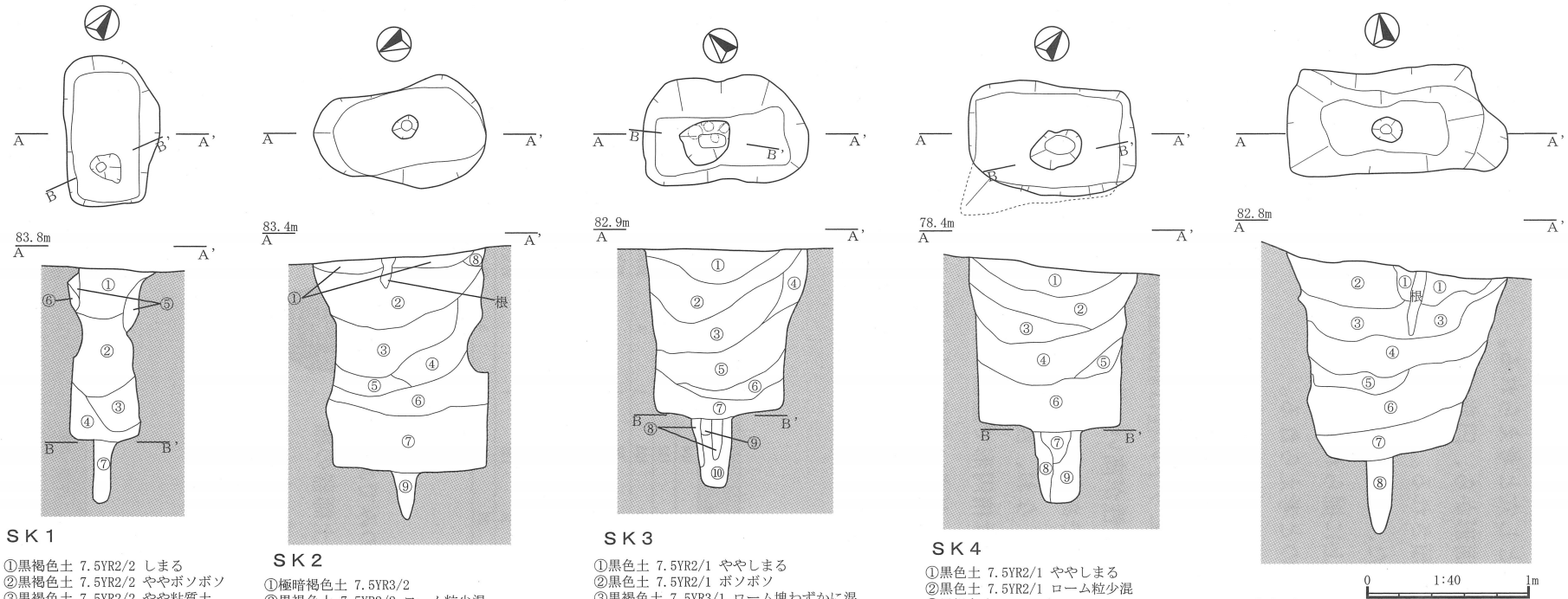


第７図　遺構外出土遺物

第７図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
1	7	木の根痕埋土	土師器		△3.6	外面：ハケメ 内面：ケズリ	密　細かい砂粒を多く含む 良好	外面：鈍い橙色 内面：灰褐色	
2	7	表面採集	土師器 皿	＊6.0	△0.7	内外面：ナデ 底部：糸切り	密 良好	内外面：鈍い黄橙色	



ＳＫ１

①黒褐色土 7.5YR2/2 しまる
②黒褐色土 7.5YR2/2 ややボソボソ
③黒褐色土 7.5YR2/2 やや粘質土
ローム粒わずかに混
④黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混
やや粘質
⑤褐色土 7.5YR4/3 ローム塊少混
⑥褐色土 7.5YR4/3 ローム塊混
ややしまる
⑦灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒混
やや粘質

ＳＫ２

①極暗褐色土 7.5YR3/2
②黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少混
③黒褐色土 7.5YR2/2 ボソボソ ローム粒混
④黒褐色土 7.5YR2/2 ボソボソ ローム粒少混
⑤黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒多混
⑥黒褐色土 7.5YR3/2 ボソボソ ローム粒混
⑦暗褐色土 7.5YR3/3 ボソボソ ローム粒多混
⑧褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混
⑨褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ボソボソ
ローム粒混・炭少混

ＳＫ３

①黒色土 7.5YR2/1 ややしまる
②黒色土 7.5YR2/1 ボソボソ
③黒褐色土 7.5YR3/1 ローム塊わずかに混
④褐色土 7.5YR4/3 ローム塊混
⑤黒褐色土 7.5YR2/2 やや粘質 ローム塊
少混
⑥黒褐色土 7.5YR2/2 やや粘質 ローム塊
（大）混
⑦黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒わずかに混
⑧黒色土 7.5YR2/1 砂粒少混
⑨黄褐色土 10YR5/8 砂粒多混 黒色土少混
しまる
⑩黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 ボソボソ
砂粒少混

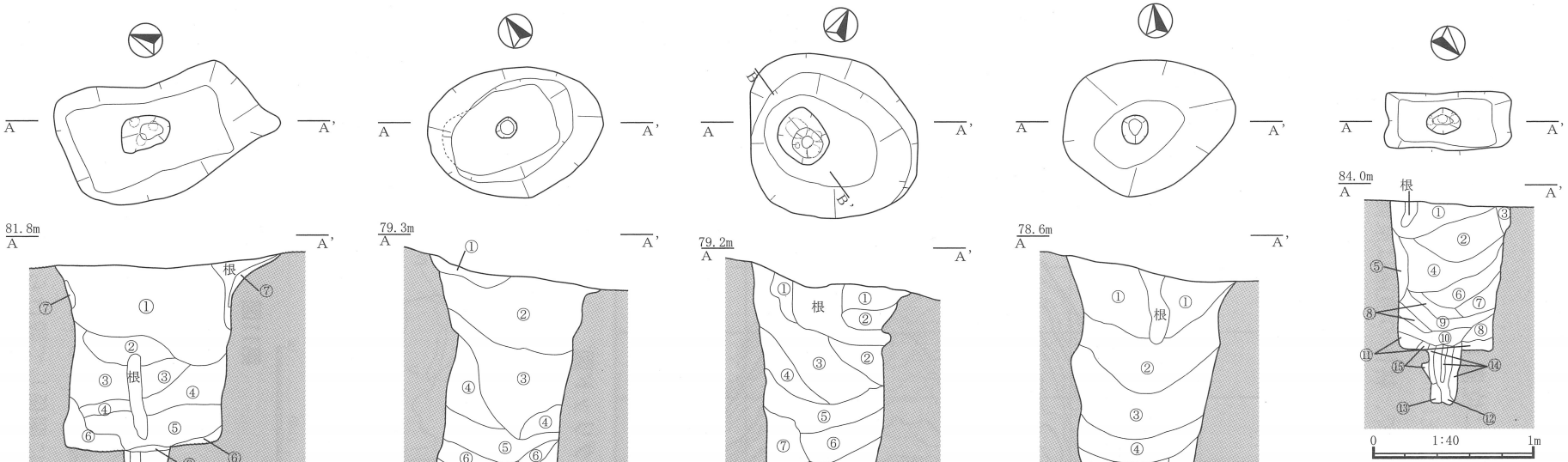
ＳＫ４

①黒色土 7.5YR2/1 ややしまる
②黒色土 7.5YR2/1 ローム粒少混
③黒褐色土 7.5YR2/2
④黒褐色土 7.5YR2/2 ローム塊わずかに混
⑤黒褐色土 7.5YR2/2 やや粘質
⑥黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 ローム塊混
⑦明褐色粘質土 7.5YR5/8 しまる 黒色土
わずかに混
⑧灰褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ボソボソ
ローム塊少混
⑨黄褐色土 10YR5/8 砂粒多混 黒色土少混

ＳＫ５

①暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒少混
②暗褐色土 7.5YR3/4 ボソボソ
③暗褐色土 7.5YR3/4 ボソボソ ローム粒混
④暗褐色土 7.5YR3/3 ボソボソ ローム粒混
⑤暗褐色土 7.5YR3/3 ボソボソ
⑥暗褐色土 7.5YR3/3 ボソボソ ローム塊少混
⑦褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ローム塊多混
⑧明褐色土 7.5YR5/6 ボソボソ 黒色土わずかに混

第８図　SK1～SK5



ＳＫ６

①黒褐色土 7.5YR2/2 しまる 炭少混
②黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少混 ややしまる
③暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊混
④黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少混
⑤褐色土 7.5YR4/3 ローム塊多混 やや粘質
⑥暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒混 やや粘質
⑦褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混
⑧黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 砂粒混
⑨灰褐色粘質土 7.5YR4/2 砂粒混
⑩褐色土 7.5YR4/2 やや粘質 ボソボソ 明褐色土多混

ＳＫ７

①褐色土 7.5YR4/3 ローム塊混
②暗褐色土 7.5YR3/4 ローム塊混しまる
③暗褐色土 7.5YR3/4 ややボソボソ ローム塊・炭混
④暗褐色土 7.5YR3/4 ボソボソ ローム塊多混
⑤褐色土 7.5YR4/3 ローム塊混 やや粘質
⑥褐色土 7.5YR4/3 ローム塊多混 やや粘質
⑦暗褐色土 7.5YR3/3 やや粘質 ローム塊少混
⑧褐色土 7.5YR4/4 やや粘質 ローム塊多混 炭混
⑨灰褐色土 7.5YR4/2 やや粘質 ローム塊多混
⑩明褐色土 7.5YR5/8 砂粒多混 ボソボソ 黒色土少混

ＳＫ８

①暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊しまる
②暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊混 やや ボソボソ
③褐色土 7.5YR4/3 ボソボソ ローム塊混
④黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊多混
⑤灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊多混
⑥暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊混やや 粘質
⑦灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊多混 ボソボソ
⑧灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊・ローム粒 極多混 ボソボソ やや粘質
⑨明褐色土 7.5YR5/8 砂粒混ボソボソ わずかに黒色土混
⑩灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒・砂粒混 ボソボソ
⑪明褐色土 7.5YR5/8 砂粒多混黒色土混

ＳＫ９

①極暗褐色土 7.5YR3/2 しまる ローム塊混
②極暗褐色土 7.5yr3/2 ローム塊混
③褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ローム塊多混
④褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ローム塊極多混 一部しまる
⑤黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少混 ボソボソ やや粘質
⑥灰褐色土 7.5YR4/3 ローム塊混炭混
⑦黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 砂粒混 ローム粒混

ＳＫ10

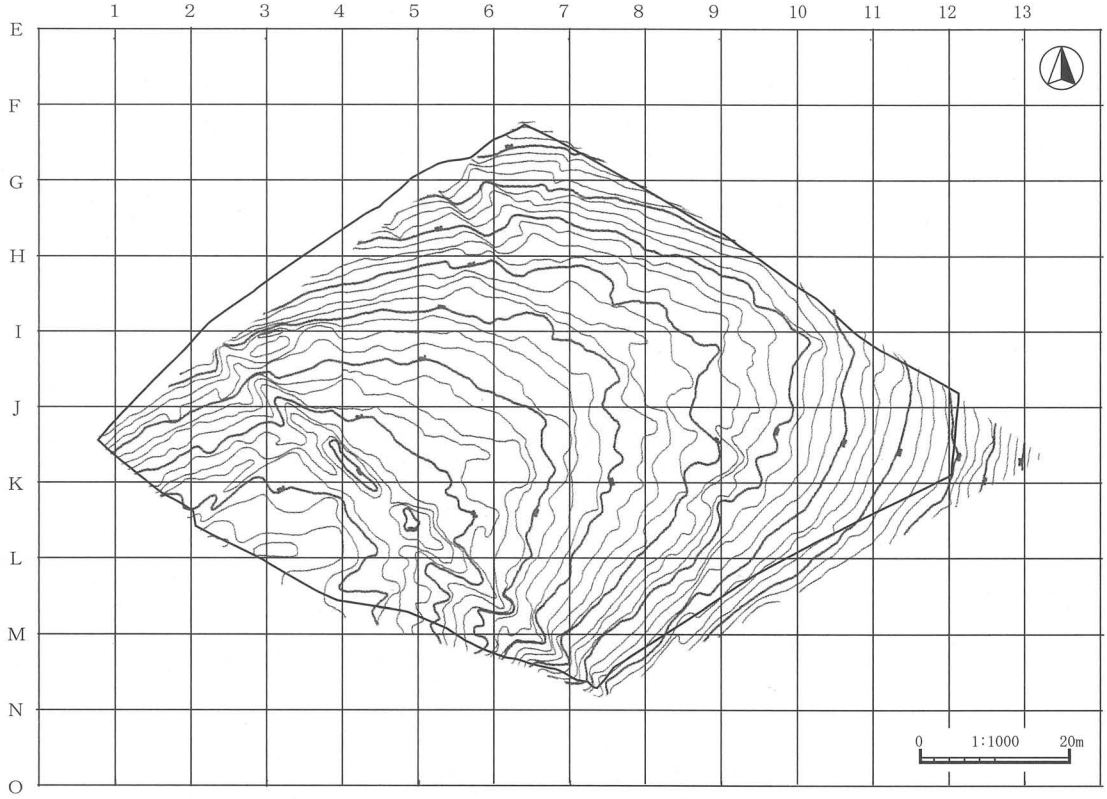
①黒色土 7.5YR2/1 しまる ローム粒少混
②黒色土 7.5YR2/1 しまる
③黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒混
④黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 灰褐色 粘質土少混
⑤黒褐色土 7.5YR2/1 ローム塊多混 やや粘質
⑥黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混 やや粘質
⑦褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ローム塊混
⑧黒褐色土 7.5YR3/2 ボソボソ やや粘質
⑨灰褐色土 7.5YR4/2 やや粘質 ローム 塊少混
⑩黒褐色土 7.5YR3/2 ボソボソ やや粘質 ローム塊少混
⑪褐色土 7.5YR4/3 やや粘質 ローム塊混
⑫明黄褐色土 2.5Y6/8 砂粒多混 褐色土 少混 しまる
⑬褐色土 7.5YR4/3 明黄褐色土混 やや粘質
⑭黒褐色土 7.5YR3/1 砂粒多混 ボソボソ
⑮明黄褐色土 2.5Y6/8 砂粒多混 褐色土混

第９図　SK6～SK10

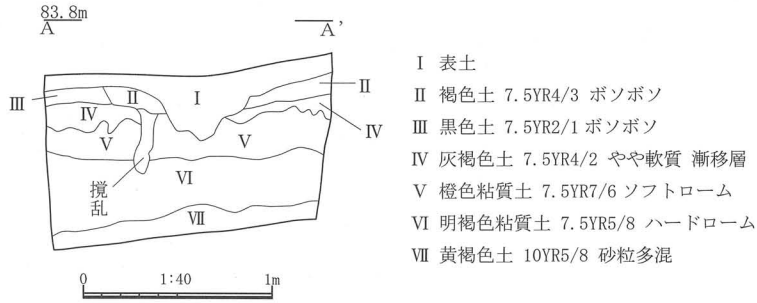
第２節　３区の調査

１．概要

坂長下門前遺跡３区は、２区の東隣の丘陵先端近くに位置し、標高は81.5m～90.0mを測る。調査地の中央は幅40mほどの傾斜の緩い面で、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。南西側を除く三方は比較的急な斜面地である。調査前の状況は山林で、耕作の痕跡は東側の一部を除いて顕著ではなかった。調査区の南西６分の１の部分は、丘陵を横断して設けられた土塁によって区切られている。北東斜面の下には普門寺があり、正確な年代は不明ながら16世紀に創建されたといわれ、大寺地区にあった安国寺の奥の院と伝えられている。なお調査区の南西部に所在する坂長35号墳については、節を改めて報告する。



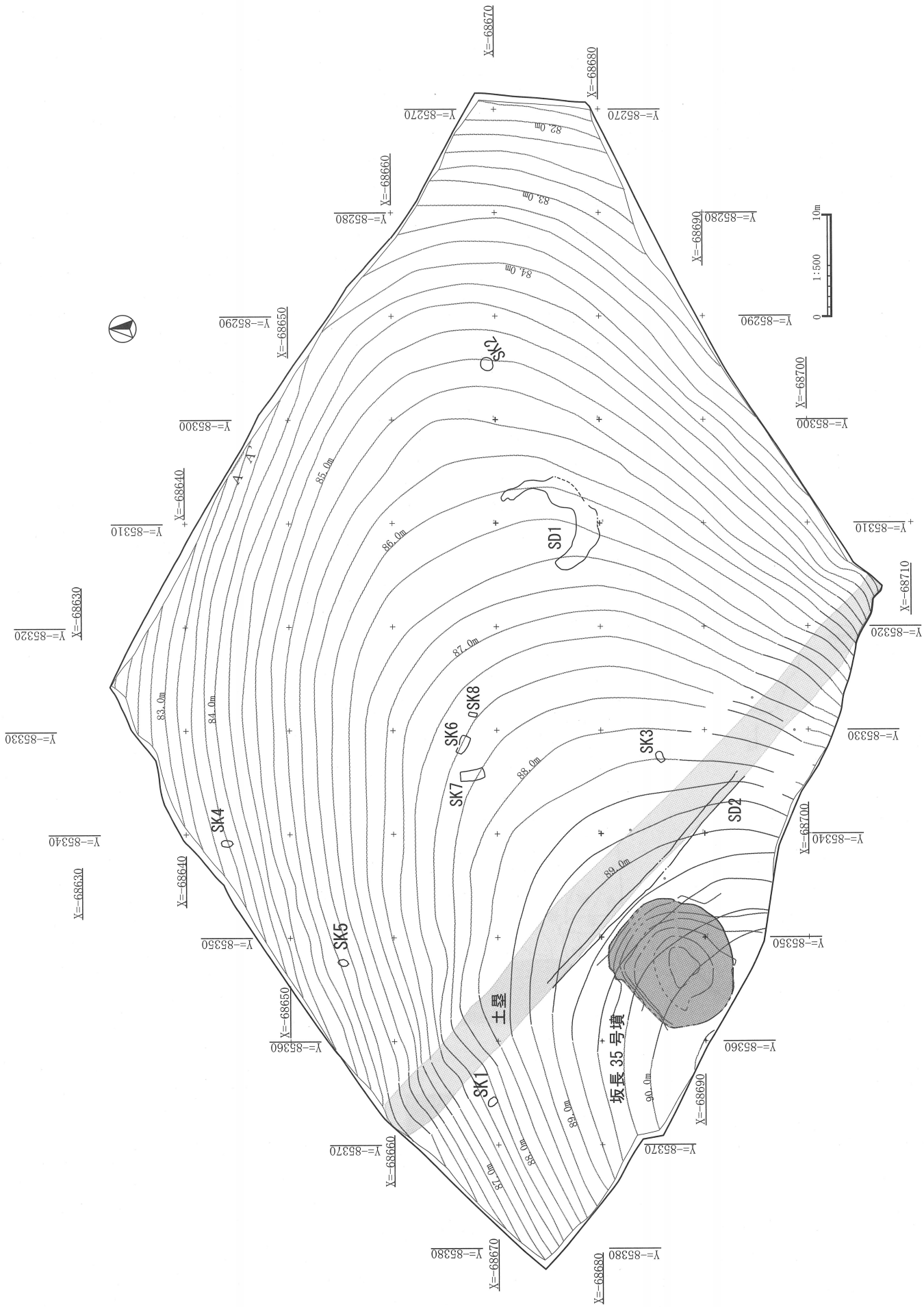
第10図　３区グリッド図



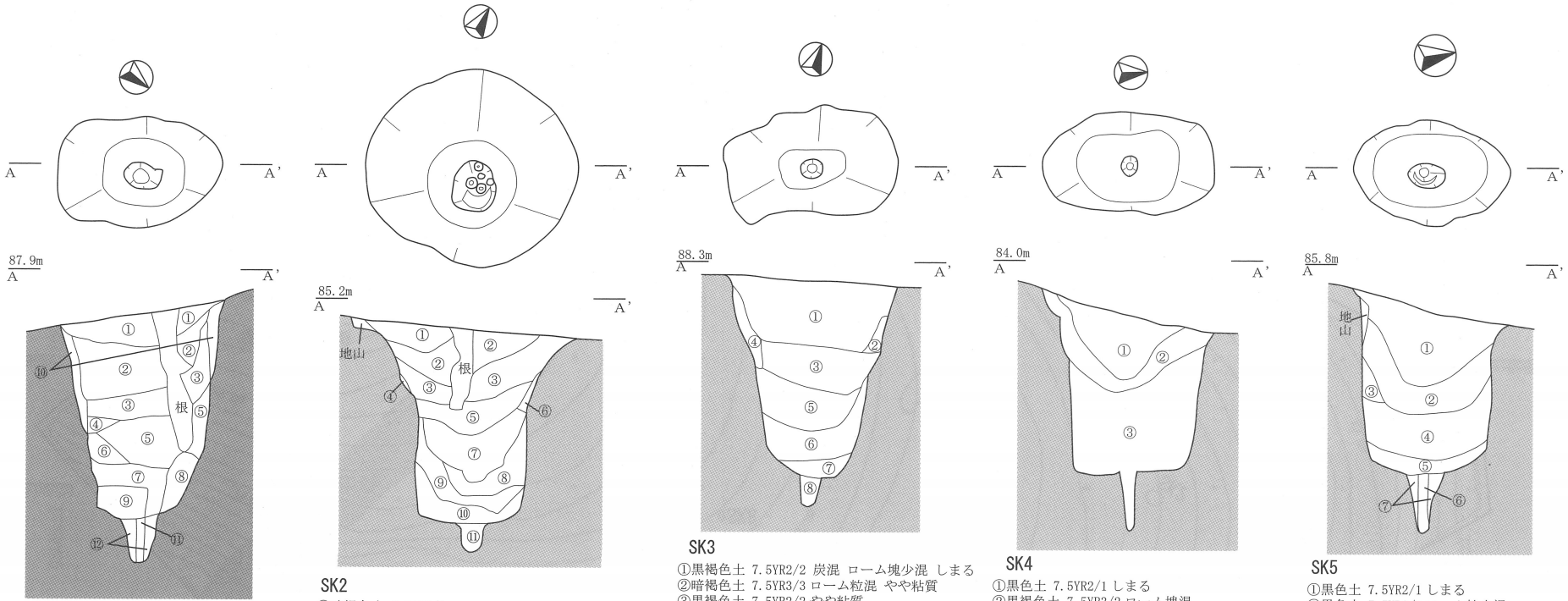
第11図　３区基本層序

調査地の基本層序（第11図）は２区とほぼ同様であるが、Ⅱ層（褐色土）およびⅢ層（黒色土）が、ともに約15cmにも満たず薄い。これは、坂長古墳群や土塁の築造のために削られた部分があったためと考えられる。

３区から検出した遺構は、土坑８基と溝２条、土塁１条である。土坑のうち５基は落とし穴、３基は古墳時代中期の墓壙である。溝のうち１条は土塁に関係して設けられたものと推定される。遺物はⅡ層とⅢ層中から、縄文土器・弥生土器・石器などが出土している。



第12図　３区遺構分布図



SK1

①黒褐色土 7.5YR2/2 しまる
②黒褐色土 7.5YR2/2
③黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少混
④黒褐色土 7.5YR2/2 ローム魂多混
⑤黒褐色土 7.5YR2/1 ローム魂少混
⑥黒褐色土 7.5YR3/2 ローム魂混
⑦黒褐色土 7.5YR3/2 ローム魂多混　やや粘質
⑧黒褐色土 7.5YR3/2 非常にしまる
⑨黒褐色土 7.5YR3/2
⑩暗褐色土 7.5YR3/4
⑪灰褐色土 7.5YR4/2 やや粘質 黄色土少混
⑫黒褐色土 7.5YR3/2 やや粘質 黄色土多混
しまる

SK2

①暗褐色土 7.5YR3/3
②黒褐色土 7.5YR3/2
③暗褐色土 7.5YR3/4
④灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊混
⑤黒褐色土 7.5YR3/2 ややボソボソ
⑥灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊混 やや粘質
⑦黒褐色土 7.5YR3/2 炭痕ローム粒少混
⑧灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混 やや粘質
⑨灰褐色粘質土 7.5YR4/2 ローム粒混
⑩灰褐色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊混
⑪黒褐色土 7.5YR3/2 ボソボソ やや粘質
ローム粒多混

SK3

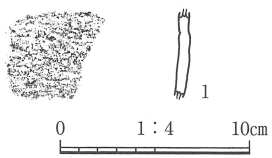
①黒褐色土 7.5YR2/2 炭混 ローム塊少混 しまる
②暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒混 やや粘質
③黒褐色土 7.5YR2/2 やや粘質
④暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊混 やや粘質
⑤暗褐色土 7.5YR3/3 ローム塊少混 やや粘質
⑥灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊多混 やや粘質
ボソボソ
⑦灰褐色土 7.5YR4/2 ローム塊極多混
⑧灰褐色土 7.5YR4/2 黄色土多混 やや粘質
ボソボソ

SK4

①黒色土 7.5YR2/1 しまる
②黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混
③黒色土 7.5YR2/1 ローム粒わずかに混
ボソボソ

SK5

①黒色土 7.5YR2/1 しまる
②黒色土 7.5YR2/1 ローム粒少混
③黒色土 7.5YR2/1 ローム塊混
④黒色土 7.5YR2/1 ボソボソ
⑤黒色土 7.5YR3/2 やや軟質 ローム塊混
⑥灰色粘質土 7.5YR4/2 ローム粒混
ボソボソ
⑦明褐色粘質土 7.5YR5/6 灰色粘質土多混
ややしまる



第13図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
1	13	SK2 2層	縄文土器		△4.4	外面：ケズリ 内面：ナデ	密　1㎜以下の砂粒を多く含む 良好	内外面：鈍い黄橙色	

0　1:40　1m

第13図　SK1～SK5および出土遺物

２．遺構

落とし穴　SK1～SK5（第13図　図版８）

５基の落とし穴のうち、円形のSK2を除く４基は長楕円形で、大きさもよく似ている。特に、SK1・4・5の３基は、丘陵西斜面にほぼ一列に等間隔で設けられており、底面ピットの深さも類似するので、一群をなすものであろう。底面ピットの土層断面などから考えると、杭は１本であったであろう。

SK2は円形で大型である点で異質である。底面ピットは浅く、土層断面では確認できなかったが、ピット底面に残された痕跡から５本の細い杭が立てられていたと考えられる。埋土上層から、縄文土器の細片が出土した。１は粗製の深鉢の胴部で、外面を粗いケズリで仕上げる。後期から晩期のものであろう。したがって、SK2の年代は縄文晩期以前と推定される。

第２表　３区落とし穴一覧表

	検出面(cm)			底面(cm)			深さ	底面ピット(cm)				位置	備考
	形態	長軸	短軸	形態	長軸	短軸	(cm)	数	杭痕	径	深さ		
SK1	長楕円形	103	70	楕円形	51	42	127	1	1	24×16	27	丘陵西斜面	
SK2	円形	133	124	円形	56	55	120	1	5	32×28	18	丘陵東肩部	縄文土器出土
SK3	長楕円形	109	68	長楕円形	41	24	122	1		14×12	18	尾根上	
SK4	長楕円形	107	62	長楕円形	64	41	96	1		13×10	37	丘陵西斜面	
SK5	長楕円形	98	65	長楕円形	71	46	102	1	1	23×16	37	丘陵西斜面	

墓壙　SK6～SK8（第14図　図版８）

調査区の中央、尾根上の平坦面に３基の墓壙が集まっている。いずれの墓壙も、後世の土塁の築造のために上部を削平されており、底面近くの15cmほどが残っているにすぎない。

SK6は３基の中央に位置し、主軸は東南東に向く。底面は緩やかな二段掘りになっているが、北側に偏っていて、底面間の差はわずか９cmしかない。底面が平坦でなく小口の痕跡などは認められないので、木棺ではなく素掘りの土坑に埋葬したものと考えられる。５世紀第３四半期頃の土師器の坏（第14図２）が破片となって出土した。伯耆町による試掘調査でも、同時期の低脚坏が出土している。

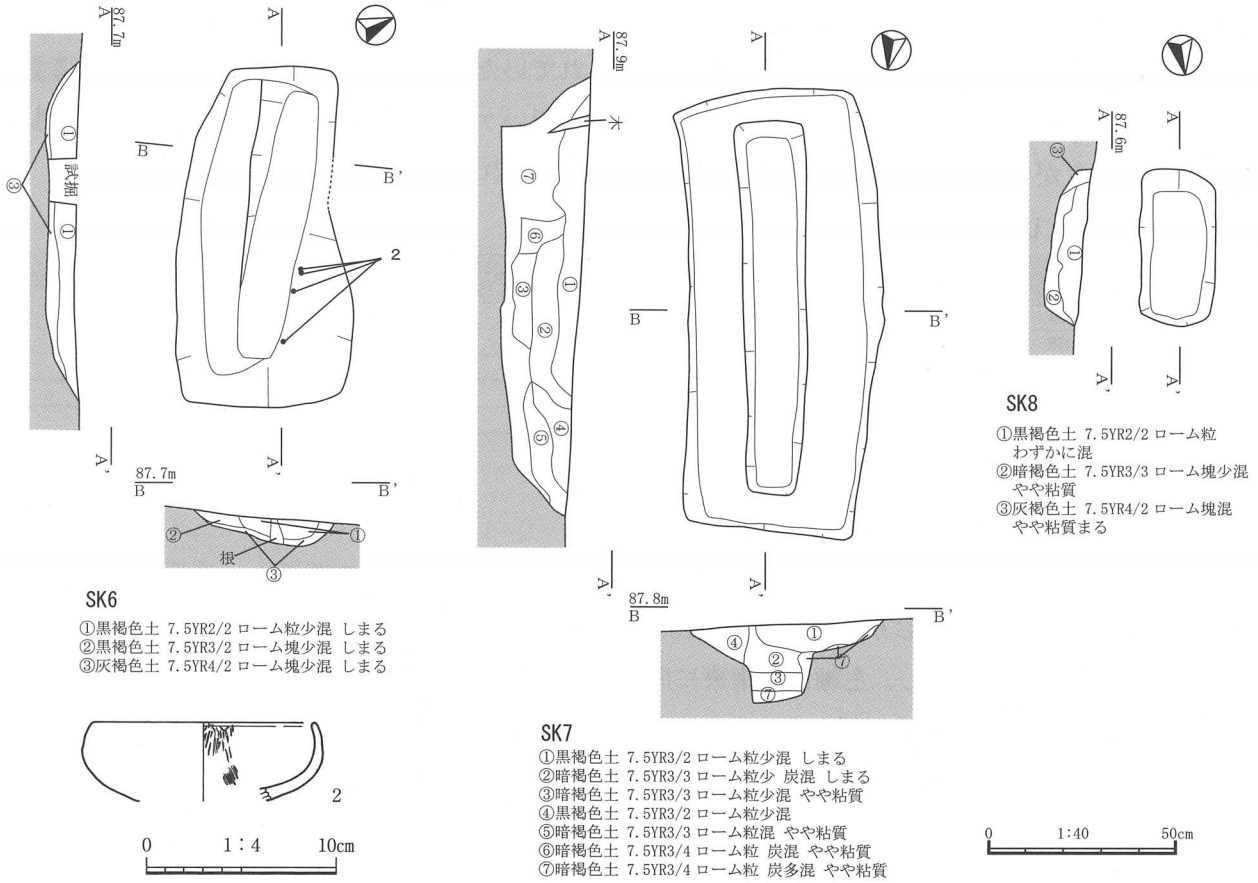
SK7は、SK6の西側に約1.7m離れて位置し、主軸をほぼ北に向ける。底面は二段掘りで、深さ22cmの土坑が中央にある。その幅は33cmで、SK6とほぼ同じである。小口痕はないが、中央坑の底面は平坦で埋土に炭化物が含まれるので、木棺墓の可能性がある。遺物は出土しなかった。

SK8はSK6の東方1.7m、SK7とは約５m離れて設けられ、主軸はほぼ北を向く。長方形の小さな土坑で、底面に中央坑はない。遺物は出土していない。

土坑の底面付近のみが残っていることからすると、本来はもっと多くの墓壙があったが、それらは削平により失われ、たまたま深めに掘られていた３基のみが残ったのかもしれない。埋葬施設と副葬品の貧弱なことが注意されるが、それは後述する坂長35号墳にも共通する特徴であり、坂長古墳群の特色と考えられよう。

第３表　３区墓壙一覧表

	検出面(cm)		底面(cm)		深さ	中央坑(cm)			主軸方位	備　考
	長さ	幅	長さ	幅	(cm)	長さ	幅	深さ		
SK6	180	75	156	56	9	145	35	5	東南東61度	土師器坏出土
SK7	233	103	225	89	15	198	33	22	北350度	炭化物出土
SK8	83	40	67	28	18	—	—	—	北10度	



第14図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
2	14	SK6 埋土２層	土師器 坏	11.8	△4.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部ナデ	密 やや良好	内外面：橙色	

第14図　SK6～SK8および出土遺物

溝　SD1（第15図）

調査区中央東寄りの尾根上に位置する。不整形の半円に巡る浅い溝で、幅0.7～1.8m、深さ0.1～0.2mを測る。北西側には続きが認められず、南東側は曖昧であるが、円形に復元すると内径7.0m外径11.0mになる。遺物は出土しなかった。

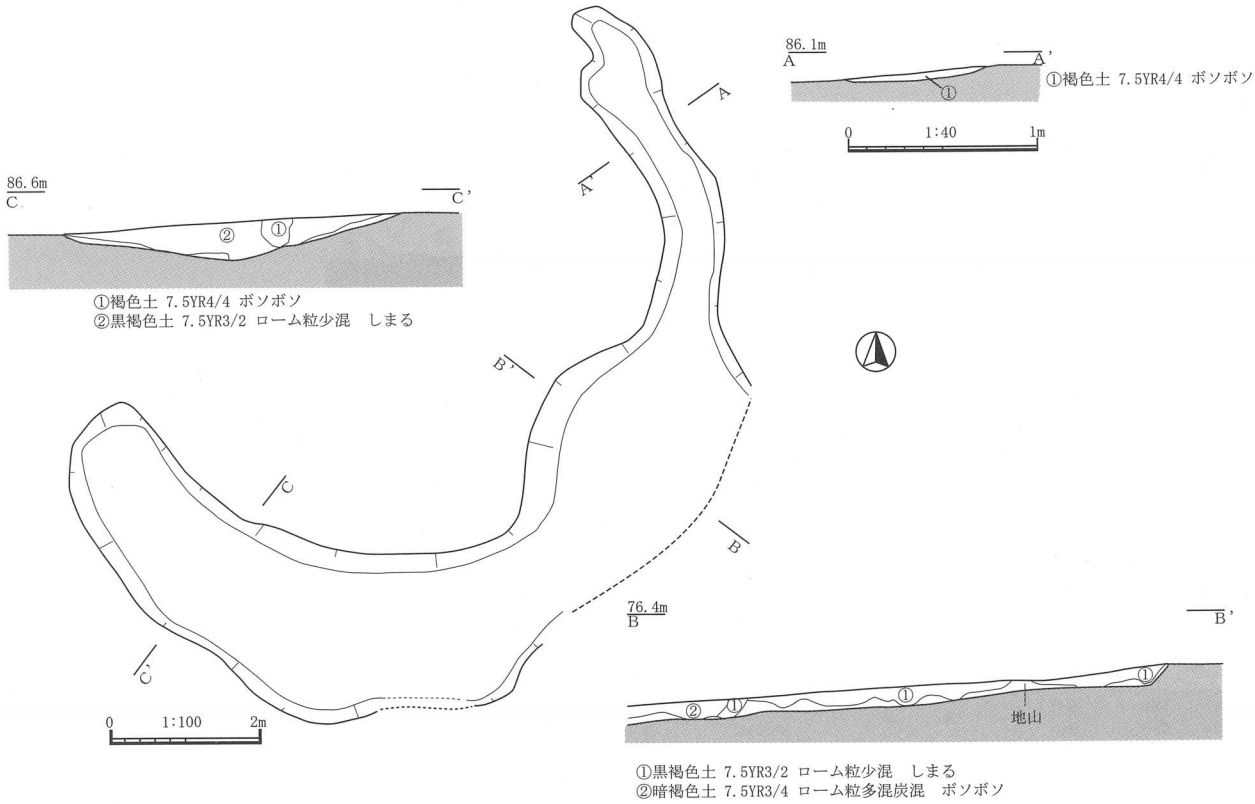
削平された古墳の周溝の可能性もあるが、不整形すぎる。時期・性格とも不明の溝としておく。

土塁と溝　SD2（第16・17図　図版９）

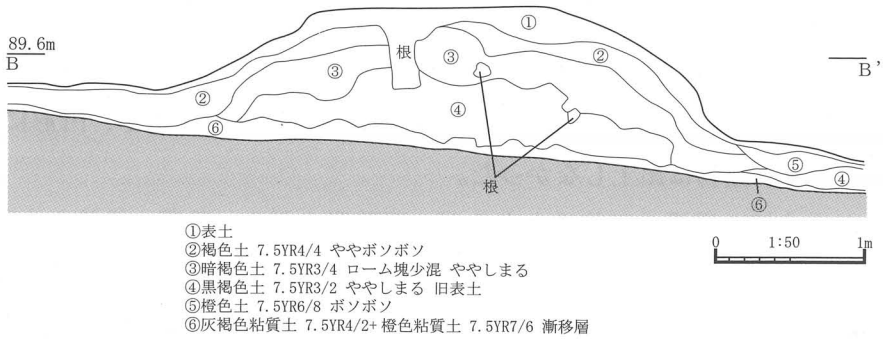
調査区南端からちょうど北西に向かって走る土塁で、調査区内での長さは70mを測る。調査地のある丘陵を横断して設けられており、両端は調査区外の丘陵裾近くまで達している。現地表面からの高さ約0.6～0.8m、幅約3.8mを測る。土層断面の観察から、本来の幅は2.7m前後、高さは1.0～1.5m程度あったものと推定される。内部はⅡ層あるいはⅢ層相当の褐色土や黒色土を盛り上げて築かれているが、互層にしたり突き固めたりした様子はなく、やや締まりがよい程度である。また、表面に粘土を貼るなどして固めた痕跡も見られない。比較的雑なつくりの土塁である。尾根の最高所では、土塁は約３mにわたって途切れている。調査の結果、門などの構造物の跡は検出されなかったので、山道を付けるために後世に切ったものと考えられる。

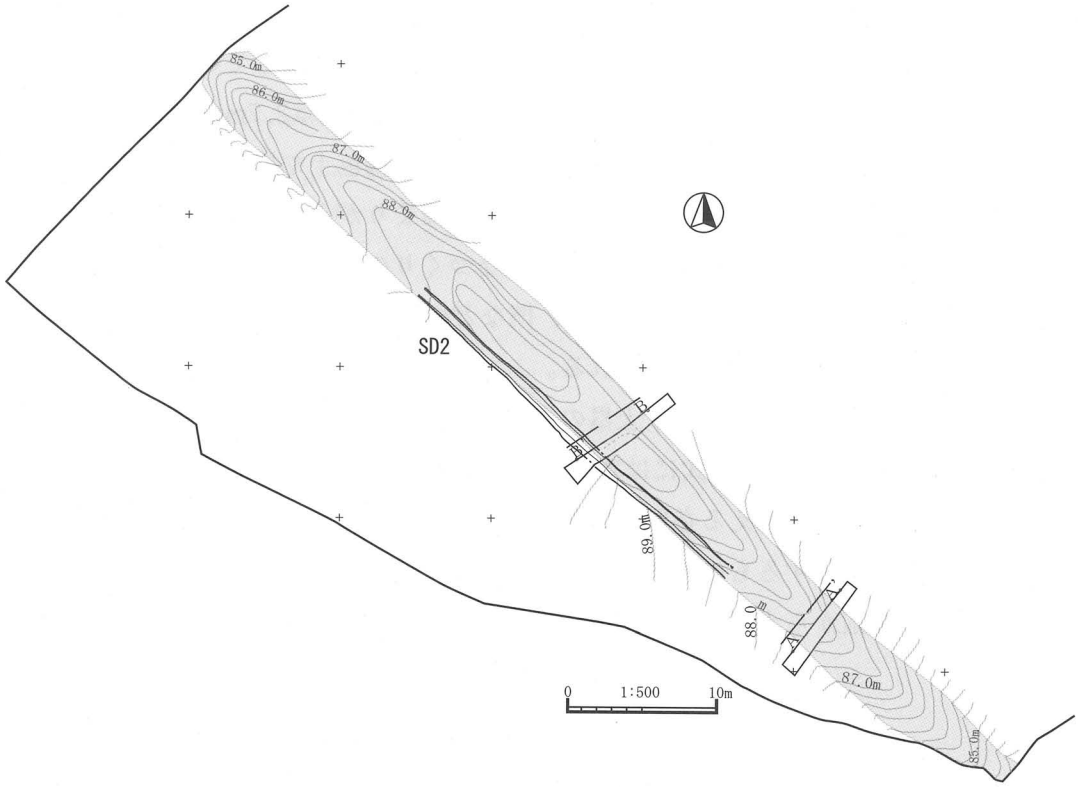
築造年代を推定できる手がかりとして、土塁の裾近くの内部から北宋銭の景徳元宝が出土している（C1）。初鋳年は1004年であるが、公式には寛文10年（1670）の渡来銭使用禁止令まで流通したとされるので、17世紀までの年代を考える必要がある。他に土塁内部からは須恵器の壺頸部（３）が出土している。坂長古墳群に関係するものであろう。

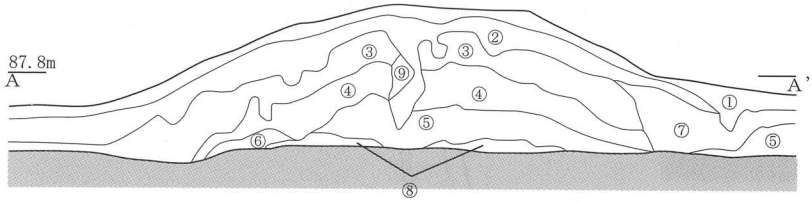
土塁を除去すると、南辺から土塁に沿って溝SD2が現れた。除去範囲全体において、25mの長さで



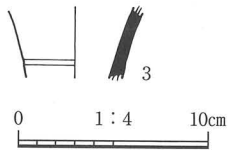
第15図　SD1

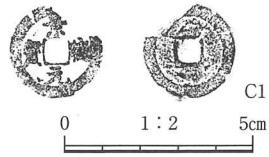






①表土
②褐色土 7.5YR4/6 クラック多い
③褐色土 7.5YR4/4 ややボソボソ
④暗褐色土 7.5YR3/4
⑤黒褐色土 7.5YR3/2 ややしまる 旧表土
⑥明褐色土 7.5YR5/6 やや粘質
⑦橙色土 7.5YR6/8 ボソボソ
⑧灰褐色粘質土 7.5YR4/2＋橙色粘質土 7.5YR7/6 漸移層
⑨褐色土 7.5YR4/3 非常にしまる 根痕





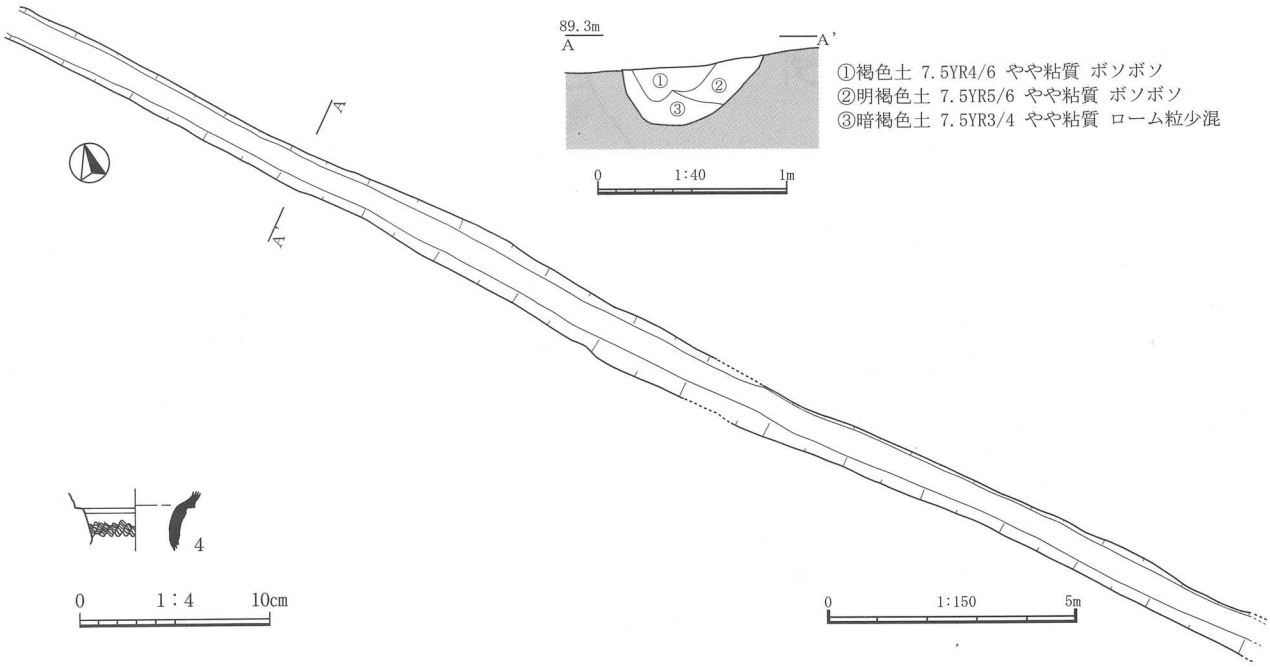
第16図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
3	16	土塁 黒色土	須恵器 壺		△3.8	外面：回転ナデ　凹線 内面：回転ナデ	密 良好	内外面：灰色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	銭名	法量 外径(mm)	法量 厚(mm)	重量(g)	材質	備考
C1	16	土塁 裾部	景徳元宝	24.8	1.4	△2.2	銅	1004年初鋳

第16図　土塁および出土遺物



第17図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
4	17	SD2 埋土２層	須恵器 瓶		△2.6	外面：回転ナデ　波状文 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：鈍い黄橙色	

第17図　SD2および出土遺物

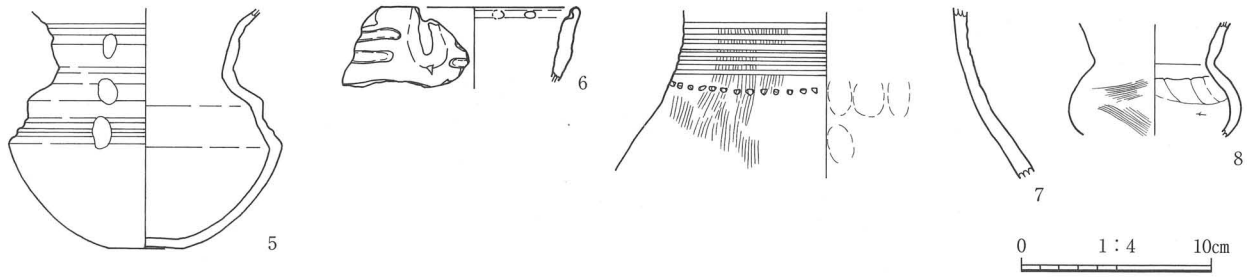
確認している。ローム層を掘り込んで設けられており、幅75cm、深さ30cmを測る。埋土の構成は、土塁内部と類似しているので、土塁の崩土であろう。防御用の空堀と考えるには、あまりに小規模なため、土塁の築造時に目印などに掘られたものと考えられる。須恵器の瓶頸部片（第17図４）が出土しており、古墳群からの流れ込みと考えられる。

土塁の性格については、小規模なことや、周辺が自然地形で郭・堀切等が見られないことから、山城などの防御の目的は考えにくい。現在、土塁を境にして北側が普門寺、南側が複数の個人の所有地となっていることが注目される。また、土塁の築造方法も性格を考える上で参考になろう。南辺にのみ溝が設けられていることや、北側の遺構や包含層は削平されているのに対し、南側に隣接する坂長35号墳には手が付けられていないことを考えると、土塁北側の土地所有者が南側に対する境界線として設置した可能性が高い。普門寺の正確な創建年代は不明ながら、永禄５年（1562）に没した安国寺二世器工晟仁和尚の開山とされるので（『岸本町誌』）、北宋銭の流通年代も考慮すると、土塁は室町時代後期から江戸時代前期頃に寺域を示すものとして設けられたのではなかろうか。

３．遺構外出土遺物（第18・19図　図版10）

第18図５は縄文土器の壺形土器で、注口土器であるかもしれない。底部は小さくわずかにくぼむ。肩部に２段の面を設け、下の段には２条の凹線を巡らす。口縁部にも２条の凹線を巡らす。肩部と口縁部には指頭によるくぼみが３段にわたって施され、１周を５区画に分ける。縄文後期後半の凹線文系土器に属するものであろう。６も同様の土器の口縁部片で、内部に凹線を巡らせて刺突を加える。

７は弥生土器の壺頸部で、中期後葉。８は土師器の小壺で、５世紀後半のもの。

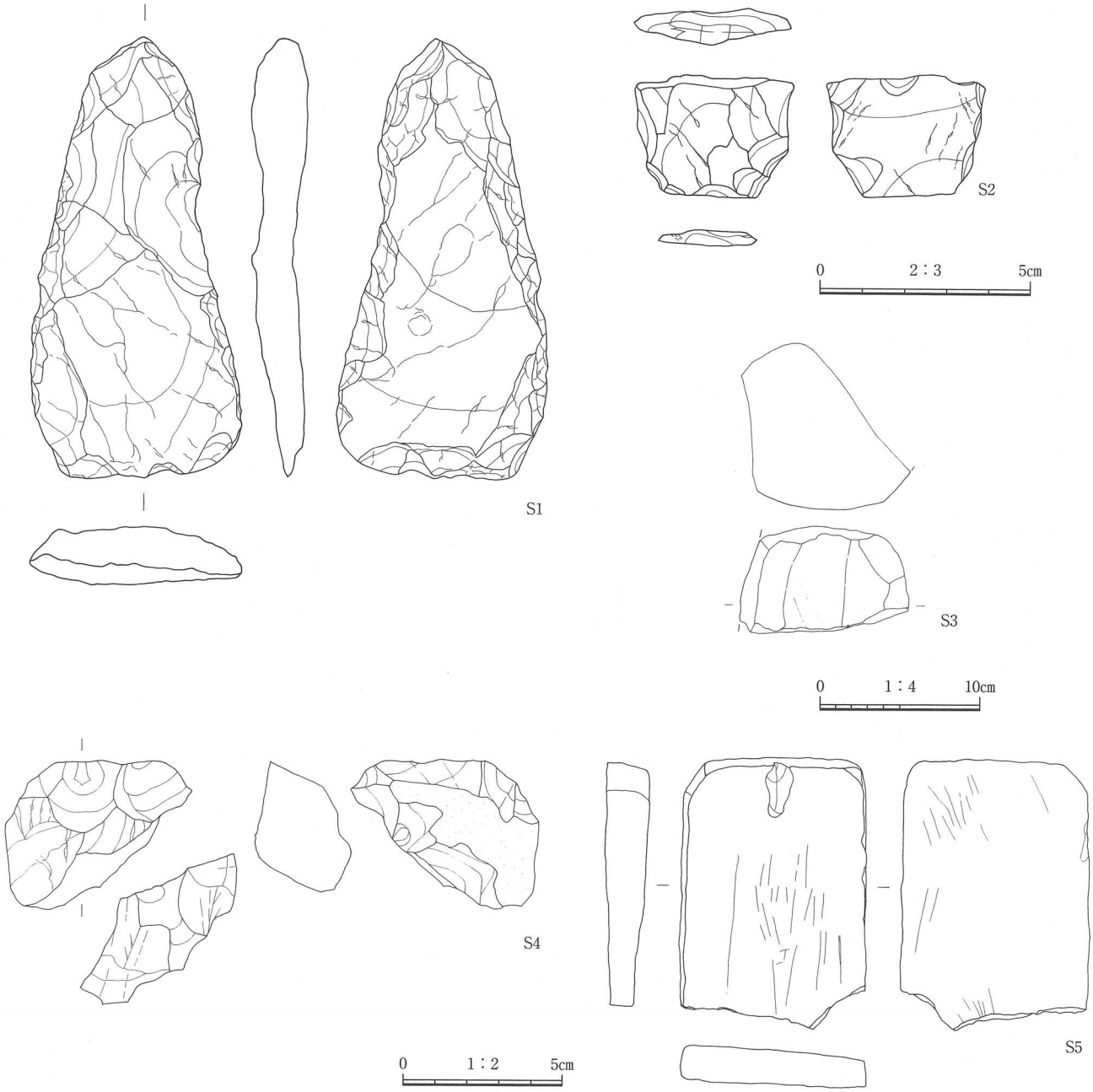


第18図　遺構外出土遺物（１）

第18図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
5	18	K6 3層	縄文土器 壺形土器	4.0	△12.6	外面：下半ナデ　上半ミガキ　２条の凹線 内面：ナデ	密 良好	内外面：灰白色	
6	18	K6 3層	縄文土器		△3.9	外面：２条の凹線　指頭によるくぼみ 内面：凹線　刺突	やや密　４mm以下の砂粒を多く含む	内外面：鈍い黄橙色	
7	18	L9 3層	弥生土器 壺		△8.5	外面：ハケメ　６条以上の凹線　列点 内面：指頭圧痕	密　砂粒を多く含む 良好	内外面：鈍い橙色	
8	18	L5 2層	土師器 小壺		△5.9	外面：頸部以上ヨコナデ　以下ハケメ 内面：頸部指頭圧痕　胴部ケズリ	密　１mm大の砂粒を多く含む 良好	内外面：鈍い橙色	



第19図　遺構外出土遺物（２）

第19図　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	型式	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
S1	19	K10 2層	石鏃	10.4	4.8	1.1	65.3	凝灰岩	
S2	19	35号墳周溝 1層	両面調整石器	△2.8	△3.7	8.3	11.0	頁岩	
S3	19	K11 2層	磨石	△6.6	△10.2	10.4	784.0	花崗岩	
S4	19	H9 ソフトローム上面	石核	5.0	6.0	2.9	67.9	石英	
S5	19	L5 2層	砥石	△8.4	5.8	1.3	99.3	流紋岩	

第19図S1は凝灰岩製の石鏃で、剥片を素材にした小型のもの。S2は頁岩製両面調整石器の基部破片。尖頭器であろうか。坂長35号墳周溝からの出土。S3は磨石の破片で、花崗岩製。S4は石英製石核。水晶に近い良質の礫を半割し、分割面を作業面として求心的に鱗形の剥片を剥いだもの。節理で半分に折れた後も、折れ面を作業面や打面として、剥片の剥離が試みられる。ソフトローム上面で出土し、技術的にも旧石器の可能性があるため、この石核が出土したH9グリッドを中心にローム層の調査を行ったが、石器は出土しなかった。S5は砥石で、流紋岩製。表裏両面が主な砥面として用いられる。土塁付近からの出土なので、土塁の築造時に使われたものかもしれない。

第３節　坂長35号墳の調査

１．概要

坂長35号墳は、坂長下門前遺跡３区内の南西部、K4グリッドを中心に位置する円墳である。標高89.3m～90.2mの丘陵稜線上に築かれている。調査前の状況では高さ約85㎝の不整形な地形の高まりであった。伯耆町教育委員会が平成17年度に古墳をほぼ横断する形で試掘トレンチを入れたが、断面は黒色土のみであったため、古墳ではない可能性が高いとされていた。この結果を受け、調査は古墳であるかどうかを確認するために、裾から周溝を探す目的で十字にトレンチを入れた。確証は得られず、埋葬施設の有無を調べるため中央部にもトレンチを入れたところ、ようやく棺の裏込めと推定される粘土塊を土層断面で確認した。この時点で棺痕跡と推定される部分の半分ほどは失われていた。結果的に調査の手順が適切でなく埋葬施設の調査が不十分になった点は反省しなければならない。

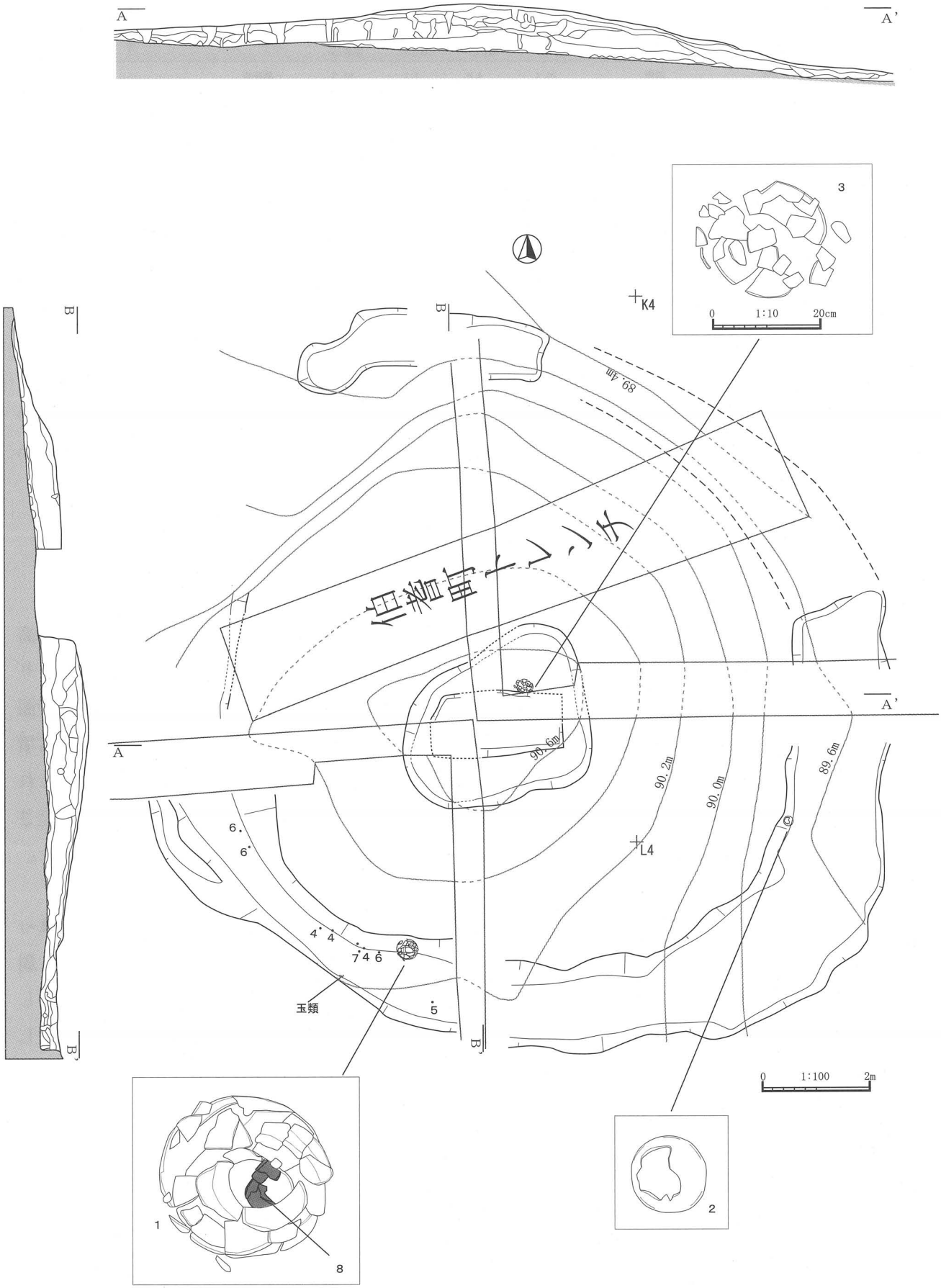
径12.0m、高さ1.1mの円墳で、幅0.9m～2.3m、深さ約10～30㎝の周溝がめぐる。埋葬施設ははっきりしないものの、木棺直葬と推定される。主体部からは古墳に関係する遺物は出土しなかった。周溝からは２点の土師器壺などの土師器と滑石製・ガラス製の玉類が、墳頂からは須恵器壺が出土した。多く出土した土器の年代から、５世紀第３四半期の築造と考えられる。土器には原位置に正立していたものがあったことや封土最上層の粘質土が残っていたことから、未盗掘であったと判断される。

２．遺構と遺物

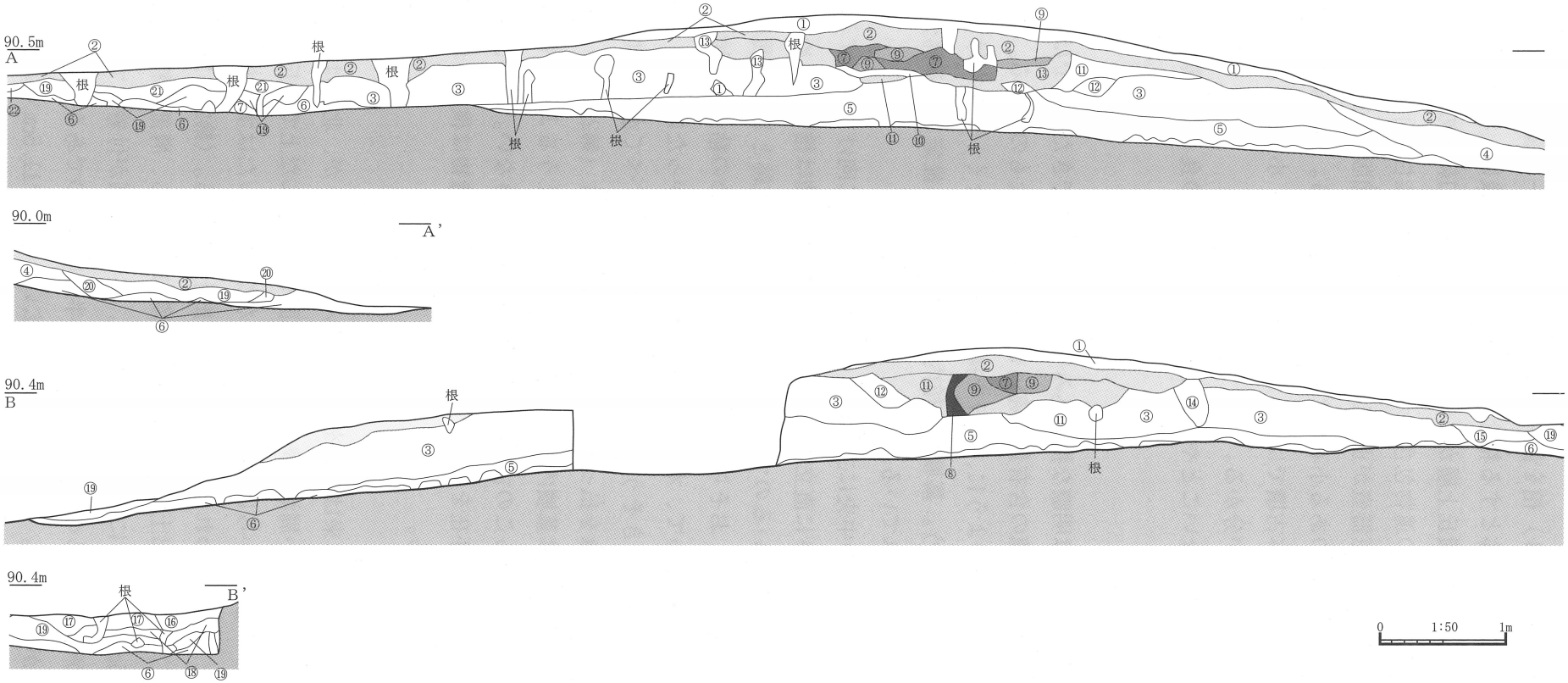
墳丘（第20・21図　図版11）

墳丘は最大径12.0mの円形に復元される。周溝底からの高さ1.1mを測り、北西部約４分の１は後世の山道によって削られている。径に比して高さが著しく低いため、外観は非常になだらかである。

土層断面を観察すると、墳丘の下半は黒色土・漸移層・ローム層という自然の層序が保たれていることや、盛土の主体となる黒色土に少量のローム粒が含まれること、この黒色土は中央で途切れていることが注目される。このことから、墳丘の築造方法は概ね次のように推定される。１）まず、墳丘


A
A'
B
B'
K4
L4
89.4m
90.6m
90.2m
90.0m
89.6m
6
6
4
4
7
4
6
5
玉類
0
1:10
20cm
0
1:100
2m
1
2
3
8

第20図　坂長35号墳



①表土
②橙色粘土質 7.5YR7/6 黒色土多混　しまる
③黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊わずかに混
④黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少混
⑤黒褐色土 7.5YR3/2 しまる
⑥灰褐色粘質土 7.5YR4/2＋橙色粘質土 7.5YR7/6 漸移層
⑦橙色粘質土 7.5YR7/6・灰色粘質土 7.5YR4/2 混　しまる
⑧橙色粘質土 7.5YR7/6・灰色粘質土 7.5YR4/2 少混　しまる
⑨灰色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊多混　炭少混　しまる
⑩黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒わずかに混
⑪灰色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊多混
⑫黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混　しまる
⑬褐色土 7.5YR4/3 ローム粒多混　ボソボソ
⑭褐色土 7.5YR4/3 ボソボソ（古い根）
⑮褐色土 7.5YR3/2 ローム粒混　ボソボソ
⑯灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混　やや粘質
⑰暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒少混
⑱暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒わずかに混　やや粘質
⑲灰褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混　しまる
⑳褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混
㉑灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混　しまる
㉒褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混　しまる

第21図　坂長35号墳断面図

をつくる範囲で地面を削ってしまりの良い黒色土の面を露出させる。２）棺を乗せる部分を残して、周辺から集めた黒色土を厚さ約40cmに盛る。３）棺を置いた後でその周囲をローム層の粘土で固め、さらに盛土との間を漸移層からの粘質土を主体とする粘土で充填する。４）最後に、墳丘全体を厚さ約15cmのローム層由来の粘土で覆う。なお、墳丘上層からは弥生時代後期の甕口縁部の細片（第23図14）が出土しており、坂長下門前遺跡３区内の遺物包含層が盛土に使われた可能性を示唆している。

墳頂には、棺のすぐ横にあたる位置に、須恵器壺が正立して残されていた（図版13-３）。第23図３で、外面は平行タタキで仕上げ、内面は凹凸のある小石のような当て具を用いる。底部は小さく打ち欠かれている。６世紀第１四半期のもので、本古墳では最も新しい遺物であり、小規模な古墳ながら長期間にわたって祭祀が続けられていたことが分かる。

墳丘表面から埋葬施設までわずか15cmしかないことや、封土の大半がしまりの良くない黒色土で作られていることが本古墳の大きな特徴である。

埋葬施設（第22図　図版12・13）

埋葬施設は墳丘中央に１基存在する。これは明瞭な掘り込みや棺痕跡で確認できたものではなく、土色や土質の微妙な色合いの差、特にローム塊の含有量の違いをもとに検出したものである。墓壙は不整形で、東西3.5m南北3.0mを測る。上述のように、墳丘を掘り込むのではなく、中央だけ土を盛らずに形成したため不整形になったのであろう。墓壙の、棺内および棺周辺と推定される部分以外は、ローム塊を多く含む灰色粘質土で埋められている。

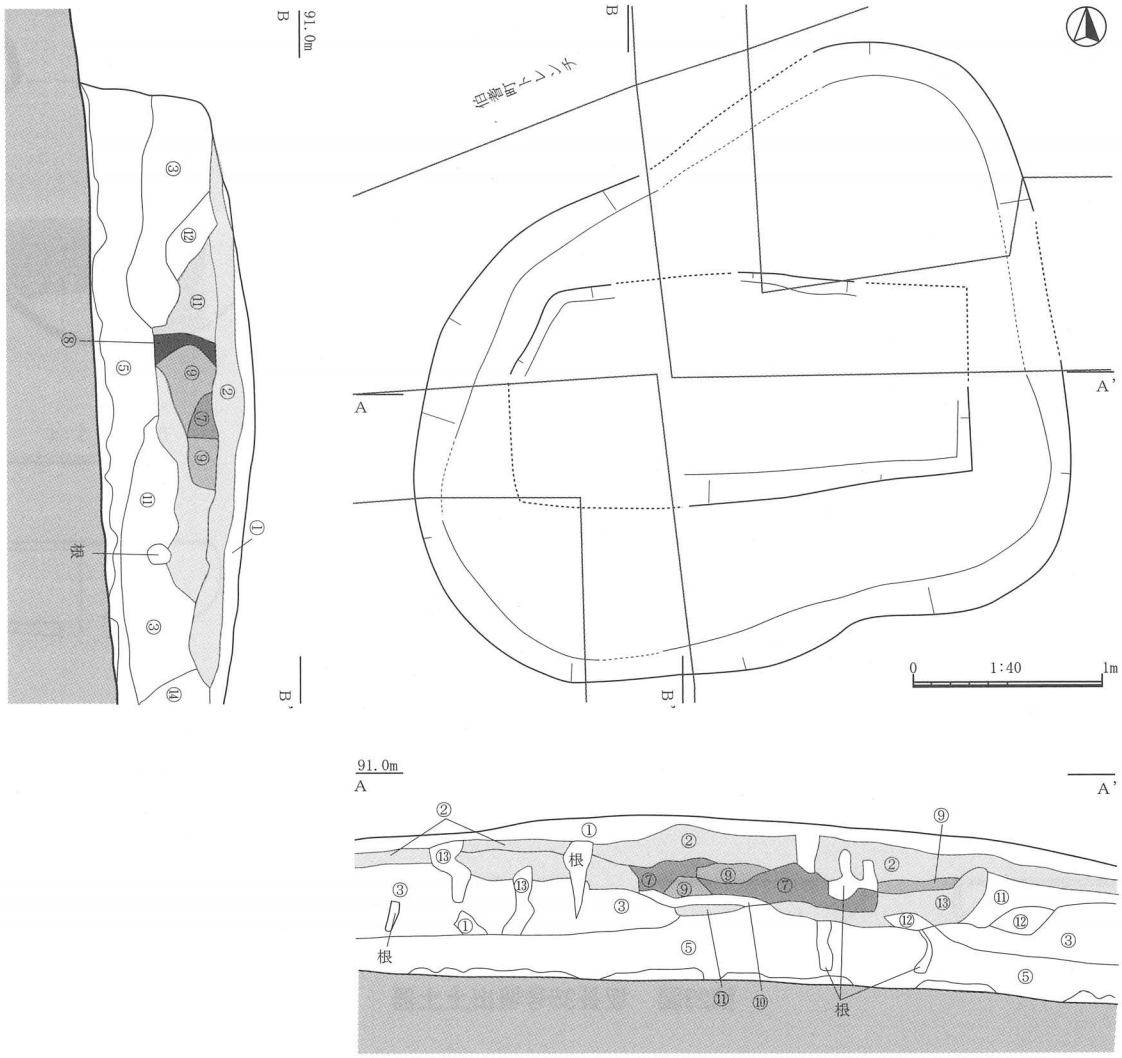
棺痕跡は長さ2.4m、幅1.2mを測り、墓壙の中央に主軸をちょうど東西方向に向けて位置する。墳丘の南北断面において確認される、30cmの高さに直立する厚さ７～18cmの粘土塊は棺の裏込めと思われる。この隣の土には炭化物が少量含まれているので、棺内土であろう。棺痕跡とした範囲は主にロームを主体とする土で構成される。これは、おそらく棺が腐食した後に裏込めの粘土塊が棺内の空間に倒れ込んだ状況を表していよう。したがって、木棺本体は、もう少し小さかったはずで、土層断面からは幅40～60cm、長さ180cm程度に復元できそうである。棺内部分の土はすべて水洗選別を行ったほか、トレンチを掘削する際にも細心の注意を払ったが、弥生土器底部の細片（第23図15）が１点あった他に遺物はなかったので、棺内あるいは墓壙内への副葬品に、腐食に耐えうるようなものはなかったと推定される。そのため、埋葬施設からこの古墳の年代を知ることはできない。なお、墳丘を除去する調査過程において、他の埋葬施設の存在を疑わせるような粘土などや遺物は検出されなかったので、埋葬施設はこの１基のみと考えられる。

周溝（図版14・15）

幅0.9m～2.3m、深さ10cm～30cmを測る。本来は墳丘を１周していたであろうが、北半は一部を除き後世の山道により失われている。全体に浅い周溝であるが、地表面を掘り込んだ上で墳丘が築造されていると考えられるので、築造時の地表面からは50cm程度の十分な深さがあったはずである。

周溝内からは、南西部を中心に、祭祀に使われた土師器と玉類が出土している。（第23・24図）

第23図１は周溝内墳裾から直立した状態で出土した壺である。有段口縁をもち、肩部に粗雑な綾杉文を２段に刻む。底部は13cm×5.5cmの長方形に打ち欠かれている。下半には煤が付着している。かなり退化した古墳時代前期の要素が認められるので、５世紀第１四半期頃のものであろう。この壺の中からは５世紀第３四半期の坏８が出土した。壺１の頸部は最も広いところで11.5cmであるのに対し、坏８の最大径は12.5cmあるため、坏を壊さなければ押し込むことはできない。実際、壺１に護ら



①表土
②橙色粘土質 7.5YR7/6 黒色土多混 しまる
③黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊わずかに混
④黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少混
⑤黒褐色土 7.5YR3/2 しまる
⑥灰褐色粘質土 7.5YR4/2＋橙色粘質土 7.5YR7/6 漸移層
⑦橙色粘質土 7.5YR7/6・灰色粘質土 7.5YR4/2 混 しまる
⑧橙色粘質土 7.5YR7/6・灰色粘質土 7.5YR4/2 少混　しまる
⑨灰色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊多混 炭少混 しまる
⑩黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒わずかに混
⑪灰色粘質土 7.5YR4/2 ローム塊多混
⑫黒褐色土 7.5YR3/2 ローム塊混 しまる
⑬褐色土 7.5YR4/3 ローム粒多混 ボソボソ
⑭褐色土 7.5YR4/3 ボソボソ（古い根）
⑮褐色土 7.5YR3/2 ローム粒混 ボソボソ
⑯灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混 やや粘質
⑰暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒少混
⑱暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒わずかに混 やや粘質
⑲灰褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混 しまる
⑳褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混
㉑灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒多混 しまる
㉒褐色土 7.5YR4/3 ローム粒混 しまる

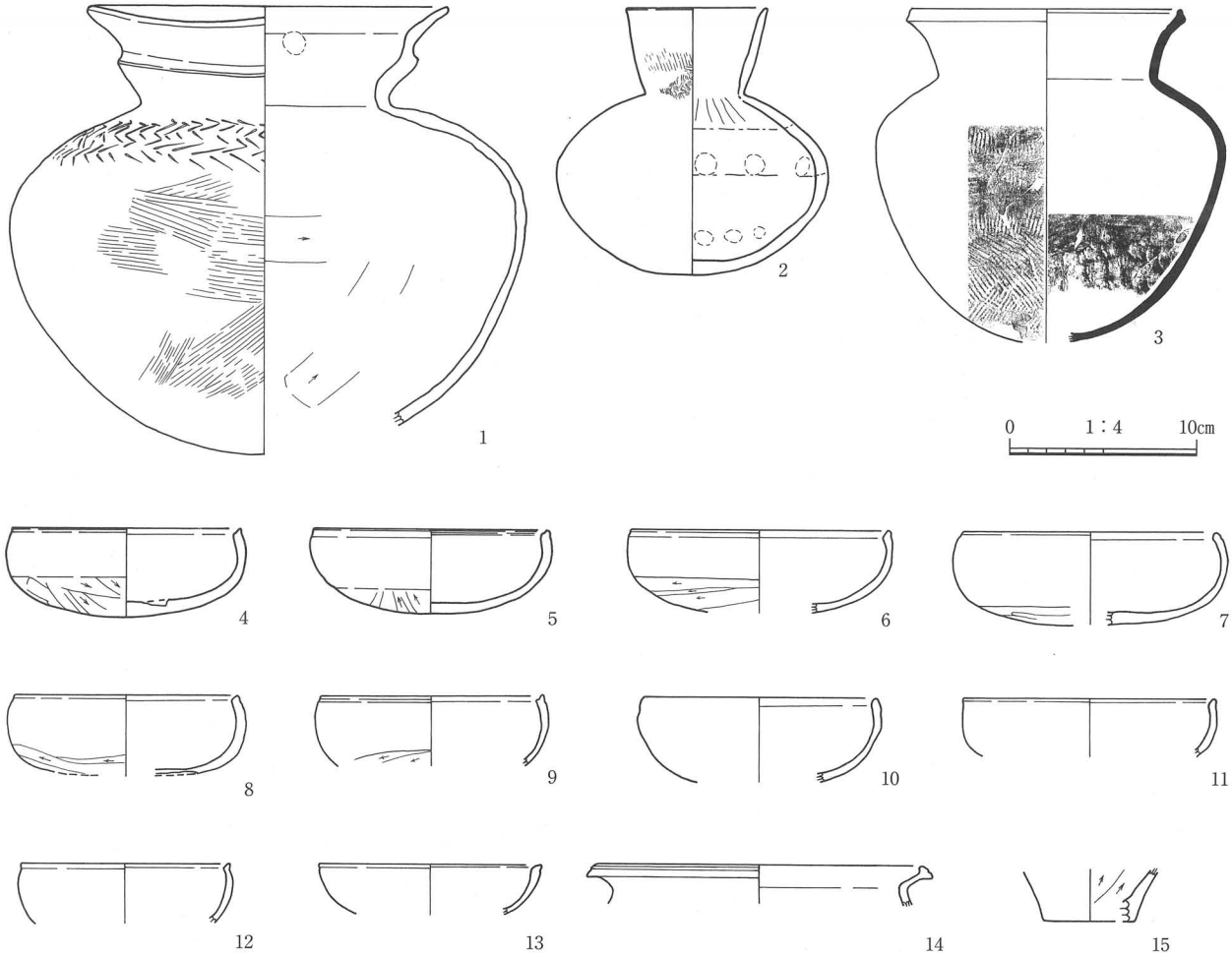
第22図　坂長35号墳埋葬施設

れた良好な出土状態にもかかわらず、坏８には約４分の１の欠落部分があるので、打ち欠いた部分を回して押し込んだと思われる。２つの土器の内部の土を水洗選別したが、何も見つからなかった。

壺１の周辺からは、他に９個体分の坏が周溝埋土および底面直上から出土した。いずれも５世紀第３四半期のもので、完形に復元できるものはない。祭祀の終了後に壊されているかもしれない。

周溝内では東南部からも土器が出土している。第23図２は墳裾に正立していた壺である。底部に穿孔はなく、他の土師器とは違って完形で供えられていたと考えられる。他の坏などと同じ５世紀第３四半期のものであるが、この土器だけ離れているので、別の機会に用いられたものかもしれない。

周溝の南端近くからは玉類が出土している（第24図）。現場で確認できたものはいずれも周溝外縁側の底面上で出土している。多くは底面付近の土から水洗選別によって採取した。したがって、まだ

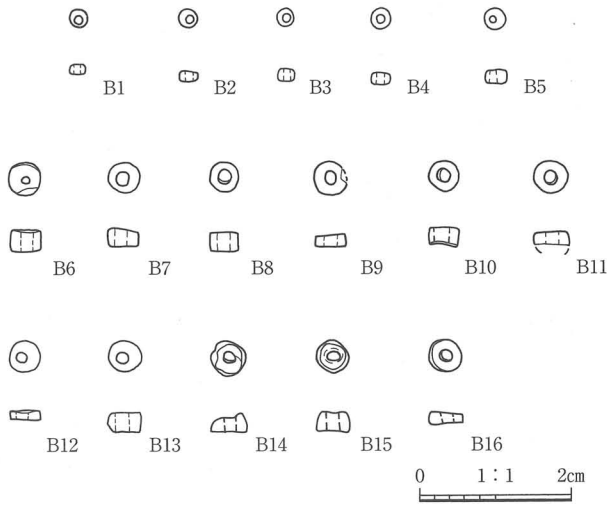


第23図　坂長35号墳出土土器

第23図　遺物観察表

＊復元値　△現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
1	23	周溝底面直上	土師器壺	19.1	24.1	外面：ヨコナデ　肩部以下ハケメ、肩部綾杉文２段 内面：口縁部ヨコナデ　以下ケズリ、ナデ	密　２mm以下の砂粒を多く含む 良好	内外面：鈍い黄橙色	下半外面スス付着 底部打ち欠き
2	23	周溝底面直上	土師器壺	7.5	14.4	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ　以下ケズリ後ナデ	密 良好	内外面：橙色	
3	23	墳頂１層	須恵器広口壺	14.5	18.0	外面：頸部以上回転ナデ　以下平行タタキ 内面：腹部以上回転ナデ　以下当て具痕	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：灰色	底部打ち欠き
4	23	周溝底面直上、埋土	土師器坏	12.2	4.8	外面：ヨコナデ　底部ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ　底部ナデ	密 良好	内外面：橙色	
5	23	周溝底面直上	土師器坏	12.5	4.6	外面：ヨコナデ　底部ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ　底部ナデ	密 良好	内外面：橙色	
6	23	周溝埋土	土師器坏	＊13.7	△4.4	外面：ヨコナデ　底部ケズリ 内面：ヨコナデ　以下ケズリ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
7	23	周溝埋土	土師器坏	＊13.6	5.0	外面：ヨコナデ　底部ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ　底部ナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
8	23	周溝壺１内	土師器坏	12	4.1	外面：ヨコナデ　底部ケズリ 内面：ヨコナデ　底部ナデ	密　砂粒をわずかに含む 良好	内外面：橙色	壺１内に入れられて出土
9	23	周溝埋土	土師器坏	＊11.9	△3.7	外面：ヨコナデ　底部ケズリ 内面：ヨコナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
10	23	周溝埋土	土師器坏	＊12.4	△4.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
11	23	周溝埋土	土師器坏	＊13.6	△3.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
12	23	周溝埋土	土師器坏	＊11.2	△3.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：橙色	
13	23	周溝埋土	土師器坏	＊11.9	△2.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密　細かい砂粒を含む 良好	内外面：明橙色	
14	23	墳丘１層	弥生土器甕	＊17.3	△2.1	外面：ヨコナデ　口縁部：擬凹線 内面：口縁部ヨコナデ	密　細かい砂粒を多く含む 良好	内外面：淡黄褐色	
15	23	棺痕跡９層	弥生土器	＊5.0	△2.8	外面：ナデ 内面：ケズリ	密 良好	内外面：浅黄色	



第24図　坂長35号墳出土玉類

第24図　遺物観察表

△復元値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種類	大きさ(mm) 外径	内径	厚	重量(g)	材質	備考
B1	24	周溝底面	小玉	2.6	1.2	1.4	0.1	ガラス	淡青色
B2	24	周溝底面	小玉	2.8	0.9	1.7	0.1	ガラス	淡青色
B3	24	周溝底面	小玉	2.5	0.8	2.0	0.1	ガラス	淡青色
B4	24	周溝底面	小玉	2.9	1.3	1.7	0.1	ガラス	淡青色
B5	24	周溝底面直上	小玉	3.0	1.3	2.0	0.1	ガラス	淡青色
B6	24	周溝	小玉	4.5	1.0	2.9	0.1	滑石	
B7	24	周溝	小玉	4.5	1.2	2.2	0.1	滑石	
B8	24	周溝	小玉	4.2	1.5	2.5	0.1	滑石	
B9	24	周溝	小玉	4.5	1.4	1.5	0.1	滑石	
B10	24	周溝底面直上	小玉	4.3	1.6	2.3	0.1	滑石	
B11	24	周溝底面直上	小玉	4.5	1.4	△1.4	0.1	滑石	
B12	24	周溝底面直上	小玉	4.2	1.5	1.3	0.1	滑石	
B13	24	周溝底面直上	小玉	4.4	1.5	3.3	0.1	滑石	
B14	24	周溝	小玉	4.9	1.5	2.1	0.1	滑石	
B15	24	周溝	小玉	4.5	1.5	1.8	0.1	滑石	
B16	24	周溝	小玉	4.5	1.5	1.8	0.1	滑石	

周溝に土砂が流入していない、古墳の築造後間もない時期の祭祀で使われたものと思われる。しかしながら、南側には隣接して坂長34号墳が所在するので、34号墳に関係する遺物である可能性も排除できない。ガラス玉は５点出土した（B1～B5）。いずれも淡青色で、径2.5～3.0㎜、厚さ1.4～2.0㎜の、ごく小さいものである。一連で用いられたものと思われる。滑石製小玉は完形品が27点、破片が６点出土している（B6～B16）。大きさの平均は径4.5㎜、厚さ2.2㎜である。素材になった滑石は劈開性がやや強いようで、輪切りの方向に２分あるいは３分しているもので完形か破片か区別し難いものがある。本来の厚さは約３㎜になるであろう。

埋葬施設からの出土遺物がないため、坂長35号墳の年代を決定するには、周溝の出土遺物をもとにすることになる。最も古い壺１は、穿孔されているにもかかわらず煮炊きの痕跡がある。使用歴のある古い土器を祭祀に再利用していると考えれば、築造年代は土器よりも少し新しく考える必要がある。あるいは、壺１はより古い他の古墳に樹立されていたものを持ってきたのかもしれない。周溝出土の土器のほとんどが５世紀第３四半期の年代が与えられること、特に壺１と坏８が同時に使われていることは重要である。また、滑石製小玉の出土状況は、古墳の築造からそう時間を経ていない時期に遺されたことを示唆している。以上から５世紀第３四半期の年代をあてるのが妥当と思われる。

参考文献

岸本町誌編さん委員会編　1983『岸本町誌』
伯耆町教育委員会編　2007『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』

第４章　坂長ヨコロ遺跡の調査

第１節　立地と基本層序

坂長ヨコロ遺跡は越敷山から北へ派生する丘陵の先端部に位置する。１区が丘陵尾根上、２区が狭隘な谷部にあたり、いずれも比較的急な斜面地となっている。標高は１区の最高所が83.3m、２区の北西端が58.7mであり、遺跡内では約24.6mもの比高差がある。

２区では標高の低い北側で加工段が上下、二段にわたり造成されている。造成された時期は判然としないが、上層を中世から近世にかけての遺物包含層に覆われていることから中世以前の可能性が高い。加工段の幅は１～９mと一定ではなく、また、平坦面に遺構がみられないことなども勘案すると、古道であった可能性が考えられる。

また、２区の北東側の斜面裾部は崖状となり、本来の地形を留めていない。遺跡北側の水田域は以前溜め池であったという伝承が残っており、この地形改変は溜め池の浸食作用によるものかもしれない。

調査前の現況は１、２区とも山林である。

各調査区の基本層序は以下のとおりである（第25・27図）。

１区　Ⅰ層：黒褐色シルト。最大30cmの厚さで堆積する。土師器の細片を僅かに含む遺物包含層であるが、堆積時期は特定できない。

Ⅱ層：黒灰褐色シルト。５～10cmの厚さで堆積する。１層と３層の漸移層である。無遺物層である。

Ⅲ層：にぶい黄褐色粘土。ローム層。

Ⅳ層：橙褐色粘土。ローム層。

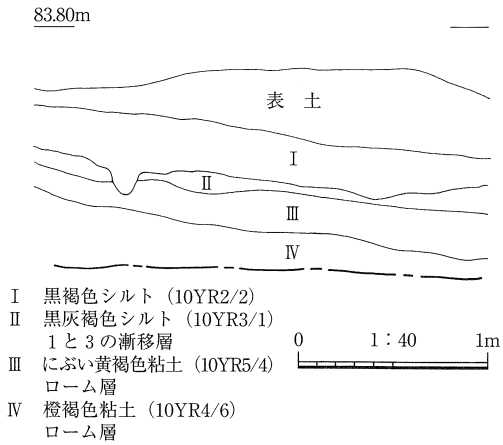
２区　１層：暗褐色シルト。調査区北半に形成された段状の地形に厚く堆積する。厚さは20～30cmである。古墳時代中期のSI1を覆っており、土師器、須恵器、陶磁器などを含む。中世から近世にかけての遺物包含層と考えられる。

２・３層：にぶい赤褐色粘土。１区の４層より下部のローム層と考えられる。

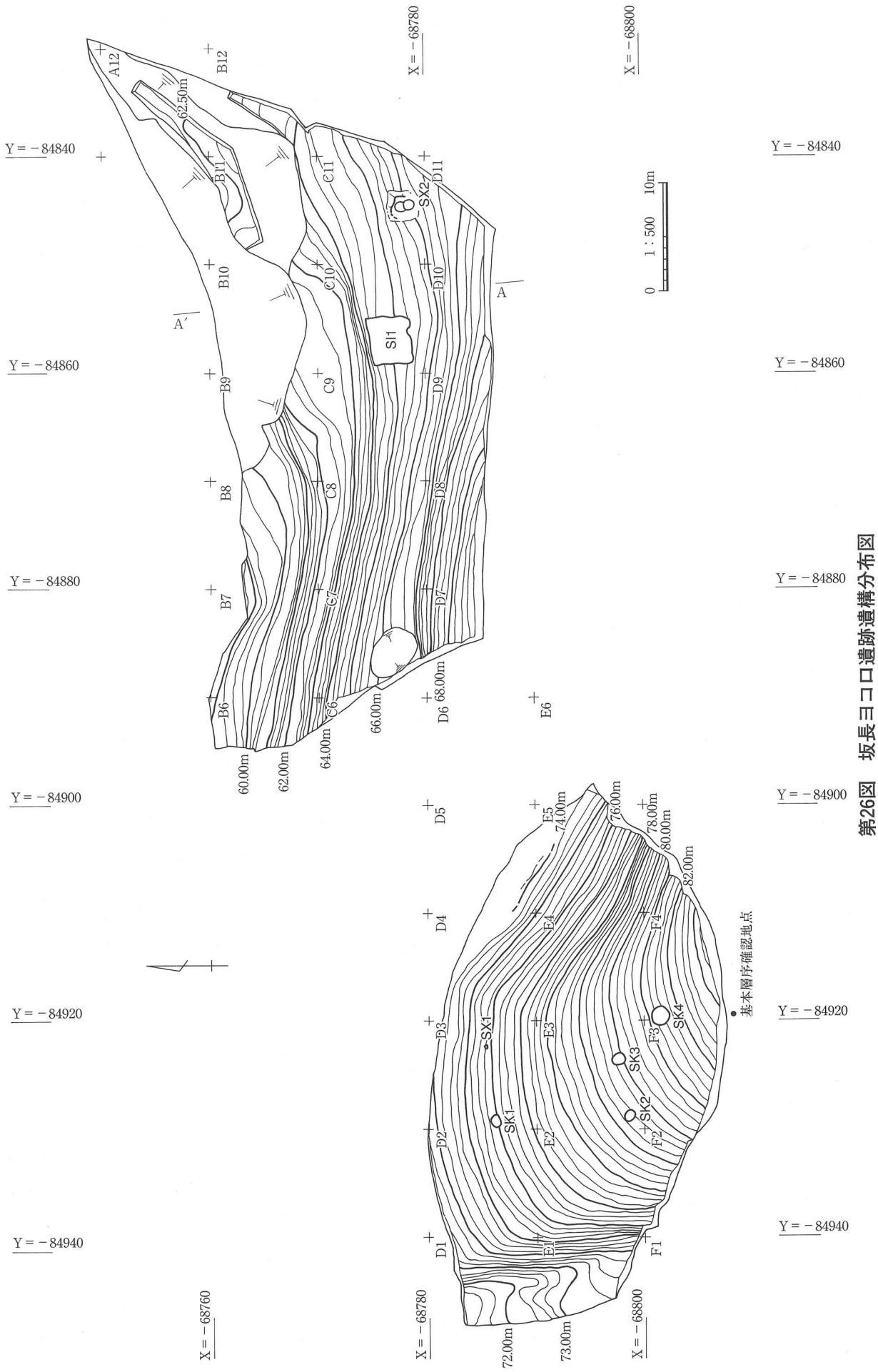
４・５層：黒褐色シルト質粘土。ローム層。礫を多量に含む。

６層：黄褐色粘土。ローム層。砂礫を含む。

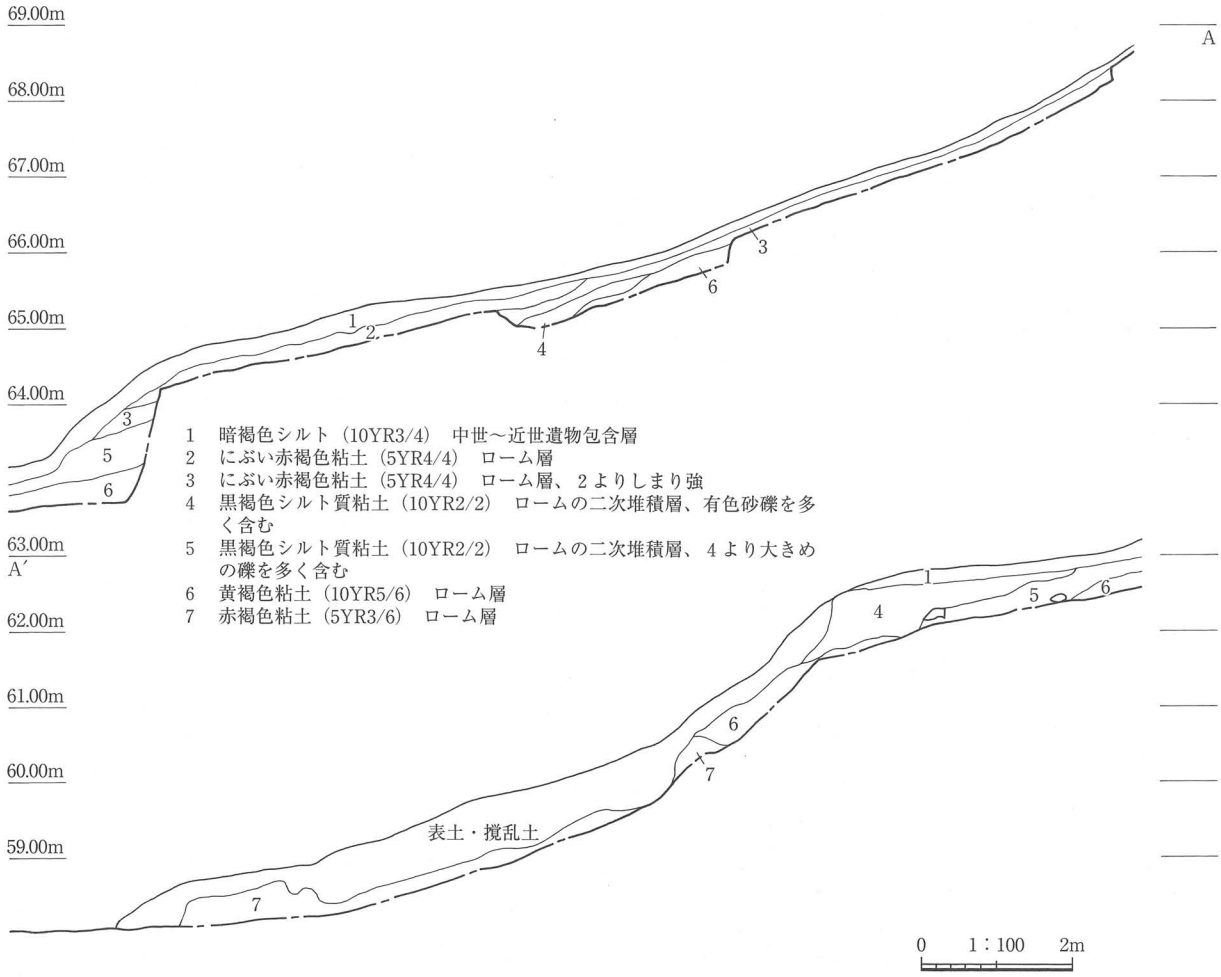
７層：赤褐色粘土。ローム層。



第25図　１区土層断面図



第26図　坂長ヨコロ遺跡遺構分布図



第27図　２区土層断面図

第２節　１区の調査

１．概要

縄文時代の落とし穴と考えられる土坑４基、中世墓１基を確認した。出土遺物はごく僅かで、落とし穴から縄文土器や石鏃、中世墓から骨壺として使用されたと考えられる備前焼壺が出土している。

２．遺構と遺物

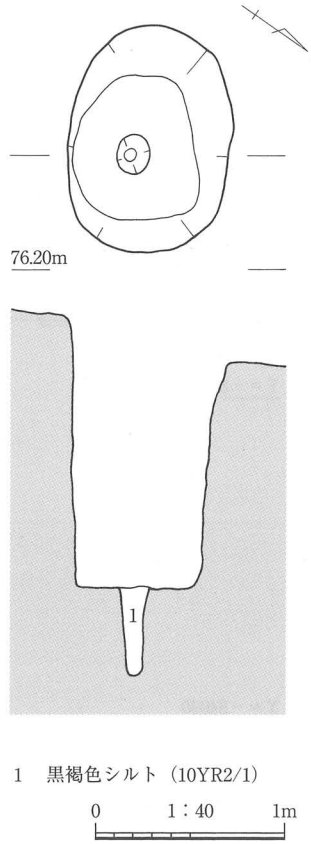
落とし穴

SK1（第28図　図版19）

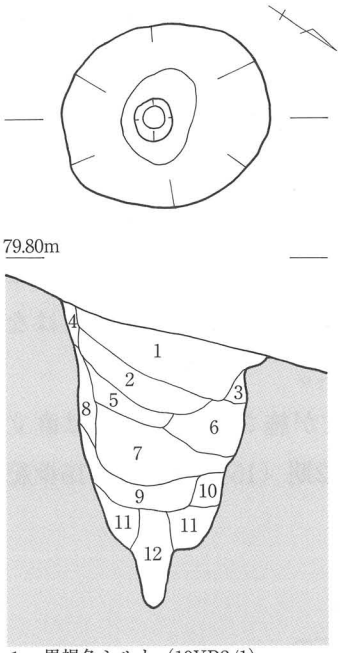
D3グリッド、標高73.0mの斜面に位置する。平面形は長軸1.2m、短軸85cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.5mである。底面の中央には径20cmの小穴があり、深さは45cmである。遺物は出土していないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK2（第29図　図版19）

E3グリッド、標高79.5mの斜面に位置する。平面形は長軸1.1m、短軸96cmの円形を呈する。検出面からの深さは1.4mである。底面の中央には径22cmの小穴があり、深さは30cmである。遺物は出土していないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。



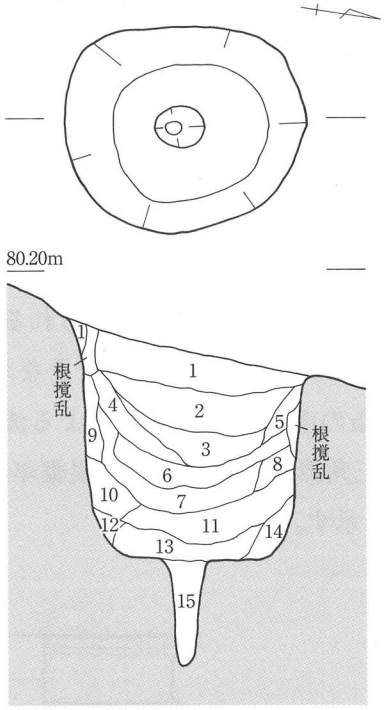
第28図　SK1



1　黒褐色シルト（10YR2/1）
2　黒褐色シルト（10YR2/1）
　１よりしまり弱、炭化物を含む
3　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ロームの細粒を含む
4　黒褐色シルト（10YR2/1）
　１、２よりもしまり弱
5　暗褐色シルト（10YR3/3）
　淡褐色シルトブロックを含む
6　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ローム細粒を含む
7　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ローム細粒と炭化物を含む
8　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ローム細粒を密に含む
9　黒褐色シルト（10YR2/1）
10　黒褐色シルト（10YR2/1）
　９よりしまり弱
11　黒褐色シルト（10YR2/1）
　10しまり強
12　黒褐色シルト（10YR2/1）
　11よりしまり弱、黄褐色ロー細粒を含む

0　1：40　1m

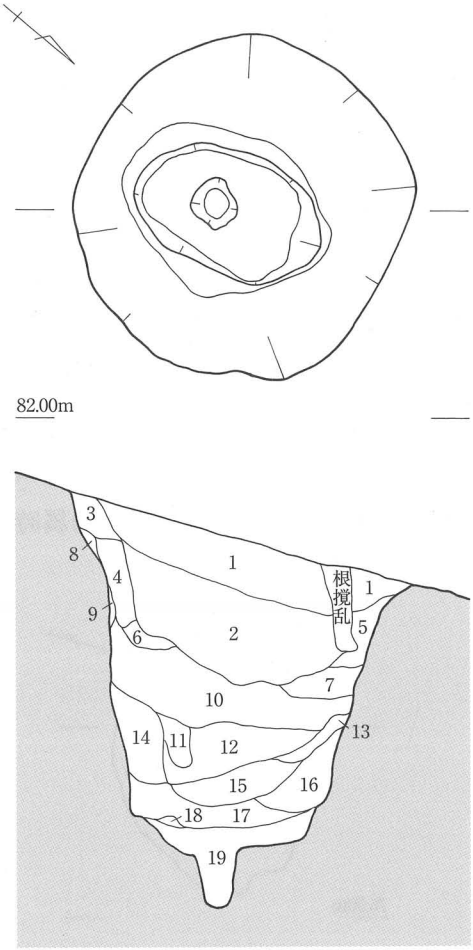
第29図　SK2



1　黒褐色シルト（10YR2/1）
2　黒褐色シルト（10YR2/1）
　１よりしまり弱、炭化物を含む
3　黒褐色シルト（10YR2/1）
　淡褐色シルトブロックを斑状に含む
4　黒褐色シルト（10YR2/1）
　淡褐色シルト、黄褐色ローム細粒を含む
5　黒褐色シルト（10YR2/1）
　淡褐色シルトを含む
6　暗褐色シルト（10YR2/3）
　淡褐色シルトブロックを含む
7　黒褐色シルト（10YR2/1）
8　黒褐色シルト（10YR2/1）
　淡褐色シルトブロックを斑状に含む
9　黄褐色粘土（10YR5/6）
　黄褐色ローム主体
10　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ロームブロックを含む
11　黒褐色シルト（10YR2/1）
12　暗褐色シルト（10YR2/3）
　黄褐色ローム細粒を含む、しまり弱
13　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ローム細粒を含む
14　暗黄褐色シルト（10YR2/3）
　黄褐色ロームブロックを含む
15　黒褐色シルト（10YR2/1）
　黄褐色ロームブロックを含む、しまり弱

0　1：40　1m

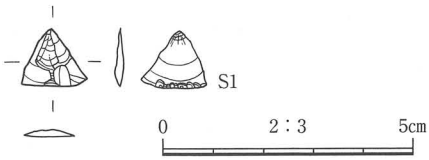
第30図　SK3



1　黒褐色シルト（10YR2/2）
2　暗褐色シルト（10YR3/3）
　黄褐色ローム細粒を含む
3　黒褐色シルト（10YR2/1）
　１よりしまり弱
4　暗褐色シルト（10YR3/3）
　淡褐色ロームブロックを含む
5　暗褐色シルト（10YR3/3）
　４よりしまり弱
6　黒褐色シルト（10YR2/1）
　３よりしまり強
7　暗黄褐色シルト質粘土（10YR5/2）
　黄褐色ローム細粒を含む
8　黄褐色粘土（10YR5/6）
　黄褐色ローム細粒主体
9　黒褐色シルト（10YR2/1）
　３、６よりしまり弱
10　暗褐色シルト（10YR3/3）
　黄褐色ローム細粒を含む
11　暗黄褐色シルト質粘土（10YR5/2）
　淡褐色ロームブロック主体
12　暗褐色シルト（10YR3/3）
　黄褐色ロームブロックを含む
13　黄褐色粘土（10YR5/6）
　黒褐色シルトブロックを含む
14　暗黄褐色シルト（10YR３/2）
　黄褐色ローム細粒を含む
15　黒褐色シルト（10YR2/1）
16　暗黄褐色シルト（10YR3/3）
　黄褐色ロームブロックを含む
17　暗黄褐色シルト（10YR3/3）
18　黄褐色粘土（10YR5/6）
　黄褐色ロームブロック主体
19　暗黄褐色粘土（10YR5/6）
　黄褐色ロームブロック主体

0　1：40　1m

第31図　SK4



第32図　SK4出土遺物

SK3（第30図）

E3グリッド、標高79.9mの斜面に位置する。平面形は長軸1.3m、短軸1.1mの円形を呈する。検出面からの深さは1.15mである。底面の中央には径27㎝の小穴があり、深さは55㎝である。埋土中から縄文土器片が出土した。縄文時代後期または晩期の落とし穴と考えられる。

SK4（第31・32図）

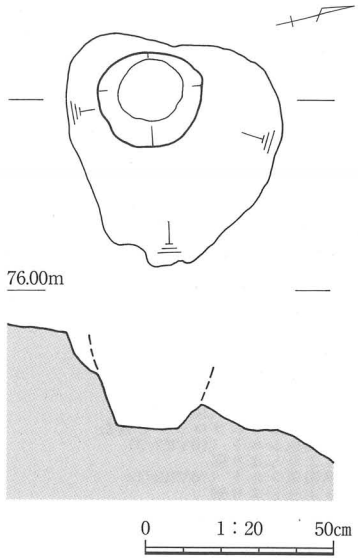
F4グリッド、標高81.4mの斜面に位置する。平面形は長軸1.8m、短軸1.7mのやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは1.6mである。底面のほぼ中央には24㎝の小穴があり、深さは30㎝である。遺物は埋土中から縄文土器の細片、石鏃S1が出土している。詳細な時期は特定できないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

中世墓

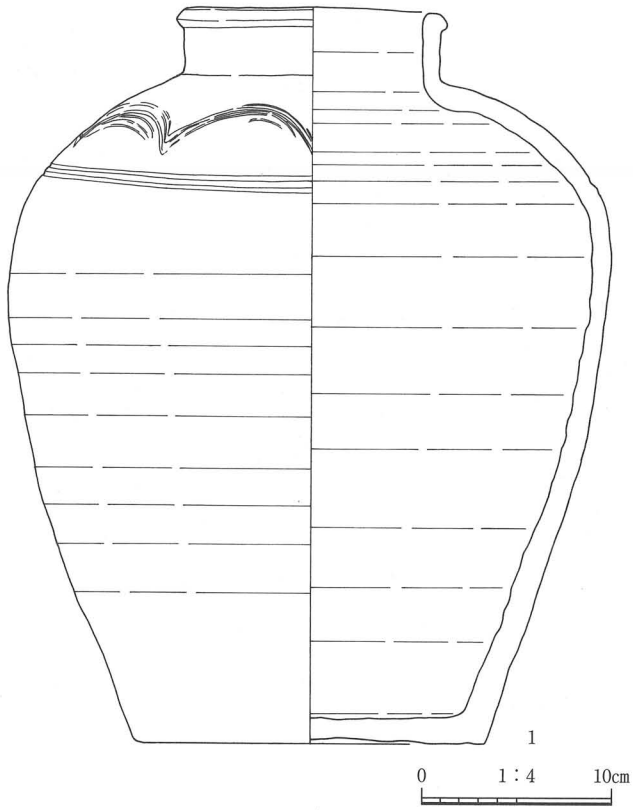
SX1（第33・34図　図版19）

D3グリッド、標高75.8mの急斜面に位置する。墓壙内から蔵骨器とみられる備前焼壺が出土し、火葬墓と考えられる。備前焼壺は表土剥ぎ中に重機により掘り起こしてしまったため、正確な出土状況は明らかにしえない。ただし、遺構の周辺は包含層が遺存せず、急斜面のため堆積層が著しく流出し、備前焼壺の上半がすでに表土中に露出してしまっていたものと推測される。確認できた墓壙は径27cmの円形を呈し、蔵骨器とほぼ同じ大きさで掘られたと考えられる。備前焼壺内部に副葬品はなく、流入していた土壌を全量採取し洗浄したが、骨片等も回収できなかった。

備前焼壺１は高さ38.6cmで、肩部に二条の直線文と櫛書きによる波状文が施される。頸部は直立し、口縁の玉縁は小さく、断面形がやや三角形ぎみとなる。重根編年ⅣB-2期（15世紀中頃～16世紀初頭）に比定され[1]、本遺構の帰属時期を示す。



第33図　SX1



第34図　SX1出土土器

第３節　２区の調査

１．概要

古墳時代中期の竪穴住居跡１棟、中世墓１基を検出した。遺物は包含層中から土師器、須恵器、陶磁器、灯籠、鉄製品などが出土している。なかでも、中世に比定される遺物の出土が目立ち、少量ながら貿易陶磁や灯明皿が含まれている点は特筆される。

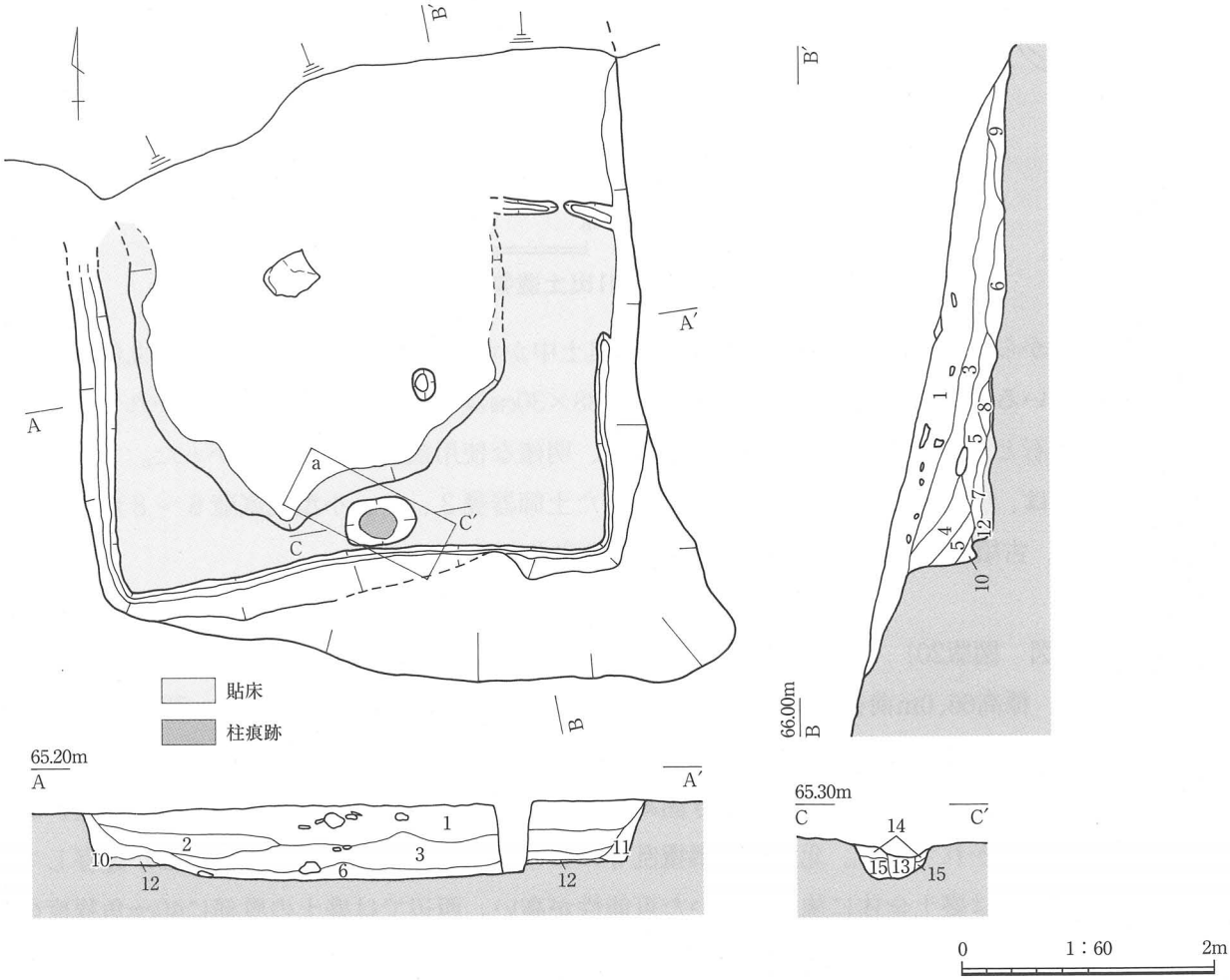
２．遺構

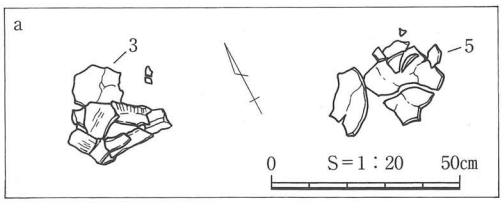
竪穴住居跡

SI1（第35・36図　図版21）

C8グリッド、標高65.3～64.4mの緩斜面に位置する。南側は中世以降の地形改変や流出により遺存していない。平面形は長辺４m以上、短辺4.5mの方形、または長方形を呈する。壁高は最大56cmで、北壁、および東西壁際には幅14cm、深さ10cmほどの周壁溝が巡る。南半の床面には壁面に沿ってコの字状に盛土が施され、いわゆるベッド状遺構と考えられるが、形状は歪で、幅も20～90cmと一定しない。盛土の厚さは１～６cmで、地山のロームブロックを主体とする。

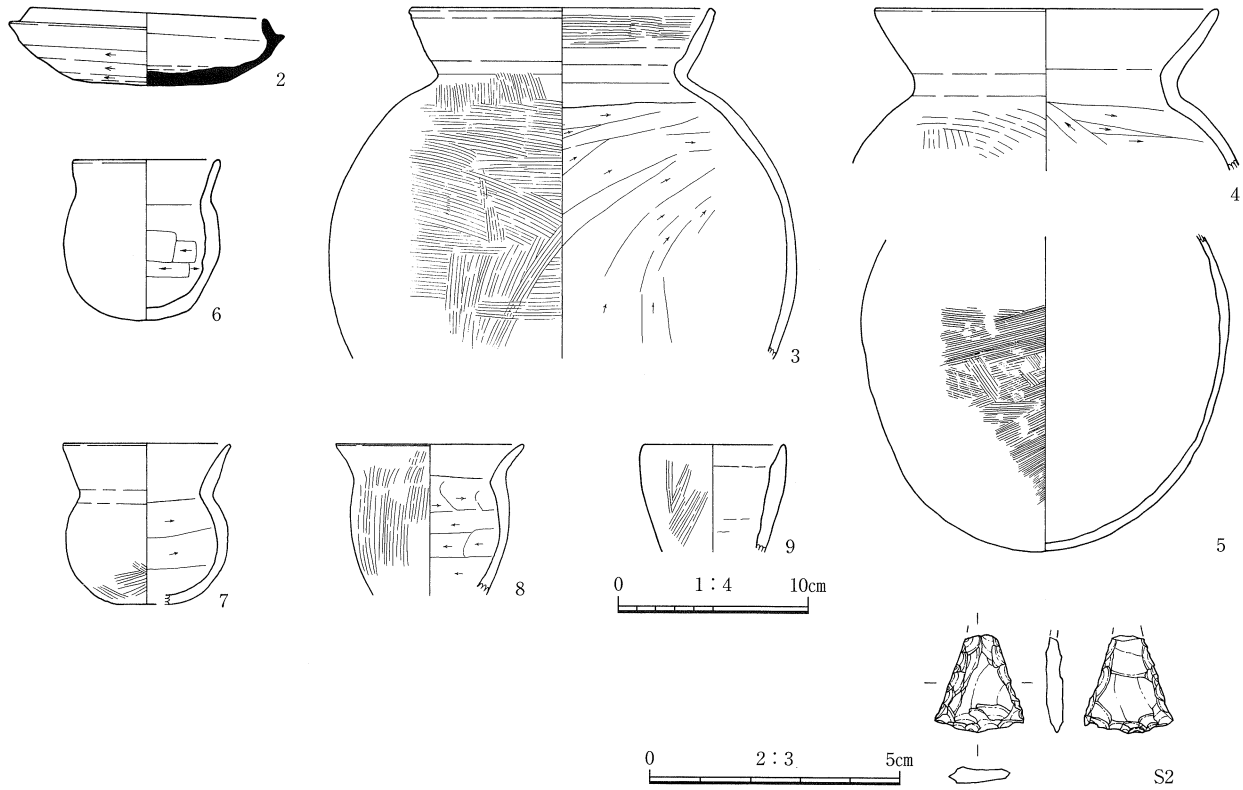
主柱穴は北壁沿いで１基（P1）のみ確認した。本来は南壁沿いにP1に対応する主柱穴が存在したとみられ、２本柱で上屋を支える構造であったと推測される。P1は長軸56cm、短軸36cmの楕円形を呈し、径22cmの柱痕跡が確認されている。





1　黒褐色シルト（10YR2/3）　拳大の礫を多く含む
2　暗褐色シルト（10YR3/4）　炭化物を多く含む。粘性弱
3　暗褐色シルト（10YR3/4）　炭化物を多く含む
4　暗褐色シルト（10YR3/3）　２よりしまり強
5　暗褐色シルト（10YR3/3）　３より炭化物が多い。
6　暗褐色シルト（10YR3/2）　炭化物を多く含む
7　黒褐色シルト（10YR2/3）　炭化物、橙褐色ロームブロックを含む
8　暗褐色シルト（10YR3/3）　橙褐色ロームブロックを含む
9　暗褐色シルト（10YR3/4）
10　褐色シルト（10YR3/4）
11　暗黄褐色シルト（10YR3/4）　褐色ロームブロックを含む
12　暗黄褐色シルト（10YR3/4）　淡褐色ロームブロック主体　貼床
13　黒褐色シルト（10YR2/3）　柱痕跡
14　暗褐色シルト（10YR3/4）
15　暗褐色シルト（10YR3/3）

第35図　SI1



第36図　SI1出土遺物

遺物は検出面から須恵器坏（２）、床面、および埋土中から土師器甕（３～５）、小型丸底壺（６～８）が出土している。また、床面の中央付近からは38×30cmほどの扁平な礫が据え置かれたような状態で出土し、台石として利用された可能性もあるが、明確な使用痕は確認できなかった。

本遺構の時期は、床面、および埋土中から出土した土師器甕３、４、小型丸底壺６～８が天神川Ⅵ期に比定され[2]、古墳時代中期（５世紀中葉頃）と推定される。

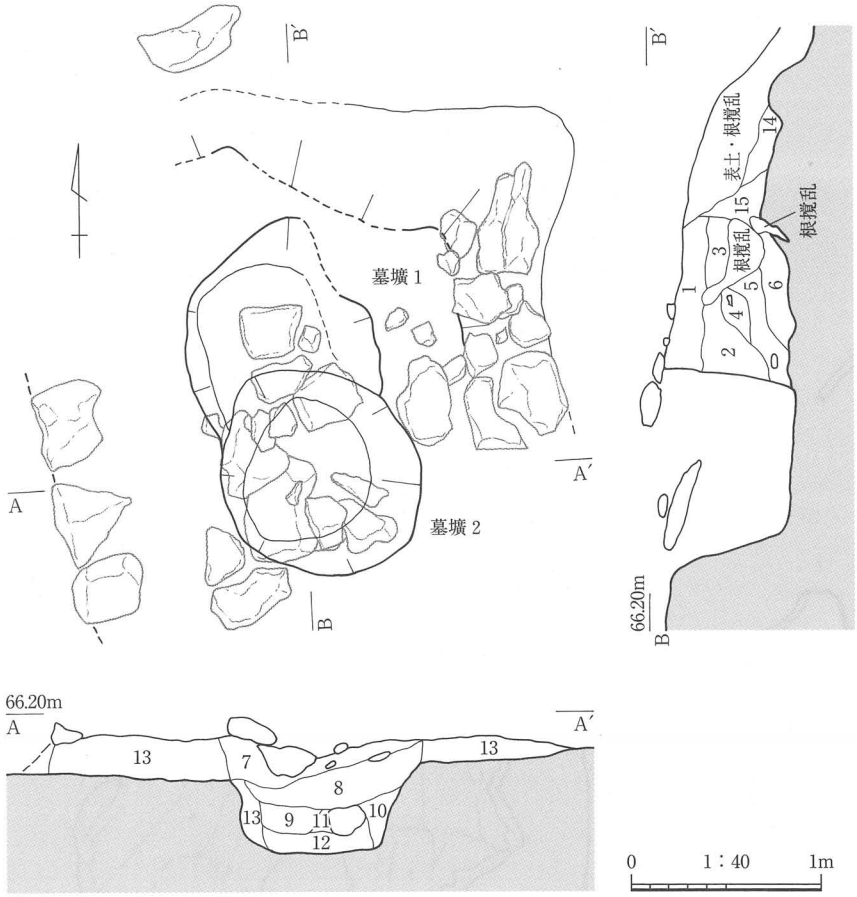
中世墓

SX2（第37・38図　図版20）

C11グリッド、標高66.0m前後の緩斜面に位置する中世墓である。やや歪ながら一辺2.7mほどの方形の盛土に貼石が施されている。盛土は現状で最大20cmの厚みがあり、斜面下方に厚く盛られていたと考えられる。暗褐色シルトの単層で、搗き固められた様子は窺えない。貼石は盛土の東西辺、および墓壙上面付近に置かれている。北辺では根攪乱等により盛土が流出しているため貼石が遺存していないが、本来、貼石は盛土全体に施されていた可能性が高い。西辺では盛土の肩部に40cm角程度の角礫が一列に並んでいる状況が窺えるが、その他の貼石に規則性は認められない。貼石は同一の石材で、周辺の基盤層に由来する角礫が使用されている。

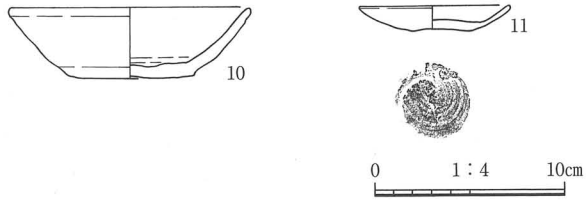
墓壙は盛土中央で２基検出され、重複関係から墓壙１→墓壙２の順に形成される。いずれの墓壙も土層断面や底面に棺痕跡は確認できないことから棺を用いずに土葬したものと考えられる。墓壙１は長軸１m以上、短軸1.0mのやや歪な長方形状を呈し、深さは65cmである。墓壙２は長軸1.2m、短軸1.0mの円形を呈し、深さは59cmである。

盛土中から土師器坏（10）、墓壙１の埋土中から土師器皿（11）が出土している。本遺構の時期は出土土器が八峠編年[3]の中世Ⅱ期に比定されることから、平安時代末頃（12世紀）と考えられる。



1　褐色シルト（10YR4/4）
2　暗褐色シルト（10YR3/3）
　黒褐色シルトブロックを含む
3　褐色シルト（10YR4/6）
　褐色ロームブロック主体
4　暗褐色シルト（10YR3/4）
　褐色ローム細粒を多く含む
5　暗褐色シルト（10YR3/4）
　３より褐色ロームブロックを多く含む
6　暗褐色シルト（10YR3/4）
　５よりしまり弱
7　暗褐色シルト（10YR3/3）
8　暗褐色シルト（10YR3/4）
　ロームブロックを含む
9　黒褐色シルト（10YR2/3）
　ロームブロックを含む
10　暗褐色シルト（10YR3/4）
　根撹乱の可能性もあり、しまりなし
11　暗褐色シルト（10YR3/3）
　２よりしまり強
12　暗褐色粘土質シルト（10YR3/4）
　６よりしまり強
13　暗褐色粘土質シルト（10YR3/4）
　ロームブロックを含む
14　暗褐色シルト（10YR3/3）
　しまり強
15　暗褐色シルト（10YR3/4）
　褐色ロームブロックを含む
16　褐色シルト質粘土（10YR4/6）
　褐色ロームブロック主体、しまり強

第37図　SX2



第38図　SX2出土土器

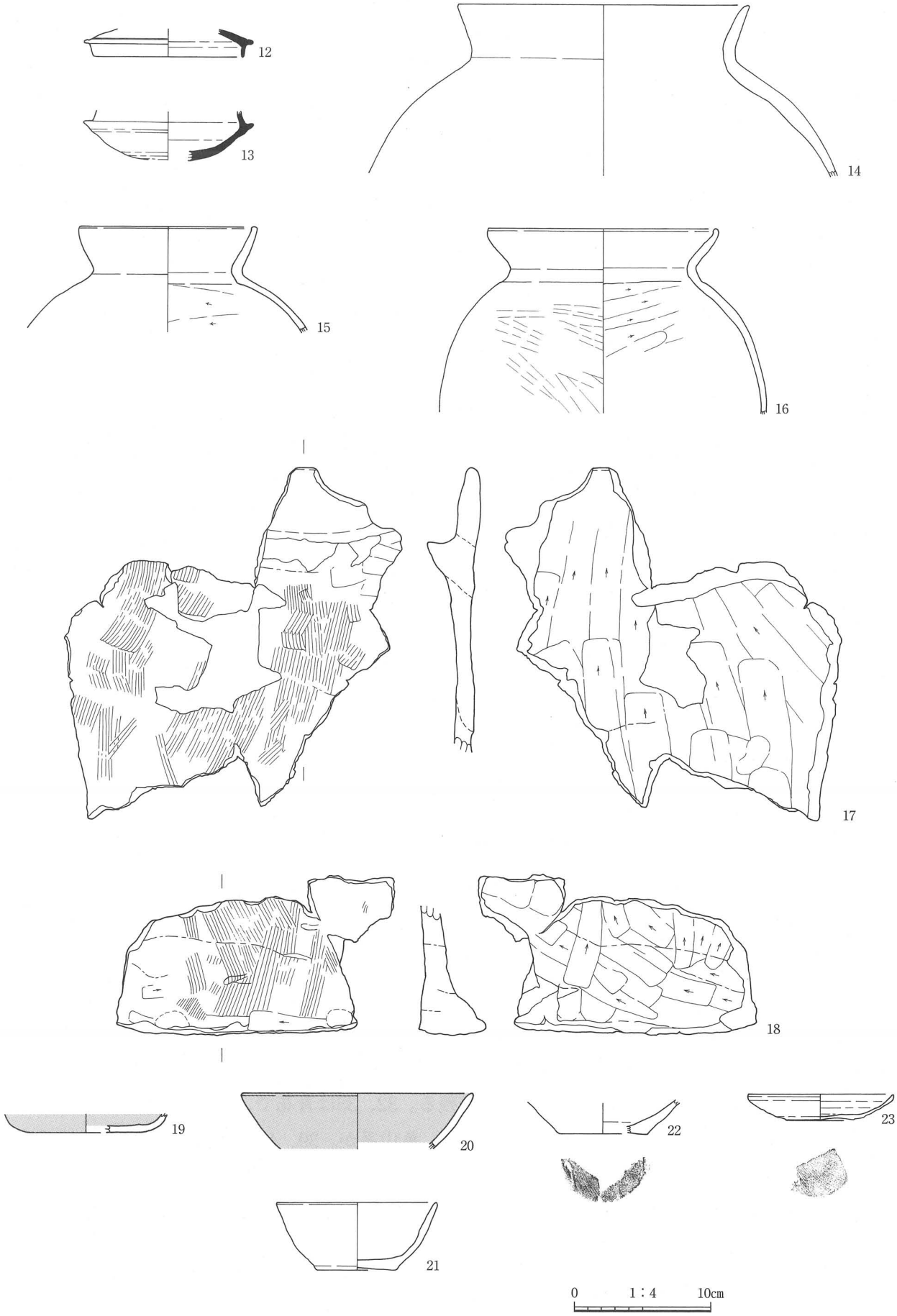
３．遺構外出土遺物

第39、40図は土器、土製品である。12～20は古墳時代中期から古代に比定される。17、18は移動式竈で、同一個体の可能性がある。17は掛口から胴部上半の破片で、外面に突帯が巡る。19は土師器坏の底部で、内外面ともミガキが比較的丁寧に施されている。底部外面には墨書があるが、判読できない。21～28、32～36、39～41は中世に比定される。21～25はロクロ成形の土師器坏、または皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。24は灯明皿である。26～28は手捏ね成形で、いわゆる京都系土師器皿と考えられる。31～33は輸入陶磁である。31は朝鮮陶磁の皿で、内面に焼成時の砂目が残る。32、33は青花で、32は小野分類[(4)]の碗Ｂ群、33は皿Ｃ群で碁笥底である。35、36は中世須恵器で、亀山系か。39、40は備前焼壺、41は常滑系の甕か。43は肥前系磁器である。

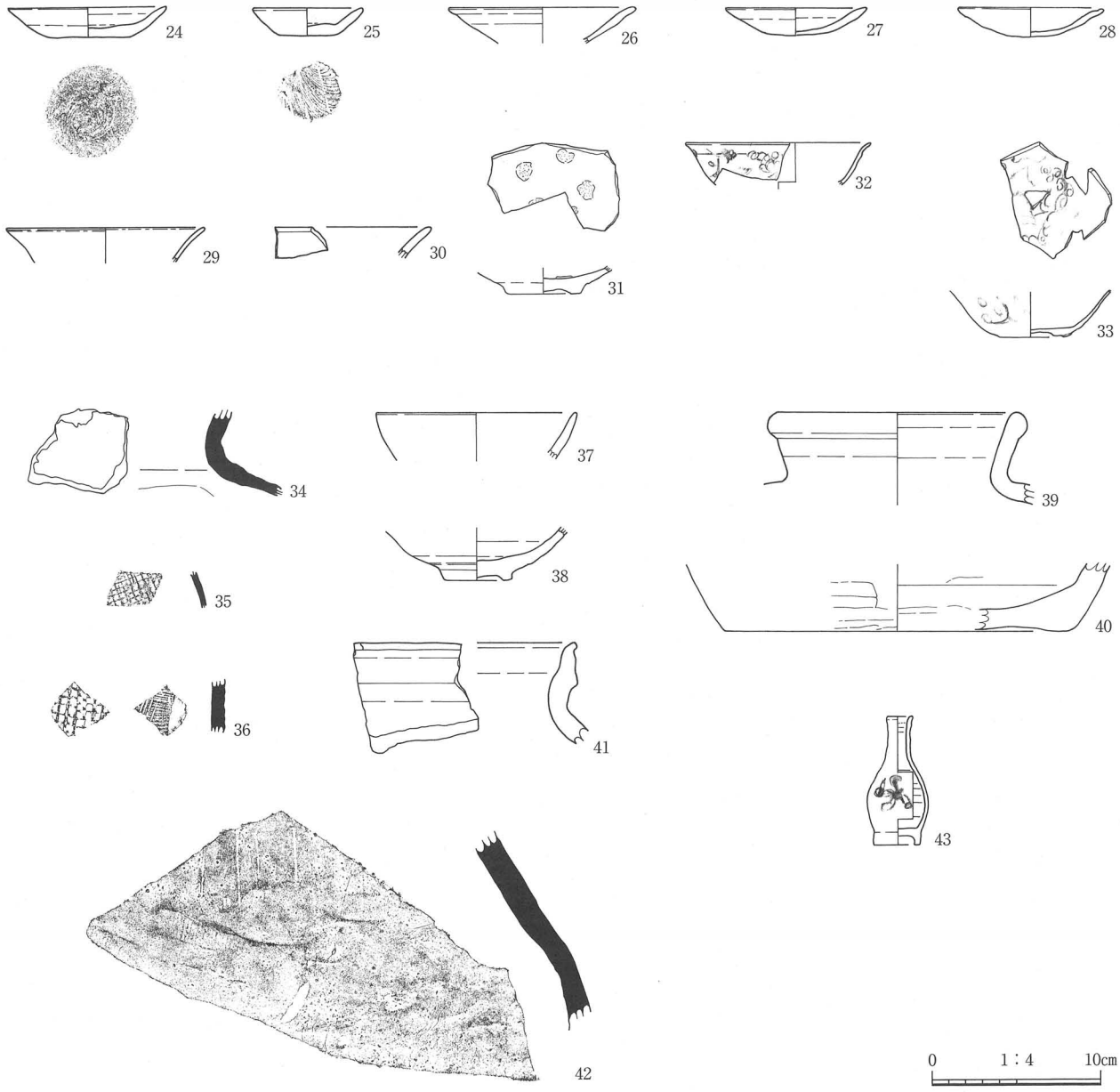
第41図は石器である。S3は黒曜石製の石鏃で、凹基である。S4は磨石、S5は敲石、S6は石鍬である。第42図S7は灯籠の火袋で、内面に鑿の痕跡が明瞭に残る。

第43図F1は丸鑿で、留金具と柄の木質が遺存する。近世以降の所産と考えられる。

第43図C1～4は銅銭で、いずれも１層から出土している。C1、２は元豊通寶（1078年初鋳）、C3は紹聖元寶（1094年初鋳）、C4は寛永通寶で、いわゆる古寛永である。



第39図　遺構外出土遺物（１）



第40図　遺構外出土遺物（２）

註

（１）重根弘和　2008「備前焼分類試案」『第７回山陰中世土器検討会資料集　山陰地方における備前焼』

（２）牧本哲雄　1999「第９章第１節　古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団

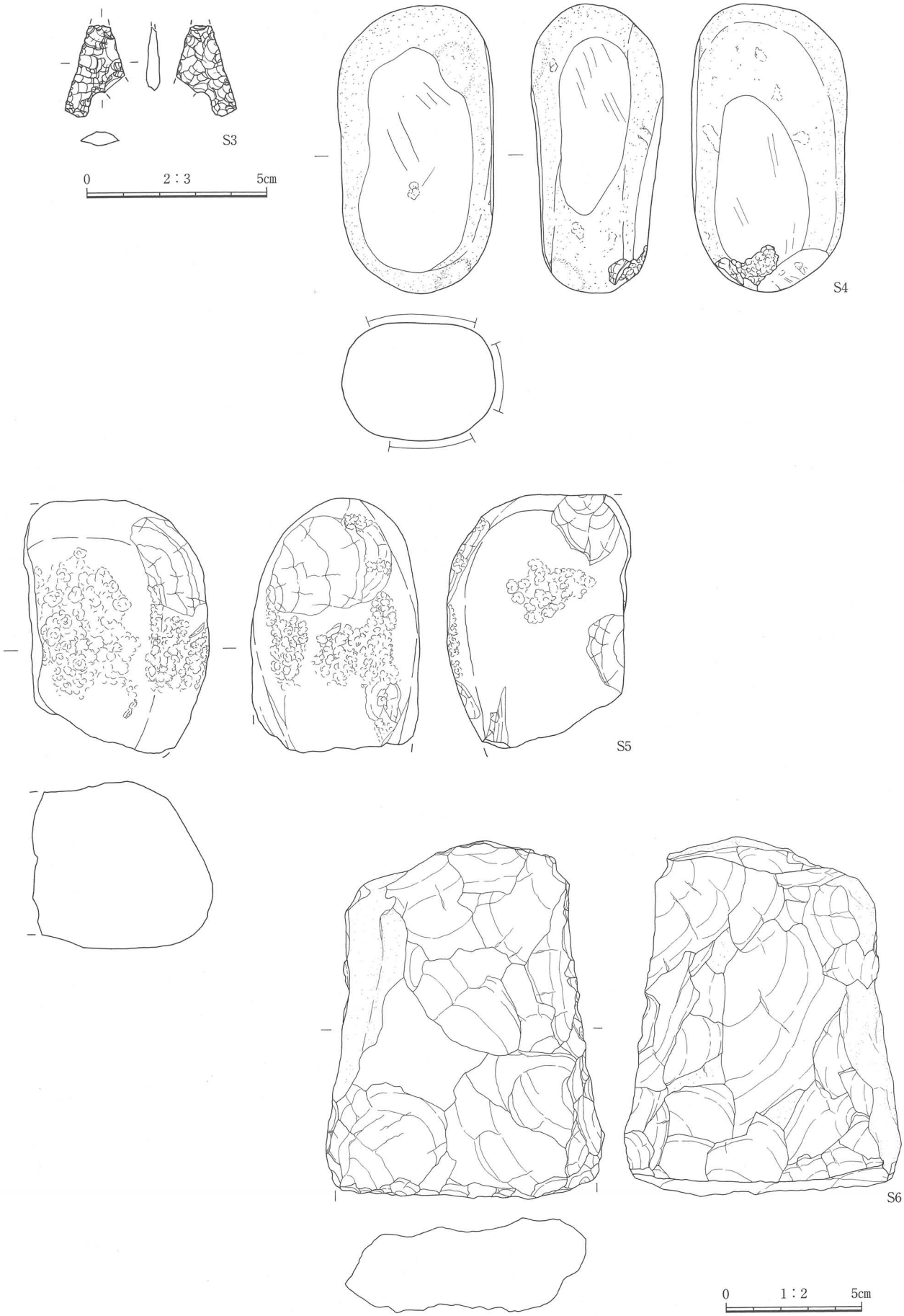
（３）八峠興　1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　日本中世土器研究会

（４）小野正敏　1981「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究№２』　日本貿易陶磁研究会

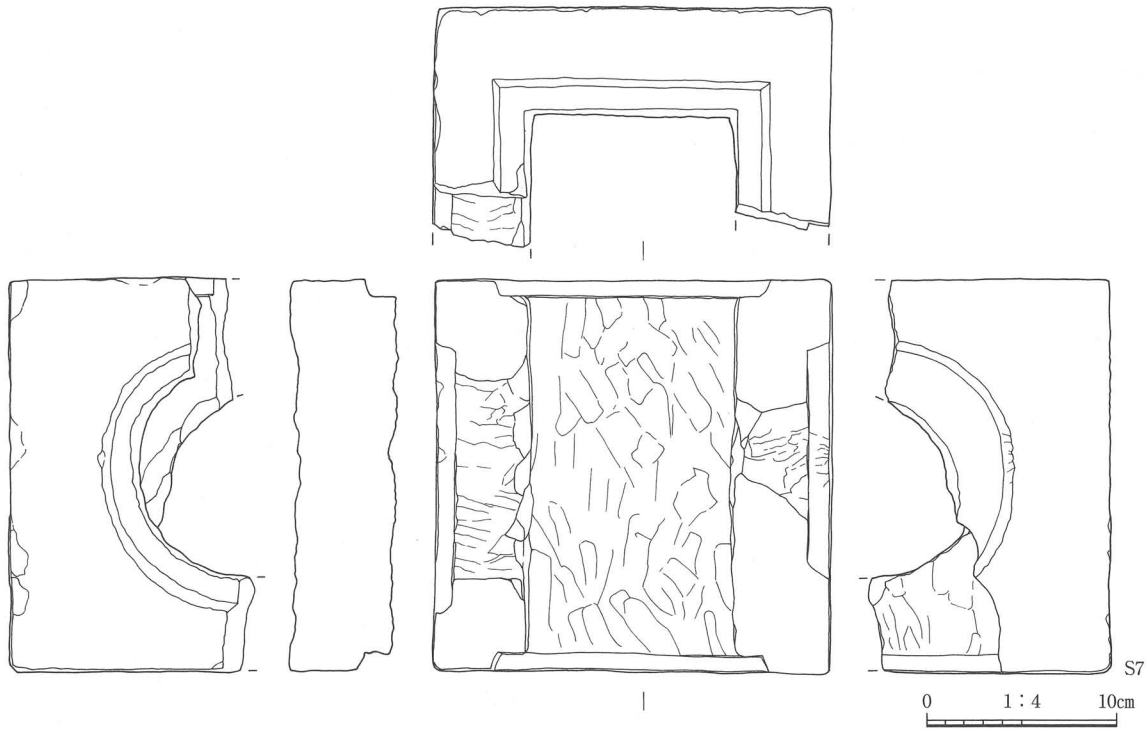
坂長ヨコロ遺跡土器観察表

＊復元値　△現存長

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
1	34	SX1	備前焼 壺	12.9 18.3	38.6	外面：肩部波状文　沈線２条　ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	にぶい黄褐色～浅黄色	
2	36	SI1 検出面	須恵器 坏	＊12.3 7	3.8	外面：ヨコナデ　天井部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	密 良好	灰色	ヘラ記号「X」
3	36	SI1 床直	土師器 甕	＊15.6	△18.5	外面：胴部ハケ 内面：口縁部ハケ　頸部以下ヘラケズリ	細かい砂粒を含む 良好	橙色	
4	36	SI1 下層	土師器 甕	＊18.0	△8.45	外面：胴部ハケ 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	にぶい黄橙色	
5	36	SI1 床直	土師器 甕		△16.7	外面：胴部ハケ 内面：風化の為観察不能	4㎜以下の砂粒を含む 良好	褐色～明褐色	
6	36	SI1 下層	土師器 小型丸底壺	＊7.6	8.5	外面：風化の為観察不能 内面：頸部以下ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒を含む 良好	にぶい黄褐色	
7	36	SI1 下層	土師器 小型丸底壺	＊8.6	△8.5	外面：胴部ハケ後ナデ 内面：頸部以下ヘラケズリ	細かい砂粒を含む 良好	にぶい橙色	
8	36	SI1 埋土中	土師器 小型丸底壺	＊9.8	△8.0	外面：ハケ 内面：頸部以下ヘラケズリ	細かい砂粒を含む 良好	にぶい黄橙色	
9	36	SI1 埋土中	土師器 不明	＊7.3	△5.7	外面：ハケ 内面：ナデ	細かい砂粒を含む 良好	橙色	
10	38	SX2 盛土中	土師器 坏	＊12.6 6.7	3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	細かい砂粒を含む 良好	橙色	
11	38	SX2 墓壙１	土師器 小皿	8.0 3.1	1.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	細かい砂粒を含む 良好	橙色	
12	39	表採	須恵器 坏蓋	＊10.9	△2.0	内外面：ヨコナデ	密 良好	灰褐色	
13	39	１層	須恵器 坏身		△3.6	内外面：ヨコナデ	密 良好	灰色	
14	39	１層	土師器 甕	＊21.4	△12.5	内外面：風化の為観察不能	密 良好	にぶい橙色	
15	39	１層	土師器 甕	＊12.8	△7.5	外面：風化の為観察不能 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	にぶい橙色	
16	39	１層	土師器 甕	＊16.9	△13.5	外面：胴部ハケ 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	橙色	
17	39	１層	土師器 移動式竈		△24.7	外面：粗いハケ 内面：ヘラケズリ	6㎜以下の砂粒を含む 良好	にぶい黄橙色	
18	39	１層	土師器 移動式竈		△11.7	外面：ハケ 内面：ヘラケズリ	9㎜以下の砂粒を含む 良好	にぶい黄橙色	
19	39	１層	土師器 坏	＊8.4	△1.3	外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	赤褐色	墨書土器 内外面赤色塗彩
20	39	１層	土師器 坏	＊16.9	△4.1	外面：ヘラケズリ後ヘラミガキか 内面：ナデ　一部ヘラミガキ	5㎜の砂粒を含む 良好	にぶい黄橙色	内外面赤色塗彩
21	39	１層	土師器 坏	＊11.7 5.7	△4.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	密 良好	にぶい黄橙色	
22	39	１層	土師器 坏	＊6.4	△2.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	密 良好	橙色	
23	39	遺構外	土師器 坏	＊10.7 ＊5.0	1.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	密 良好	黄橙色	
24	40	表土中	土師器 皿	9.3 5.1	1.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	密 良好	にぶい黄橙色	灯明皿
25	40	１層	土師器 小皿	＊6.3 3.6	1.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ　底部回転糸切り	密 良好	にぶい黄橙色	
26	40	遺構外	土師器 小皿	＊10.9	△2.1	内外面：ナデ	密 良好	にぶい黄橙色	
27	40	１層	土師器 小皿	＊8.3 3.5	1.65	内外面：ナデ	密 良好	淡黄色	
28	40	１層	土師器 小皿	＊8.2	1.7	外面：ナデ 内面：底部ユビオサエ	密 良好	にぶい橙色	
29	40	１層	陶器 碗	＊11.7	△2.0	口禿げ　内外面施釉	密 良好	灰白色	近世以降？
30	40	遺構外	陶器 碗？		△1.8	内外面施釉	密 良好	灰オリーブ色	近世以降？
31	40	１層	朝鮮陶磁 皿	＊4.4	△1.3	内外面施釉	密 良好	オリーブ灰色	
32	40	１層	青花 碗	＊11.0	△3.5	口縁が僅かに外反	密 良好	明緑灰色	
33	40	１層	青花 皿	4.0	△2.7	碁笥底　内外面施釉	密 良好	明緑灰色	
34	40	１層	須恵器 甕		△4.8	外面：格子タタキ 内面：頸部以下ヘラケズリ	密 良好	浅黄色	
35	40	１層	須恵器 甕		△2.0	外面：格子タタキ	密 良好	灰白色	亀山系
36	40	表土中	須恵器 甕		△3.2	外面：格子タタキ	密 良好	褐灰色	亀山系
37	40	１層	陶器 碗	＊11.9	△2.8	内外面施釉	密 良好	にぶい黄橙色	
38	40	１層	陶器 碗	4.0	△3.1	外面体部上半施釉	密 良好	にぶい黄橙色	
39	40	遺構外	備前焼 壺	＊14.0	△5.35	口縁玉縁 内外面ヨコナデ	密 良好	褐灰色	
40	40	１層	備前焼 壺	＊20.6	△4.0	外面：ヨコナデ	密 良好	赤褐色	
41	40	１層	常滑焼？ 甕		△6.0	内外面ヨコナデ	密 良好	淡赤褐色	
42	40	表土中	陶器 甕		△6.6	内外面ヨコナデ	密 良好	灰色	
43	40	１層	磁器 瓶	1.5 2.7	7.6	外面施釉	密 良好	明緑灰色	肥前系



第41図　遺構外出土遺物（３）

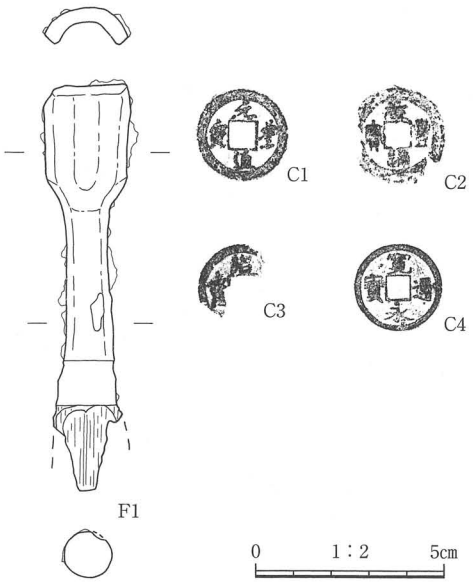


第42図　遺構外出土遺物（４）

坂長ヨコロ遺跡石器観察表

△現存長

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量 長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	備考
S1	32	SK4	石鏃	1.2	1.2	0.2	0.2	黒曜石	
S2	36	SI1 埋土中	石鏃	△1.9	1.8	0.3	1.7	サヌカイト	
S3	41	SX2 検出面	石鏃	△2.5	△1.4	0.4	1.1	黒曜石	
S4	41	１層	磨石	10.5	5.7	4.8	400.0	角閃石安山岩	敲石に転用
S5	41	１層	敲石	9.2	6.5	6.1	590.0	花崗岩	
S6	41	遺構外	打製石斧	13.1	10.2	3.4	660.0	デイサイト	
S7	42	１層	灯籠（火袋）	20.9	20.9	5.3	5,470.0	凝灰岩	



第43図　遺構外出土遺物（５）

坂長ヨコロ遺跡鉄製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量 長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
F1	43	表土中	鑿	10.9	2.6	1.2	58.4	木柄が遺存

坂長ヨコロ遺跡銅銭観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	法量 径（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
C1	43	１層	元豊通寶	2.4	0.1	2.5	1078年初鋳
C2	43	遺構外	元豊通寶	2.4	0.1	1.9	1078年初鋳
C3	43	１層	紹聖元寶		0.1	0.8	1094年初鋳
C4	43	１層	寛永通寶	2.3	0.1	2.2	古寛永

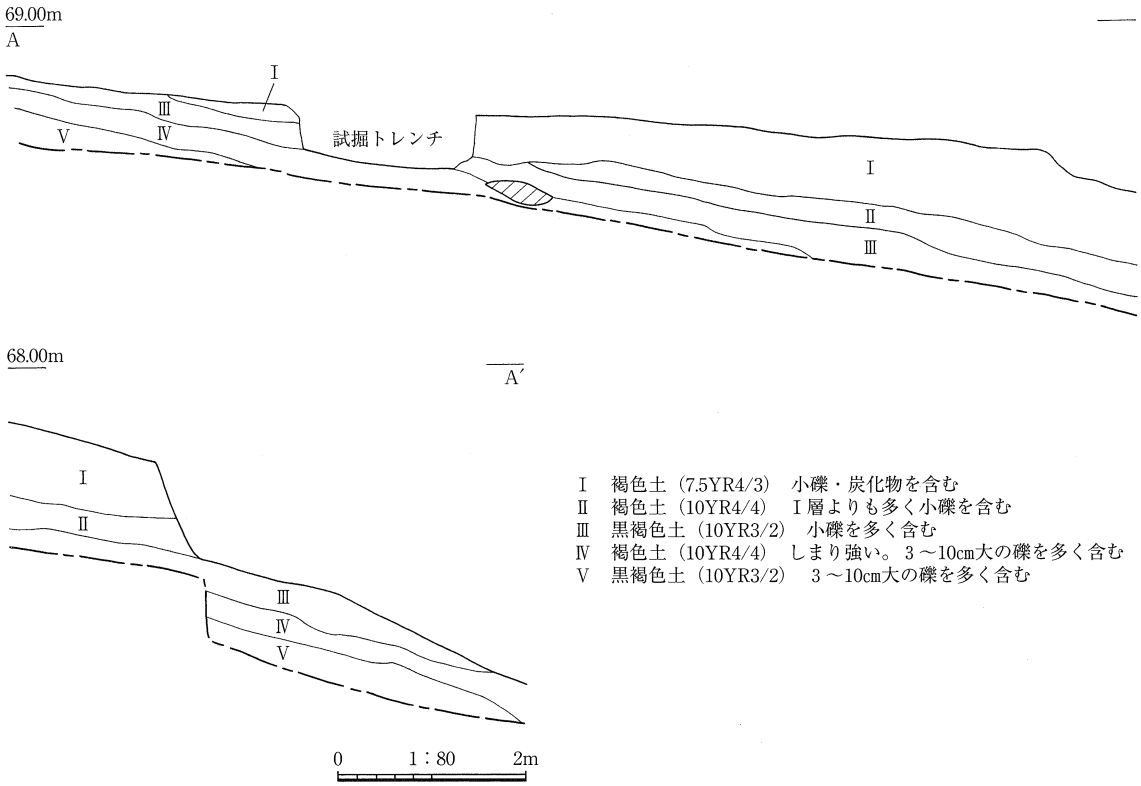
第５章　坂長熊谷遺跡の調査

第１節　１区の調査

１．概要

１区は南から北へ延びる２つの尾根とその間の谷部に位置する。東側の尾根は比較的なだらかで、西側の尾根は急峻である。調査前は山林であった。かつては水田として利用されていたため、谷部は平坦に近い緩斜面となっており、北側は大きく段切りされている。

遺構は時期不明の土坑１基だけである。遺物は包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、青磁、石鍋、鉄製品が出土している。



第44図　調査区土層断面図

尾根部では表土直下がローム層である一方、谷部では堆積層が厚く、最大で3.6mを測る。

谷部の基本的な層序は、以下のとおりである。Ⅰ・Ⅱ層が遺物包含層である。

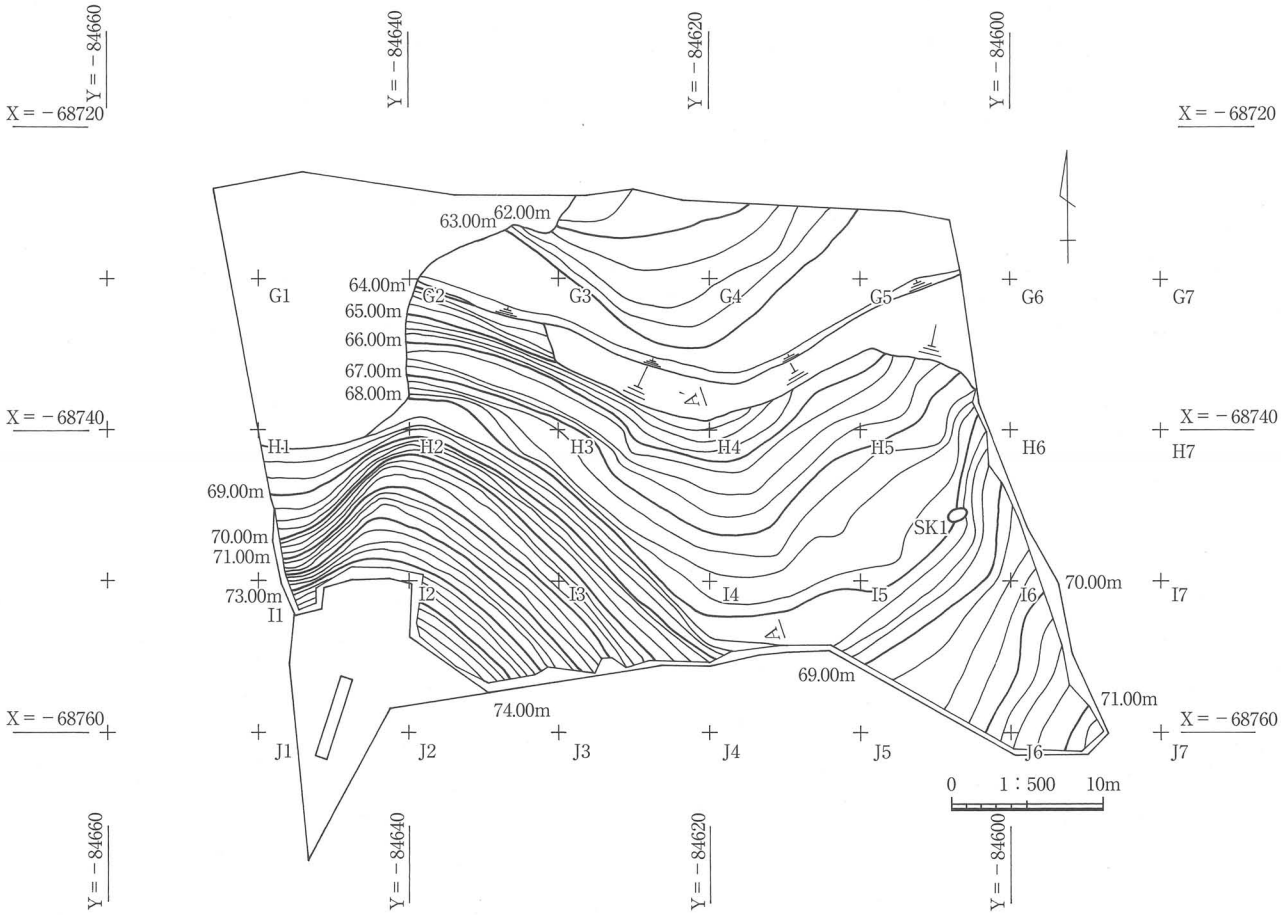
Ⅰ層：褐色土。厚さ0.5～1.0m。縄文時代～中世の遺物を包含する。

Ⅱ層：褐色土。厚さ0.2～0.4m。Ⅰ層よりも多く小礫を含む。縄文時代～中世の遺物を包含する。

Ⅲ層：黒褐色土。厚さ0.2～0.4m。小礫を多く含む。

Ⅳ層：褐色土。厚さ0.2～0.3m。しまりが強く、３～10cm大の礫を多く含む。

Ⅴ層：黒褐色土。厚さ0.4m以上。

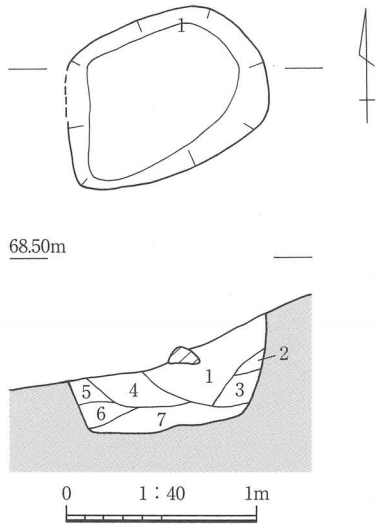


第45図　遺構分布図

２．遺構

土坑　SK1（第46図　図版27）

Ｈ６グリッド、標高68.0mの緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸108㎝、短軸84㎝、深さ51㎝を測る。遺物が出土していないため、時期は特定できない。



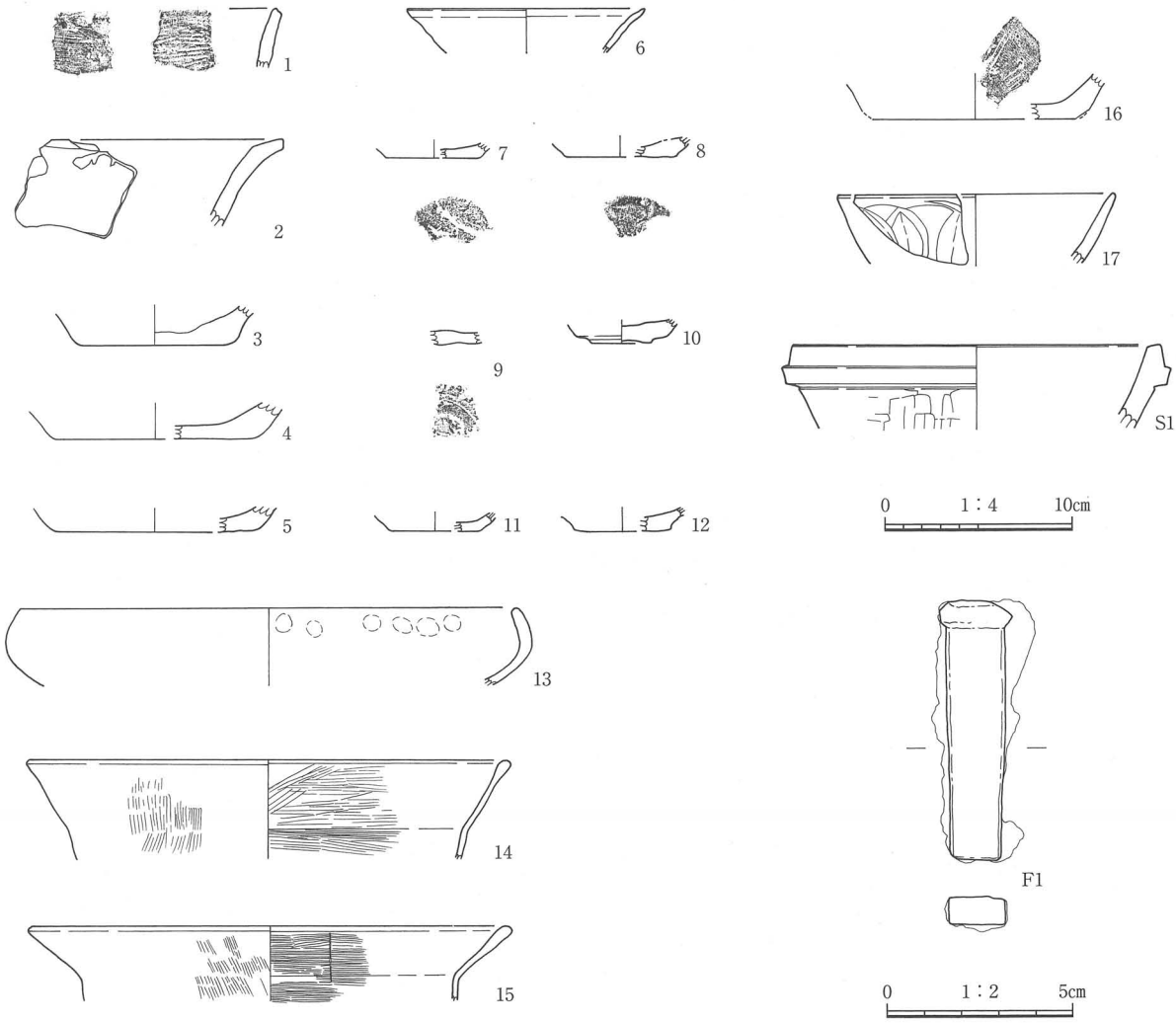
1　黒褐色土（7.5YR3/1）　礫を含む
2　暗褐色土（10YR3/3）　礫を含む
3　暗褐色土（7.5YR3/3）
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　礫を含む
5　灰褐色土（7.5YR4/2）　ロームブロックを多く含む
6　暗褐色土（10YR3/4）　ロームブロックを含む
7　褐灰色土（10YR4/1）　ロームブロックを含む

第46図　SK1

３．遺構外出土遺物（第47図　図版29・30）

Ⅰ・Ⅱ層からは縄文時代～中世の遺物が出土した。Ⅰ層とⅡ層は識別が困難であったことから一括して取り上げた。

１は縄文土器の口縁部で、内外面とも条痕が施されている。２～５は弥生土器で、２は壷の口縁部。その他は中世の遺物である。６は坏身、７～12は皿である。14・15は鍋で、口縁部はく字状に屈曲し、端部が玉縁状に肥厚する。いずれも外面には縦方向の、内面には横方向のハケ調整が施されている。16は瓦質の擂鉢。17は龍泉窯系青磁碗のⅠ―５b類[1]で、外面に蓮弁文を施す。Ｓ１は滑石製の石鍋で、口縁部外面には断面台形の鍔が巡る。胴部外面は幅５㎜前後の鑿を用いて口縁部から底部に向かって３段程削り出しており、鍔部の上下縁には、鍔部を削り出した際の鑿による沈線が明瞭に残る。内面は丁寧に磨かれている。胴部外面と口縁部内面には煤が付着している。木戸分類のⅢ―ｂ類[2]に該当し、13世紀代に比定される。Ｆ１は頭部がＴ字状を呈しており、鍔と考えられる。



第47図　遺構外出土遺物

出土土器・磁器観察表

※復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm)底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土焼成	色調	備考
1	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	縄文土器 鉢	— —	△3.2	外面：条痕 内面：条痕	密（1～4㎜の砂粒を含む） 良好	外面：褐色 内面：明橙色	
2	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	弥生土器 壺	— —	△4.6	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密（1㎜の砂粒を含む） やや良	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	
3	47	I5 Ⅰ・Ⅱ層	弥生土器 底部	— ※8.4	△1.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密（1～5㎜の砂粒を含む） 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
4	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	弥生土器 底部	— ※10.1	△1.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む） 良好	外面：にぶい橙色 内面：橙色	外面黒斑付着
5	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	弥生土器 底部	— ※10.8	△1.3	外面：ナデ 内面：摩滅のため調整不明	密（3㎜の砂粒を含む） 良好	外面：橙色 内面：橙色	
6	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 坏身	※12.7 —	△2.4	外面：回転ナデ 内面：摩滅のため調整不明	密 良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面煤付着
7	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 皿	— ※5.0	△0.5	外面：底部回転糸切り 内面：ナデ	密（1㎜の砂粒を多く含む） 良好	外面：橙色 内面：橙色	
8	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 皿	— ※5.6	△1.1	外面：底部糸切り 内面：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む） やや良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
9	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師 皿	— —	△0.6	外面：底部ヘラ切り 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
10	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 皿	— ※5.0	△1.0	外面：底部ヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明	密（2～5㎜の砂粒を含む） 良好	外面：橙色 内面：橙色	
11	47	G6 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 皿	— ※5.0	△1.0	外面：底部ヘラ切り 内面：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む） 良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
12	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 皿	— ※5.2	△1.3	外面：底部ヘラ切り 内面：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む） 良	外面：橙色 内面：橙色	
13	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 鉢か？	※26.5 —	△3.1	外面：ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	密（1㎜以下の砂粒を含む） 良好	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
14	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 鍋	※25.6 —	△5.3	外面：ハケ 内面：ハケ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：淡橙色	外面煤付着
15	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	土師器 鍋	※25.6 —	△4.0	外面：ハケ 内面：ハケ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
16	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	瓦質土器 擂鉢	— ※11.1	△1.9	外面：摩滅のため調整不明 内面：ナデ、摺り目	密（1～2㎜の砂粒を含む） 良	外面：灰色 内面：灰色	
17	47	G5 Ⅰ・Ⅱ層	青磁 碗	※14.9 —	△3.7	外面：蓮弁文、施釉 内面：施釉	密 良	外面：オリーブ灰色 内面：オリーブ灰色	龍泉窯系

出土鉄製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	遺物名	法量 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
F1	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	鋲	7.0	2.6	1.1	36	

出土石製品観察表　※復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	層位	器種	法量 口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	石材	備考
S1	47	H5 Ⅰ・Ⅱ層	石鍋	※19.8	—	△4.4	滑石	内外面に煤付着

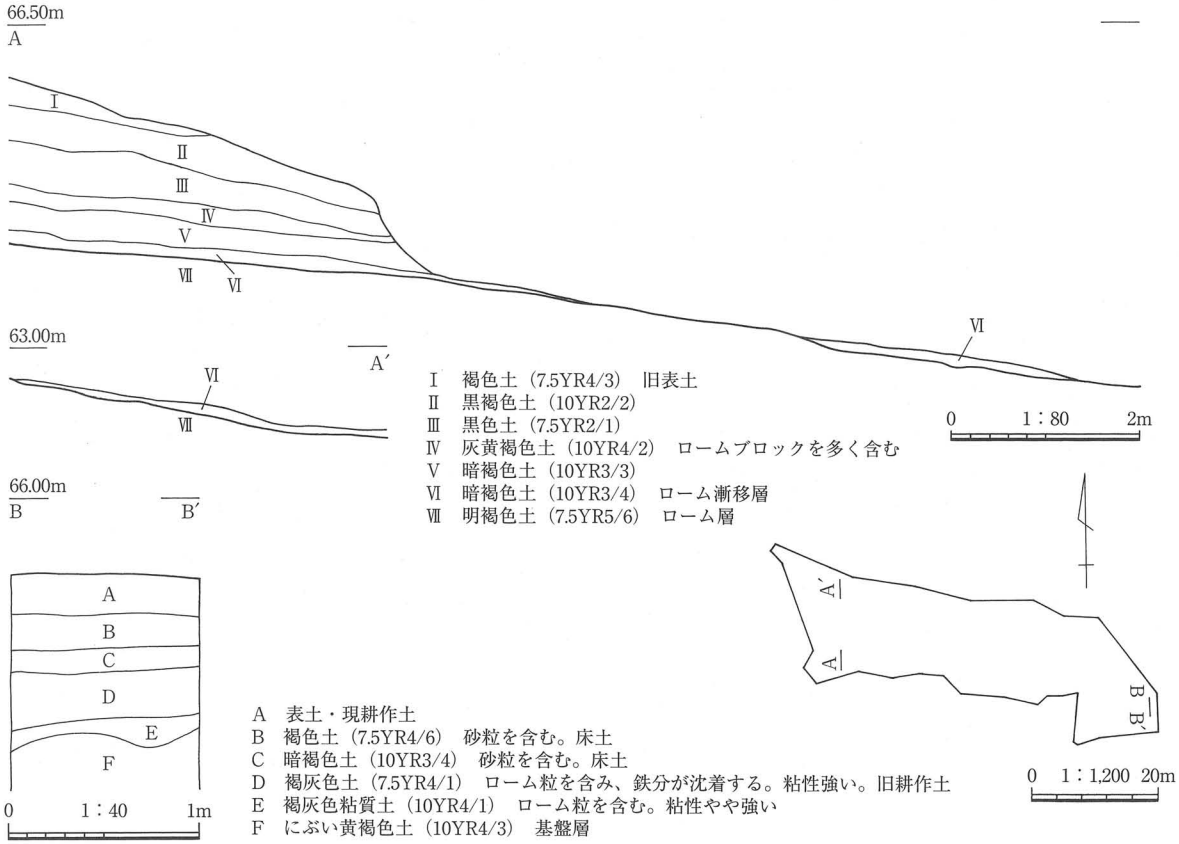
第２節　２区の調査

１．概要

２区は南から北にのびる尾根とその両側の谷部に位置する。尾根部と谷部との比高差は約２～３ｍである。調査前は尾根部と西側の谷部は山林、東側の谷部は畑地で、かつては水田であった。そのため、尾根部と西側の谷部は段々状に、東側の谷部も厚く埋め立てて造成されていた。

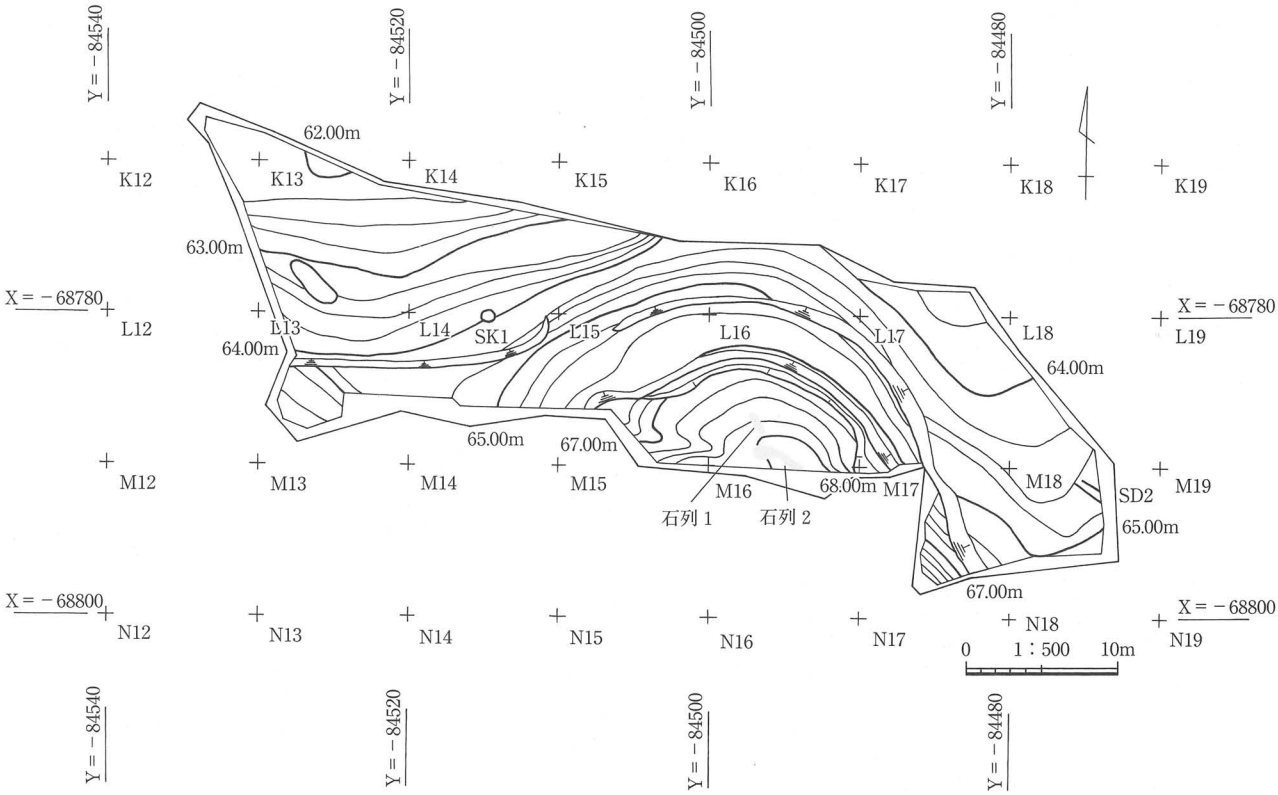
遺構は落とし穴１基、溝状遺構２基、石列２基を検出した。なお、調査区中央の尾根上には古墳の存在が想定されていたが、埋葬施設や周溝などは確認できず、遺物も出土しなかった。

遺物は表土や包含層（Ⅱ層・Ｅ層）から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器が出土した。



第48図　調査区土層断面図

調査区内の堆積は、尾根部と西側の谷部では大部分で表土直下がローム層となる。南西側には遺物包含層（Ⅱ層）が遺存する。北西側では削平によりⅤ・Ⅵ層だけが遺る。一方、東側の谷部では耕作土が厚く、直下にローム層か基盤層がある。SD2周辺には僅かに遺物包含層（Ｅ層）が遺存する。



第49図　遺構分布図

２．遺構

落とし穴　SK1（第50図　図版28）

K15・L15グリッド、標高64.0mの尾根裾部の緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。平面形は円形を呈し、径73×83cm、深さ95～103cmを測る。１層から縄文土器細片が出土した。底面ピットは確認できなかったが、規模や形態から縄文時代の落とし穴であろう。

溝状遺構　SD1（第51図　図版27）

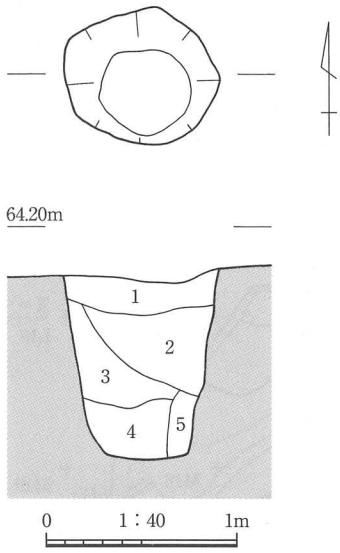
K14グリッド、標高63.0mの緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。北西方向に直線的にのび、検出した長さは3.9mで、幅1.1～1.4m、深さ２～９cmを測る。底面の標高は南東端が３cm高い。埋土は単層で、遺物は出土していない

溝状遺構　SD2（第51図　図版27）

M19グリッド、標高64.5mの谷部の平坦面に位置し、基盤層上面で検出した。北西方向に直線的にのび、南東側は調査区外へと続く。検出した長さは1.9mで、幅37～59cm、深さ５～13cmを測る。底面の標高は南東端が８cm高い。埋土は単層で礫を多く含む。遺構内からは遺物が出土していないが、SD2を覆うＥ層から須恵器と土師器が出土している。

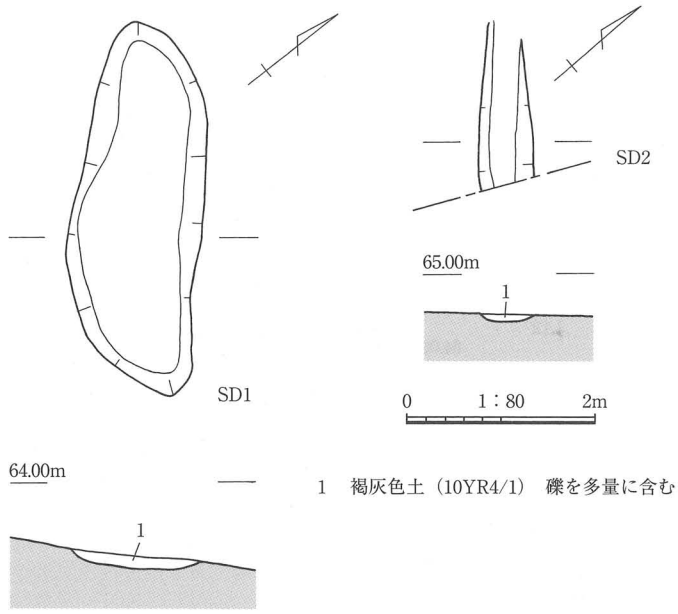
石列１（第52図　図版28）

L17グリッド、標高68.0mの尾根上の平坦面に位置し、ローム層上面で検出した。やや湾曲して北西方向にのびており、長さ1.3m、幅23～40cmを測る。10～45cm大の角礫を12石用い、配列に規則性は認められない。時期は石の隙間に表土に由来する土が認められることと、周辺の出土遺物から近世後半以降と考えられる。



1　黒褐色土（7.5YR3/2）　粘性強い
2　暗褐色土（7.5YR3/3）　少量の砂粒を含む
3　黒褐色土（10YR2/3）　少量の砂粒を含む
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　砂粒をやや多く含む
5　褐色土（7.5YR4/6）　ロームブロックを含む

第50図　SK1



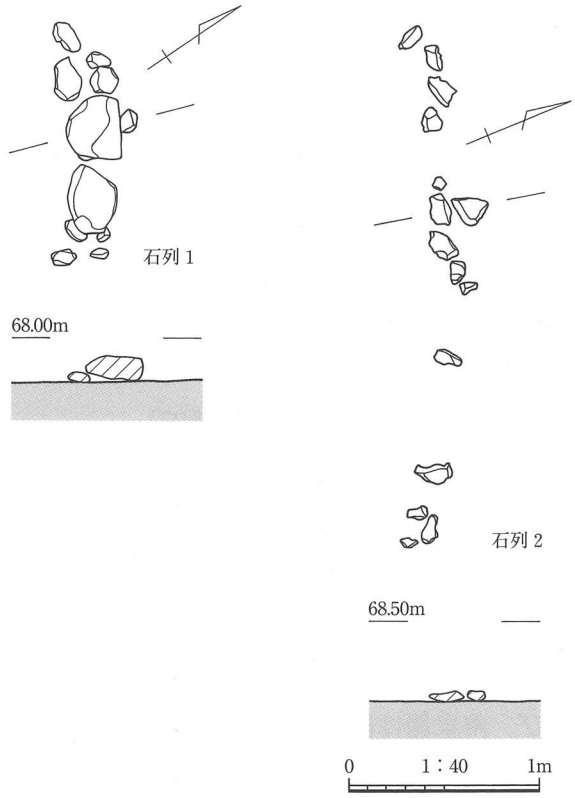
1　黒褐色土（10YR2/2）　砂粒を含む

1　褐灰色土（10YR4/1）　礫を多量に含む

第51図　SD1・2

石列２（第52図　図版28）

L17グリッド、標高68.0mの尾根上の平坦面に位置し、ローム層上面で検出した。やや湾曲して西北西―東南東方向にのびており、長さ2.8m、幅16～31cmを測る。７～20cm大の角礫を15石用いているが、配列に規則性は認められない。石列１と同じ理由で近世後半以降のものと考えられる。



第52図　石列１・２

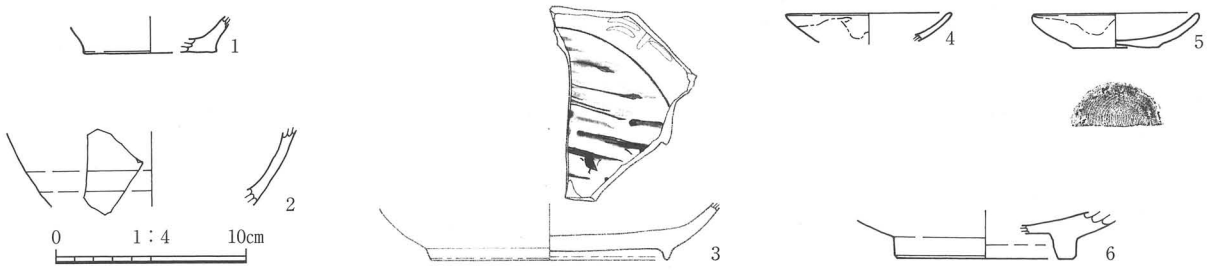
３．遺構外出土遺物（第53図　図版29）

１は調査区西側のⅡ層から出土した弥生土器の底部である。２～６は調査区中央の尾根部の表土から出土した。２は青磁碗、３は肥前系の磁器皿、４～６は陶器である。３は高台畳付部に砂が付着し、高台内にはハリ支え痕がある。４・５は灯明皿で、内面と口縁部外面が施釉されている。６は大皿あるいは鉢で、高台は削り出して成形し、見込みには環状に砂が付着している。

註

（１）上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』２

（２）木戸雅寿　1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ



第53図　遺構外出土遺物

出土遺物観察表

※復元値　△残存値

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
1	53	L15 Ⅱ層	弥生土器 底部	— ※7.1	△1.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密（1㎜以下の砂粒を多く含む） 良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
2	53	L17 表土	青磁 碗	— —	△4.0	外面：施釉 内面：施釉	密 良好	外面：オリーブ灰色 内面：オリーブ灰色	
3	53	L17 表土	磁器 皿	— ※12.5	△3.0	外面：施釉 内面：施釉	密 良好	外面：明青灰色 内面：明青灰色	高台畳付部砂付着 高台内ハリ支えあり
4	53	L17 表土	陶器 灯明皿	※8.6 —	△1.5	外面：回転ナデ、口縁部施釉 内面：施釉	密 良好	施釉部：黒褐色 露胎部：にぶい黄褐色	
5	53	L17 表土	陶器 灯明皿	※8.7 ※4.6	1.8	外面：回転ナデ、口縁部施釉、底部回転糸切り 内面：施釉	密 良好	施釉部：暗赤褐色 露胎部：明赤褐色	
6	53	M18 表土	陶器 皿or鉢	— ※9.3	△2.5	外面：ケズリ 内面：回転ナデ、環状に砂が付着	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：オリーブ黄色	見込部環状に砂付着

新旧遺構対照表

坂長ヨコロ遺跡		坂長熊谷遺跡２区	
新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SX1	１区　SX1	SK1	SK2
SX2	２区　SX1	SD1	SD3
		SD2	SD4

第6章　まとめ

平成20年度に発掘調査を実施した3遺跡からは、主に3時期の遺構と遺物が出土した。

縄文時代の落とし穴や土器がすべての遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡や円墳などが坂長ヨコロ遺跡と坂長下門前遺跡で見つかっている。

中世に関しては、3遺跡とも顕著な調査成果があった。坂長下門前遺跡3区では16世紀後半頃に普門寺に関係して設けられたと推定される土塁を調査した。坂長熊谷遺跡では石鍋や青磁などが出土している。坂長ヨコロ遺跡の遺構と遺物は多彩である。12世紀と15世紀の墓を検出し、後者からは備前焼の壺が出土した。古道や溜池の岸と考えられる地形も確認されている。青花磁器や朝鮮陶器などの輸入陶磁器をはじめ、石灯籠の部材や北宋銭、京都系土師皿など、急峻な斜面地には不似合いな遺物が出土している。

これら中世の遺構や遺物の性格を考察する上で重要なのは、賀茂神社と坂中氏であろう。賀茂神社は、現在は長者原台地上の字稲場にあるが、元は熊谷にあり、坂中丹波という人物が創建したという伝承が残っている。旧社地は地元では「古宮」と呼ばれ、坂長熊谷遺跡1区の南方約100m、標高100mの巨岩の前と伝えられる。折良く、平成21年10月に約50年ぶりの遷宮があり、賀茂神社のすべての棟札を読む機会があった。詳細は『坂長地区の歴史』に譲るが、最も古い棟札は慶長4年（1599）のもので、坂中九兵衛と坂中久右衛門の名が見える。次の寛文元年（1661）の棟札には、1枚目の要約があり、そこには坂中九兵衛と書かれるべき場所に「小村九兵衛」とある。以上から、賀茂神社は慶長4年に坂中九兵衛によって創建されたもので、坂中氏は本姓を小村氏といったと考えられる。

これまで、坂中氏については、永禄10年（1567）の杉原盛重から坂中弥六あての宛行状が唯一の文献であった。ただ、地元には、坂中丹波の墓などの伝承地がある。これは、江戸中期には成立していた小説『伯陽闘戦記』に登場する「坂中丹波」に由来している可能性がある。実際の坂中氏は、「丹波」を名乗ったかは分からないが、弥六・九兵衛・久右衛門と継がれ、伝承の丹波にあたるのは九兵衛ということになる。おそらく戦国期かそれ以前から活躍した在地の有力な小領主で、関ヶ原の合戦後ごろに帰農したのであろう。

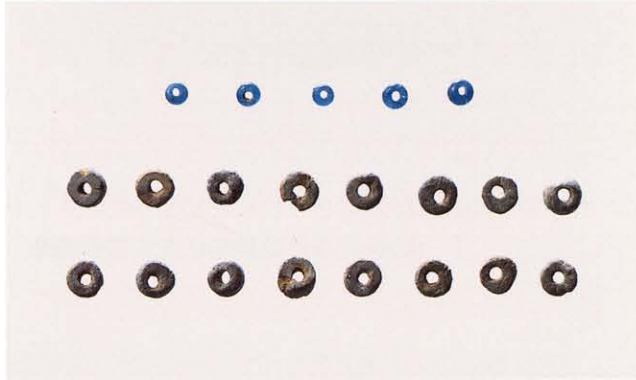
今回の調査で出土した中世の遺構や遺物には、坂中氏と関係があるものが含まれると思われる。熊谷の南方山上の字岩コゴロは伝坂中丹波の陣所であり、その墓は谷を挟んだ台地上の字五反林にある。坂中氏の居館跡は近くにある可能性が高い。また、坂長ヨコロ遺跡から出土した石灯籠や灯明皿は賀茂神社に関係する祠のもので、古道は溜池の岸を通って神社にむかう参道であったと推定される。問題は、賀茂神社が熊谷から現在の場所に遷った時期である。出土した最新の古銭が古寛永であることは、寛文年間ごろまでは祠があった可能性を示唆する。この事実は、棟札の調査から、賀茂神社が寛文元年に熊谷から現在地に遷宮されたと考えられることと整合する。

参考文献

賀茂神社遷宮実行委員会　2009『坂長地区の歴史』

図　版
PLATE

1　坂長35号墳出土土器

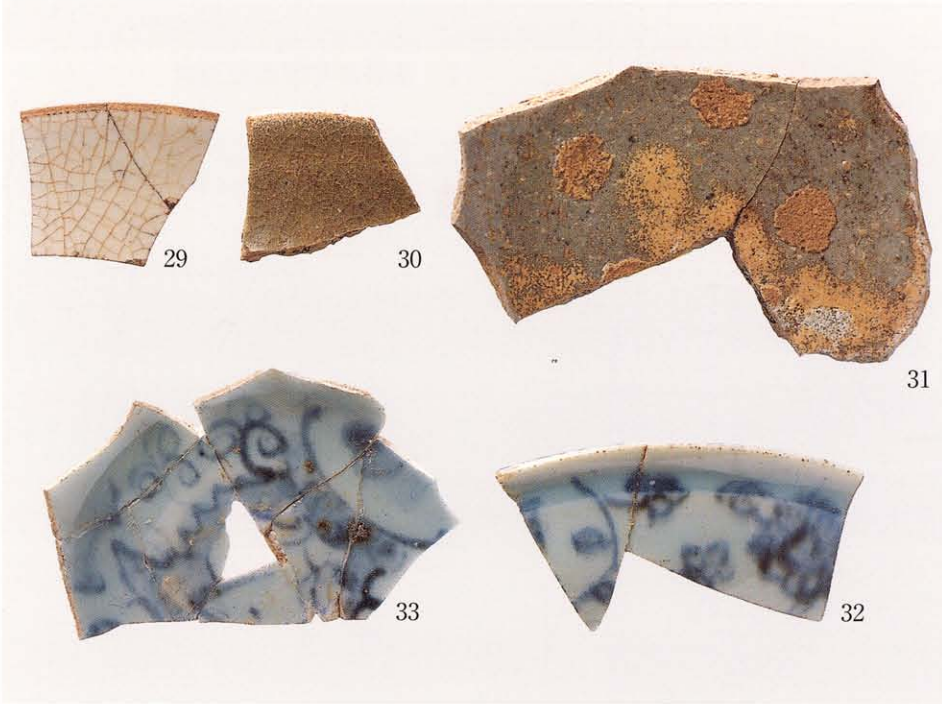


2　坂長35号墳出土玉類

3　坂長35号墳棺痕跡（北から）

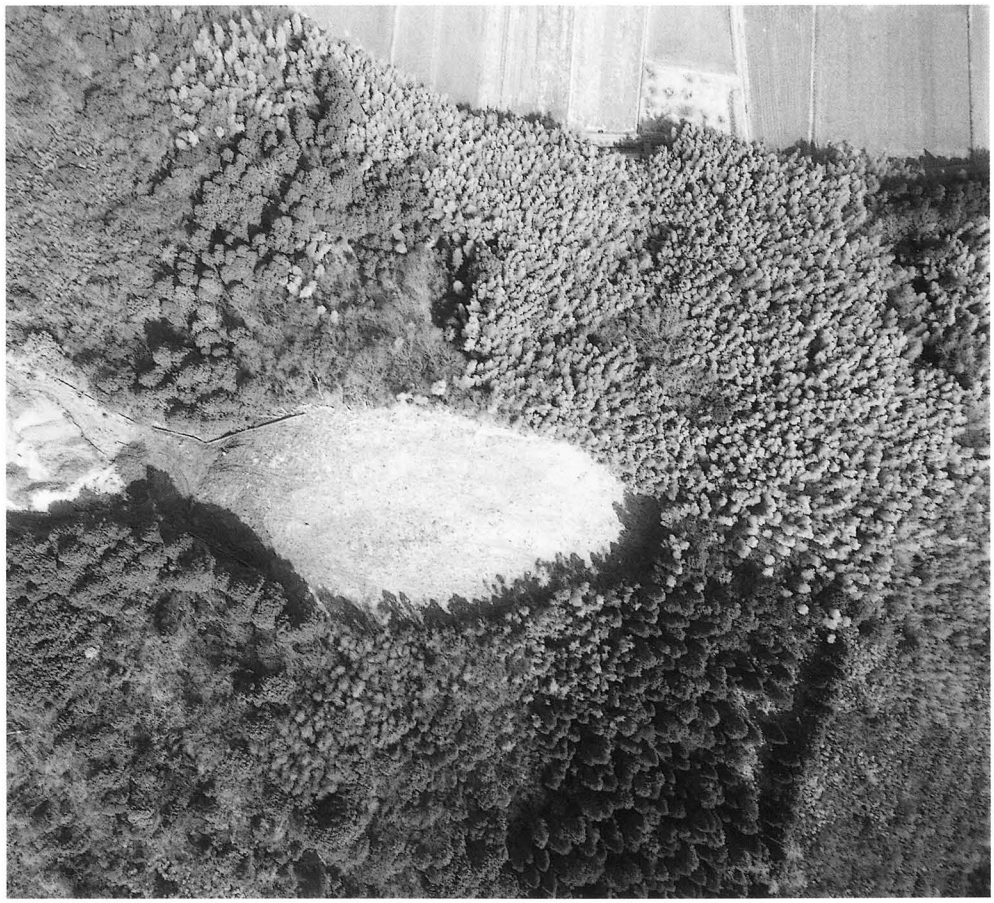
図版 2　坂長ヨコロ遺跡

1　坂長ヨコロ遺跡SX1出土備前焼壺



2　坂長ヨコロ遺跡出土陶磁器

1　調査地周辺の地形（南東から）



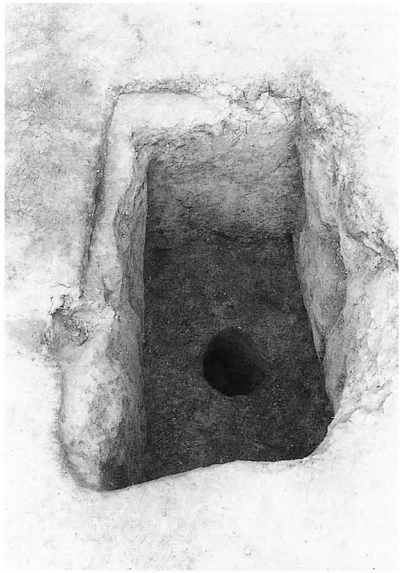
2　調査地周辺の地形（上が北）

図版 4　坂長下門前遺跡２区

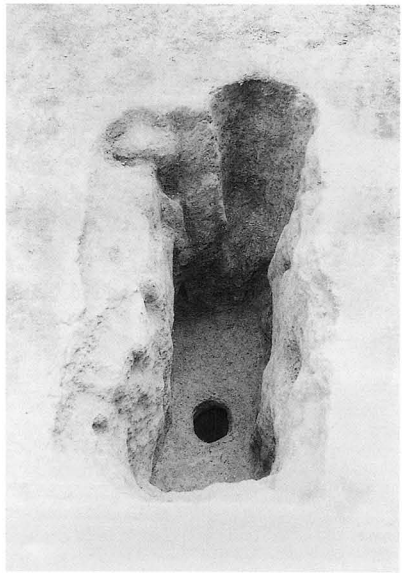
1　SK1完掘状況（西から）

2　SK2完掘状況（南から）

3　SK3完掘状況（東から）



4　SK4完掘状況（南から）



5　SK5完掘状況（西から）

6　SK8完掘状況（東から）

7　SK7完掘状況（北から）

8　SK9完掘状況（東から）

1　SK10土層断面（北から）

2　SK3底面杭痕跡検出状況（南から）

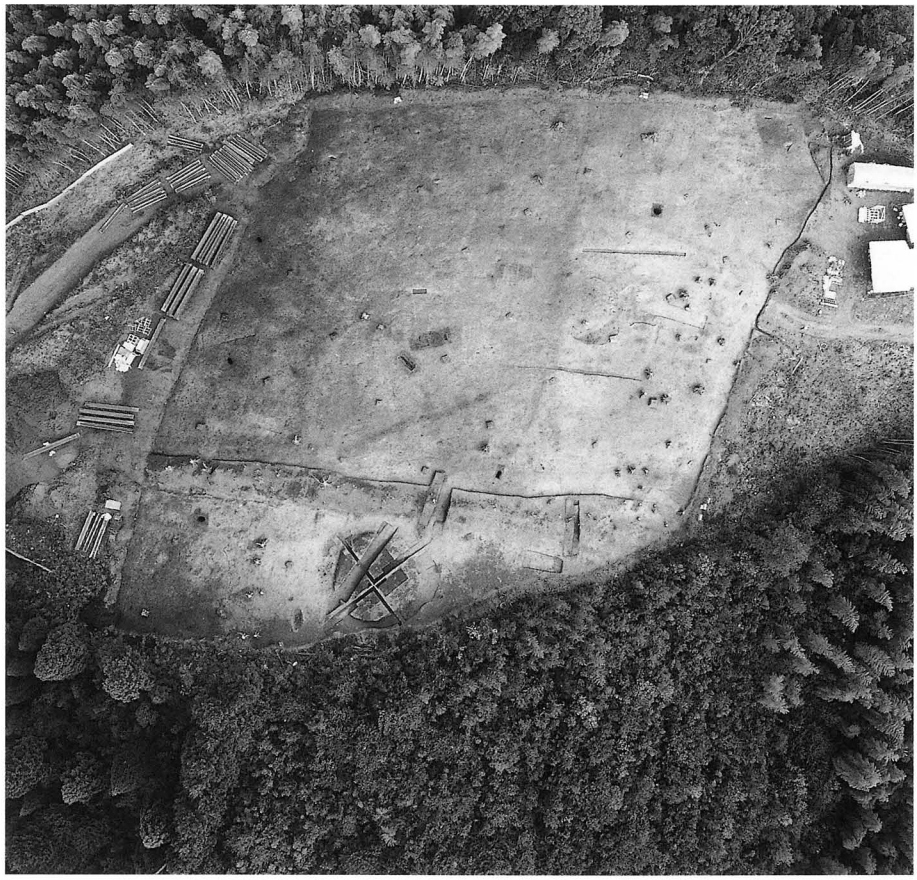
3　調査区完掘状況（西から）

図版6　坂長下門前遺跡３区

1　調査地周辺の地形（南東から）

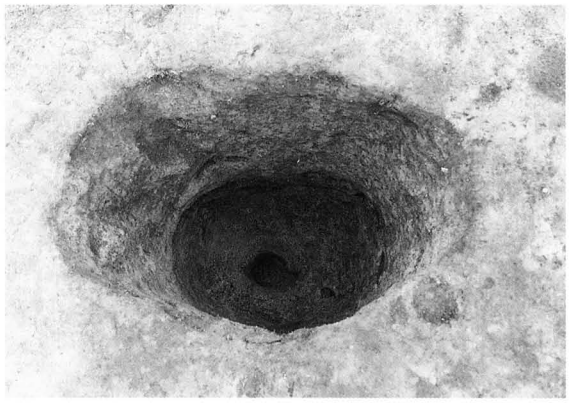
2　調査地周辺の地形（北西から）

1　調査地全景
（北東から）



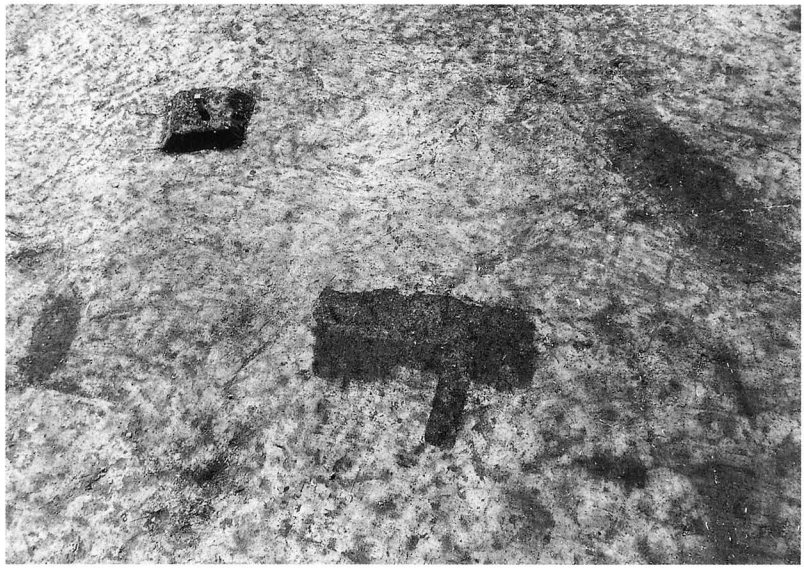
2　調査地全景
（上が北）

図版 8　坂長下門前遺跡３区



1　SK1完掘状況（南から）

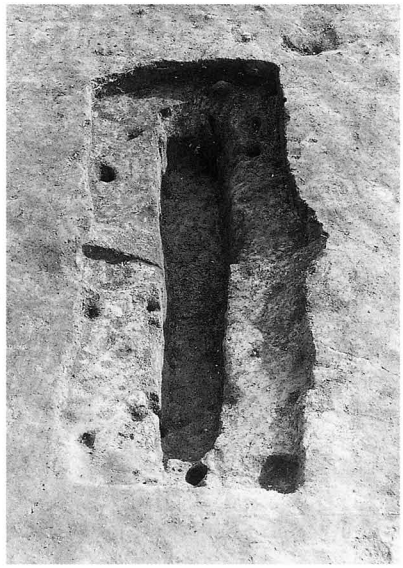
2　SK2完掘状況（東から）



3　SK6～SK8検出状況（北から）

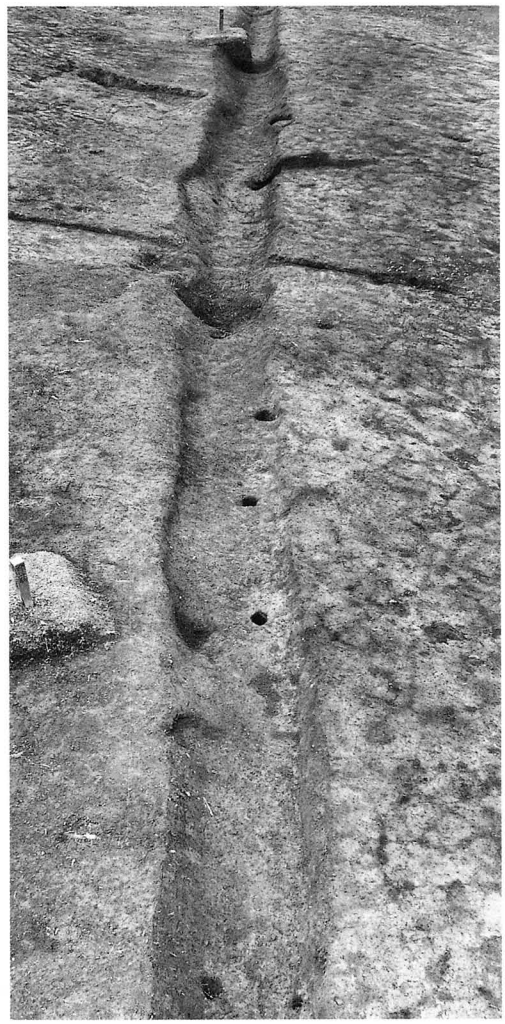
4　SK6土器出土状況（東から）

5　SK7土層断面（北東から）



6　SK7完掘状況（北から）

1　土塁全景（西から）

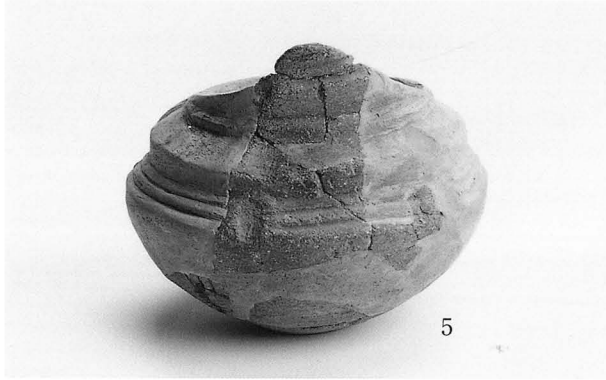


2　SD2完掘状況（東から）

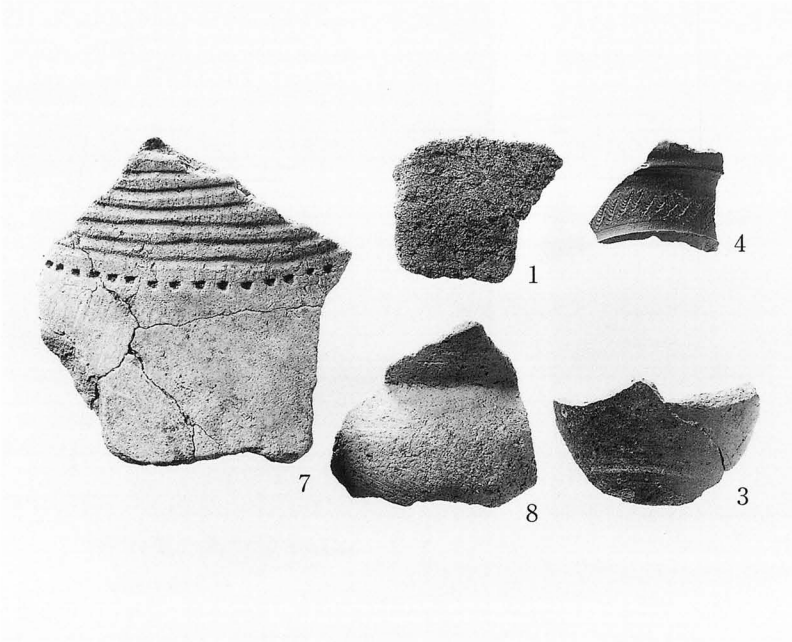
3　土塁土層断面（東から）

図版10　坂長下門前遺跡３区

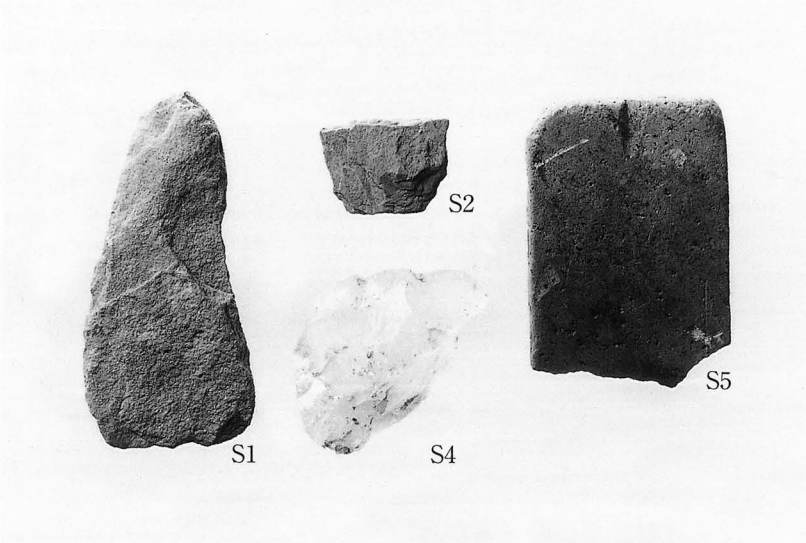
1　SK6出土土器



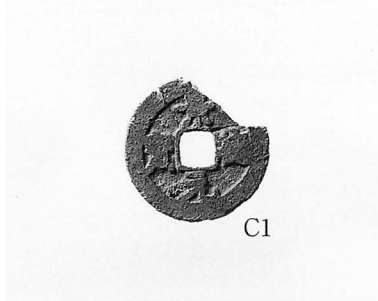
2　３区出土土器（１）



3　３区出土土器（２）



4　３区出土石器



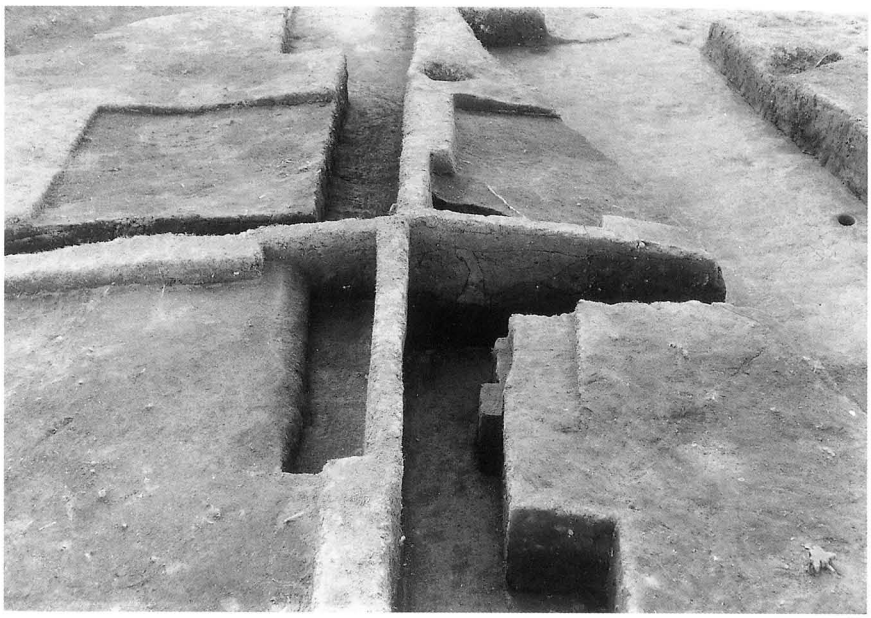
5　土塁出土古銭

1　坂長35号墳全景（上が北）

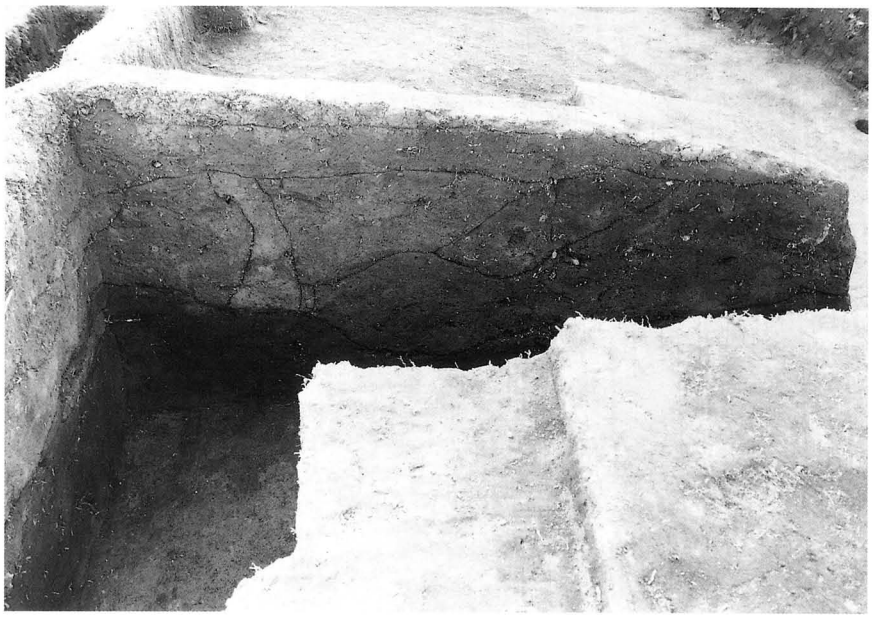
2　坂長35号墳（東から）

図版12　坂長35号墳

1　棺痕跡検出状況
（北から）



2　棺痕跡完掘状況
（北から）



3　棺痕跡土層断面
（北から）

1　墓壙完掘状況
（北から）

2　墳丘除去後の状況
（東から）

3　墳頂土器出土状況
（東から）

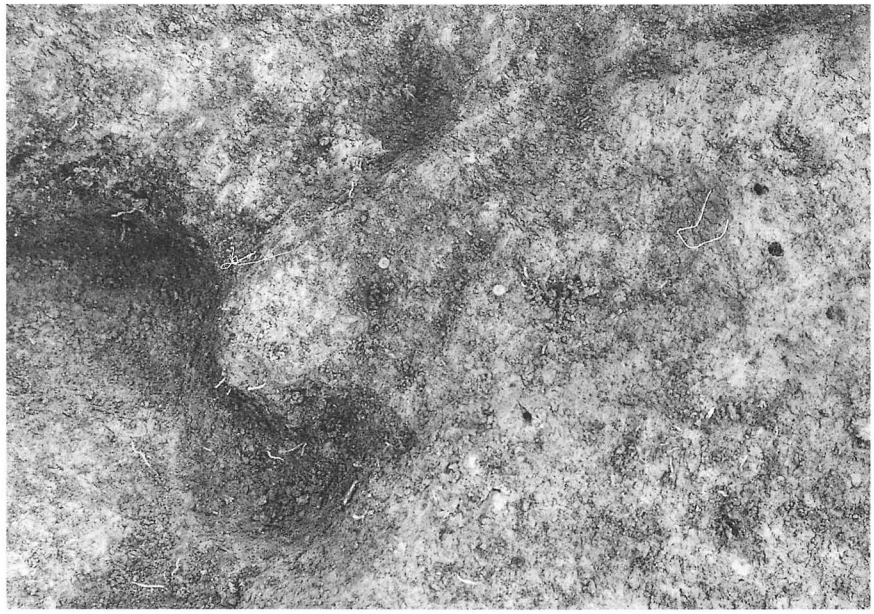
図版14　坂長35号墳

1　周溝土器出土状況（1）
（南から）

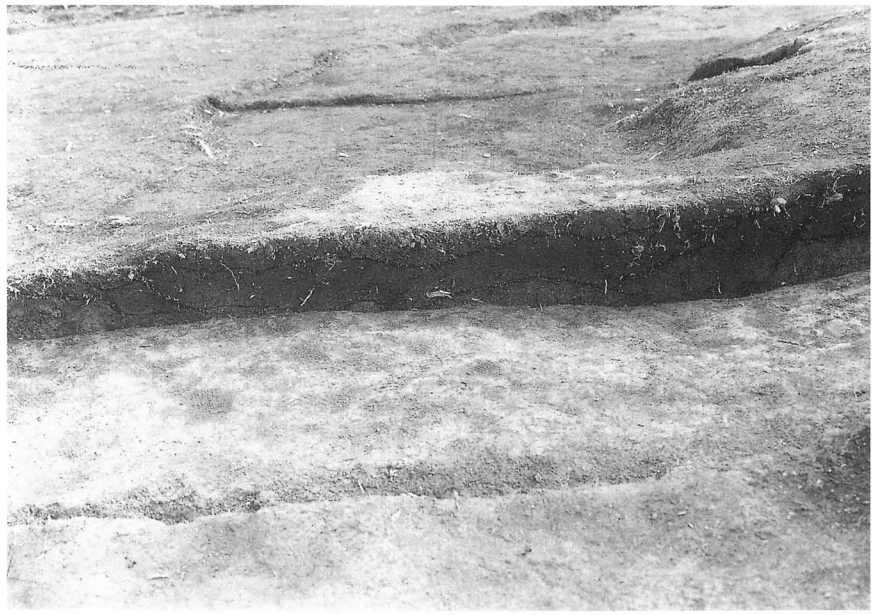
2　周溝土器出土状況（2）
（南から）

3　周溝土器出土状況（3）
（北から）

1　周溝土器出土状況（4）
（南から）

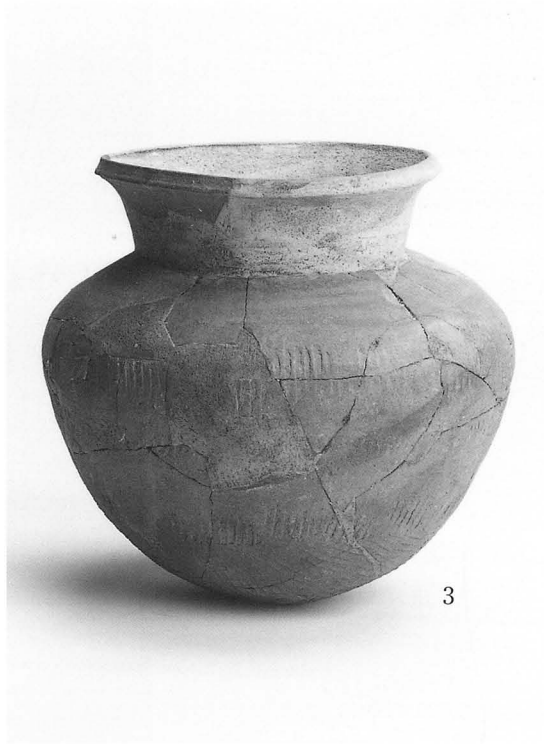


2　周溝玉類出土状況
（東から）



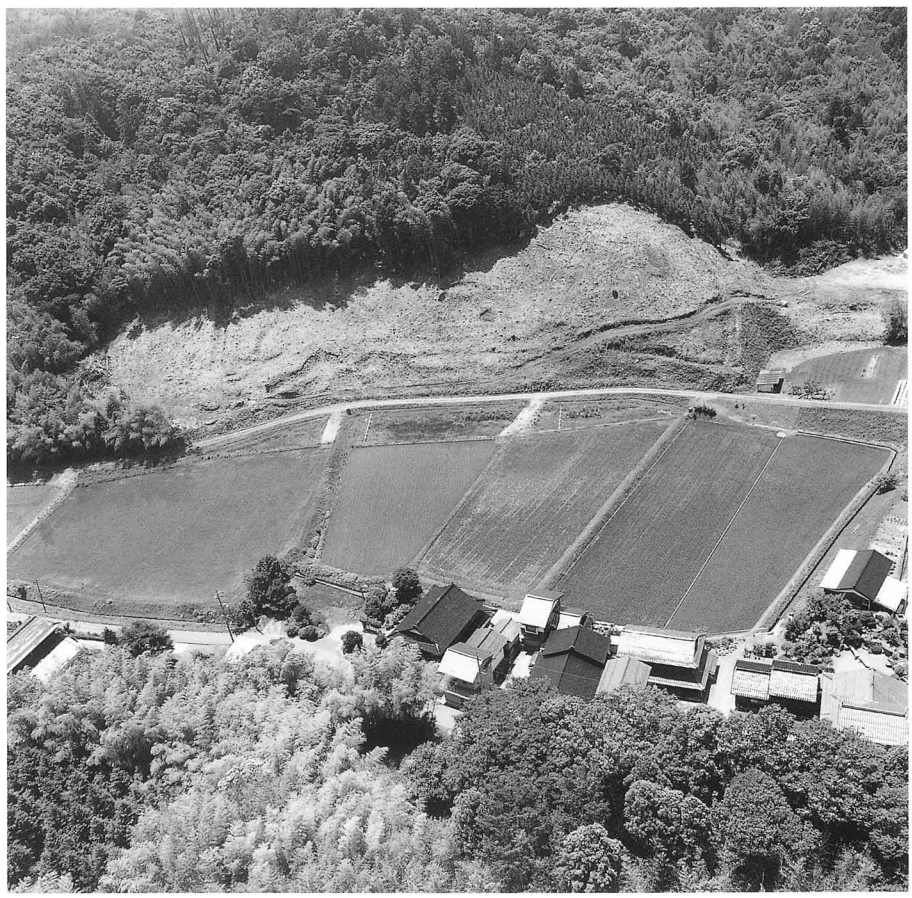
3　周溝土層断面
（西から）

図版16　坂長35号墳



出土土器

1　調査地周辺の地形
（西から）



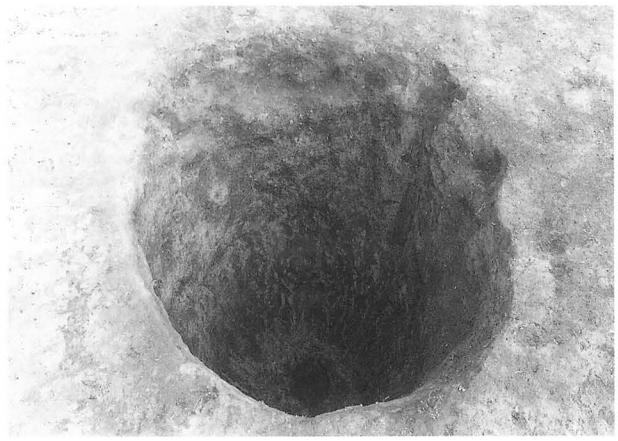
2　調査地周辺の地形
（北西から）

図版18　坂長ヨコロ遺跡

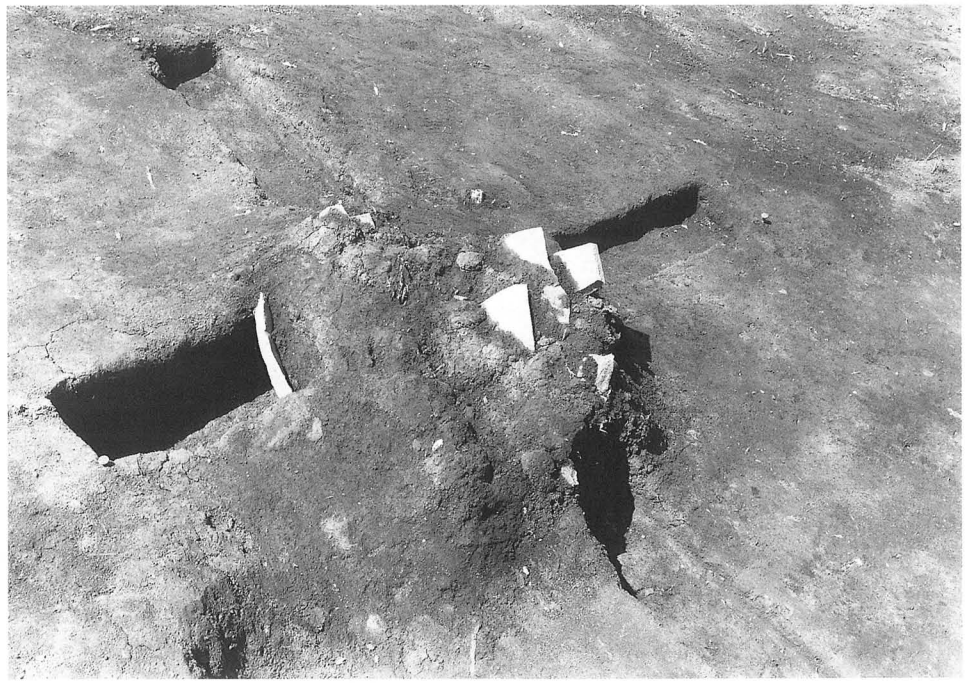
1　1区調査終了状況（南東から）

2　2区調査終了状況（東から）

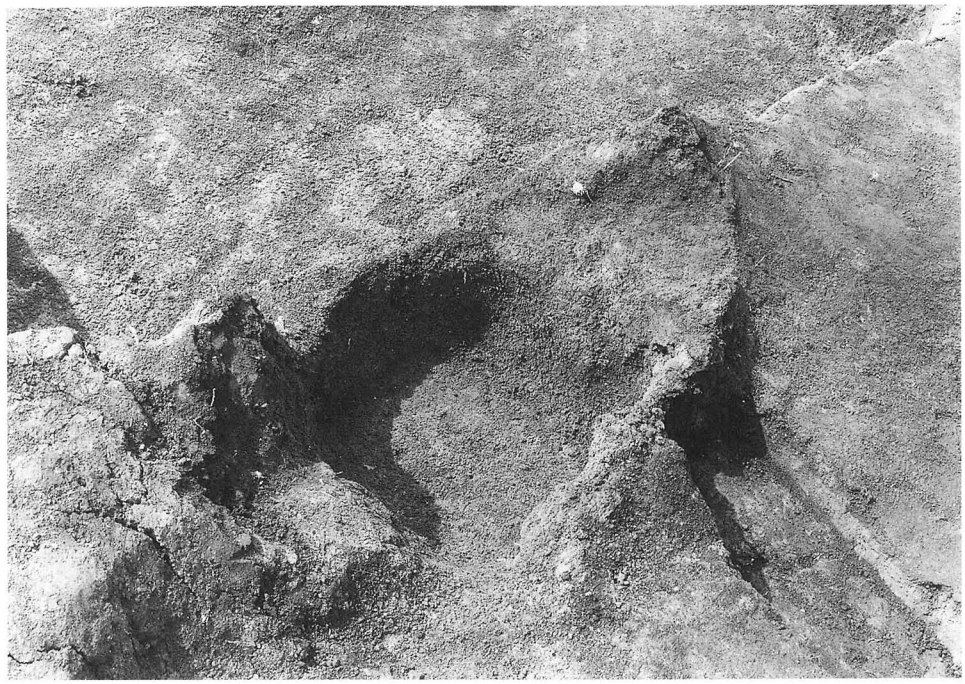
1　SK1完掘状況（東から）



2　SK2完掘状況（北から）



3　SX1検出状況
（東から）



4　SX1完掘状況
（南東から）

図版20　坂長ヨコロ遺跡

1　SX2墓壙検出状況
（北東から）

2　SX2土層断面
（北から）

3　SX2完掘状況
（北から）

1　SI1床面検出状況
（北から）

2　SI1土層断面
（南東から）

3　SI1床面土器出土状況
（北から）

4　SI1完掘状況
（北から）

2

6

3

8

1　SI1出土土器

10

11

2　SX2出土土器

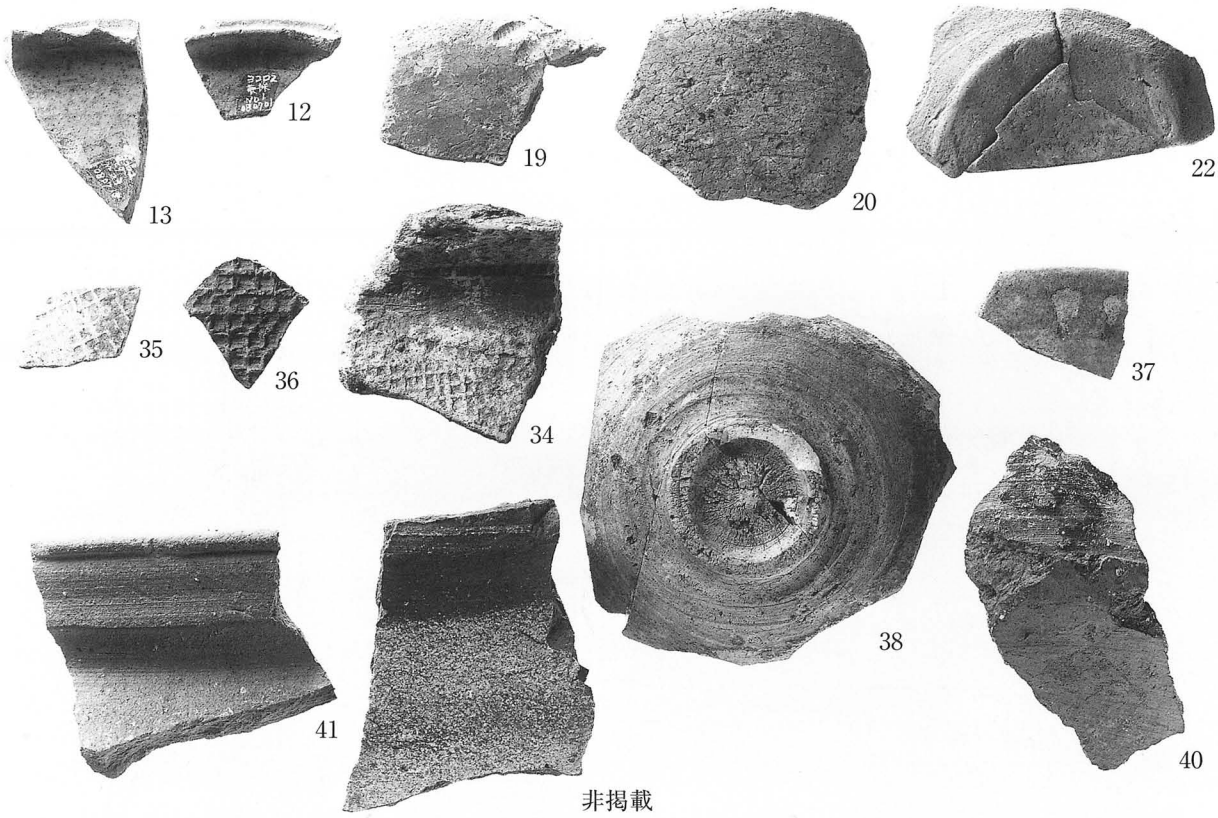
21

27

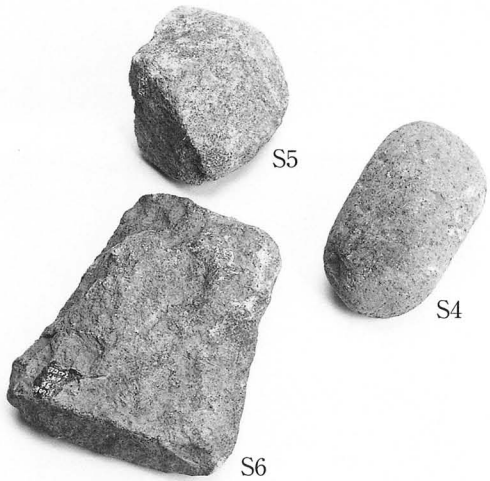
24

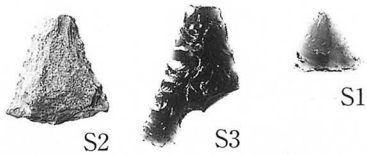
28

3　遺構外出土土器（1）



遺構外出土土器（２）





1　出土石器・石製品

2　出土鉄製品およびX線画像

1　1区調査前の状況
（北から）

2　1区調査終了状況（西から）

図版26　坂長熊谷遺跡

1　2区調査前の状況
（北から）

2　2区調査終了状況（西から）

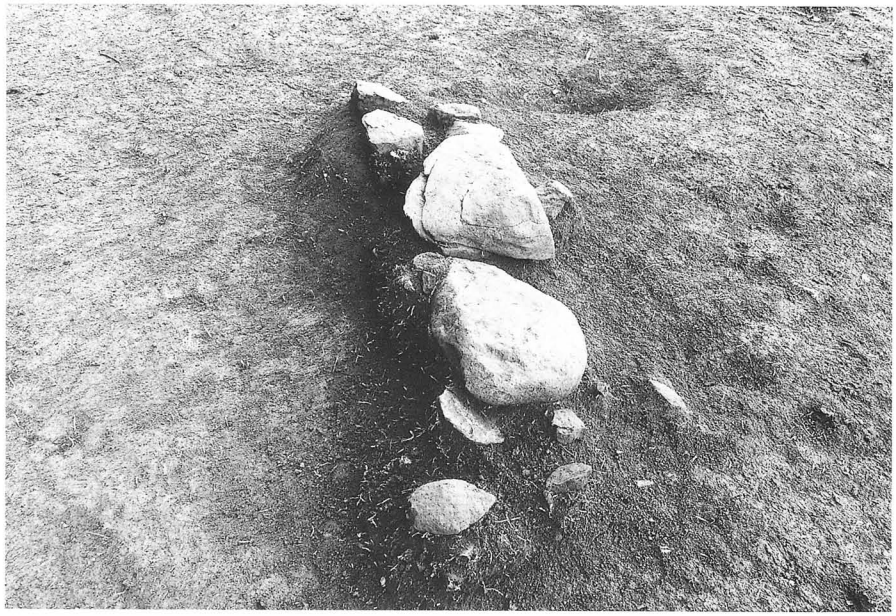
1　1区SK1完掘状況
（南から）

2　SD1完掘状況
（南東から）

3　SD2完掘状況
（西から）

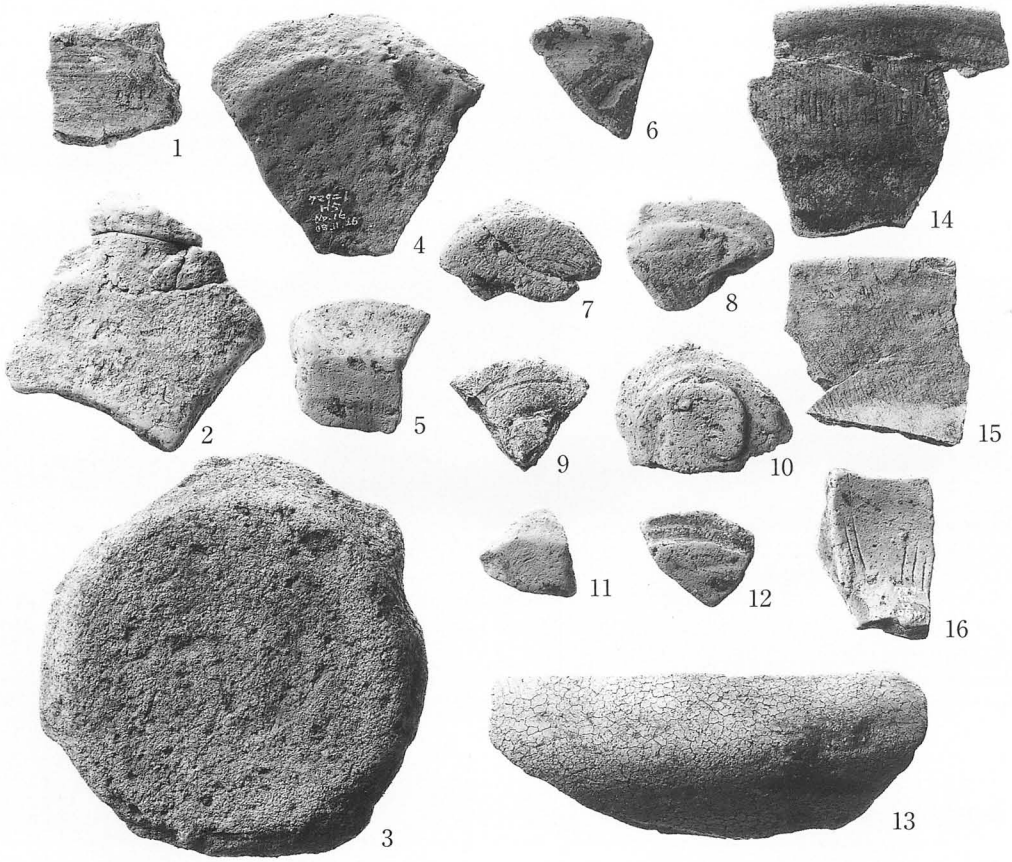
図版28　坂長熊谷遺跡

1　2区SK1完掘状況
（南から）



2　石列1（東から）

3　石列2（西から）



1　1区出土土器

2　2区出土土器

1　1区出土青磁

2　1区出土石鍋

3　鉄器およびX線画像

報告書抄録

ふりがな	さかちょうしももんぜんいせき２　さかちょうよころいせき　さかちょうくまたにいせき
書名	坂長下門前遺跡２　坂長ヨコロ遺跡　坂長熊谷遺跡
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	114
編著者名	高橋　浩樹　　高橋　章司　　坂本　嘉和
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室
所在地	〒680-1133　鳥取県鳥取市源太12番地　TEL（0857）51-7552
発行年月日	西暦2010年（平成22年）３月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちょうしももんぜんいせき 坂長下門前遺跡 さかちょう35ごうふん 坂長35号墳	とっとりけんさいはくぐんほうきちょうさかちょう 鳥取県西伯郡伯耆町坂長 あざしももんぜん 字下門前2017ほか	31390 31390	1-370 1-227	35°22′39″	133°23′39″	20080324～20080529 20080724～20081104	3600m² 4500m²	国道181号（岸本バイパス）道路改良工事
さかちょうよころいせき 坂長ヨコロ遺跡	とっとりけんさいはくぐんほうきちょうさかちょう 鳥取県西伯郡伯耆町坂長 あざよころ 字ヨコロ1888ほか	31390	1-374	35°22′35″	133°23′56″	20080617～20080820	2420m²	国道181号（岸本バイパス）道路改良工事
さかちょうくまたにいせき 坂長熊谷遺跡	とっとりけんさいはくぐんほうきちょうさかちょう 鳥取県西伯郡伯耆町坂長 あざくまたに 字熊谷1854ほか	31390	1-375	35°22′35″	133°23′08″	20080908～20081203	2780m²	国道181号（岸本バイパス）道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂長下門前遺跡	その他の遺跡	縄文時代 古墳時代 中～近世	落とし穴　15基 墓　3基 土塁　1条	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、古銭	
坂長35号墳	古墳	古墳時代中期	円墳　1基	土師器、須恵器、滑石製玉、ガラス玉	坂長下門前遺跡３区内
坂長ヨコロ遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 中世	落とし穴　4基 竪穴住居　1棟 墓　2基	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石鏃、石灯籠火袋、古銭	備前焼壺
坂長熊谷遺跡	その他の遺跡	縄文時代 近世以降 時期不明	落とし穴　1基 石列　2条 溝　2条	縄文土器、陶磁器、石鍋	

鳥取県教育文化財団調査報告書　114
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡2
坂長ヨコロ遺跡
坂長熊谷遺跡

発　行　2010年3月19日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団　調査室
〒680-1133　鳥取県鳥取市源太12番地
電話（0857）51－7552
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　勝美印刷株式会社